

は、露は其葉春生て夏盛に秋冬かけて葉少くやせおとろへ冬より其葉の本に玉の形したる花を生し春に至りて咲也其さま子持と云によしあり茸キノコの類丸形の物に子の稱多しそれを女に譬へて子持待コトモぬらんといふ也はやひかすは露を取にて菖蒲引など根ながら物するを云男の歌にて此女に子さへ産ウツせたるをとて引取て吾家にも入れなは女も安かりなんを心にまかせぬ事にて捨置まゝに女は子持となりていつかくと待瘦ぬらんの意にや近江志野路の名有し所か又は女の居所か成へし○入綾逢路を男女逢路の意に解たれとアフミチと云語いかゝあらん路にて逢はさる事ながら路は往來の道にこそあれ逢所にはあらずされは語をなしかたくや

道口

みちのくちたけふのこふにわれはありとおやにはまうしたべこころあひのかせやさきんたちや

上さし櫛にたけくと有同所にて越前國丹生郡武生國府成へし前中後有國はミチノクチミチノナカミチノシリと常に云り國に在は京人なるへし意は聞えたり心合の

いかにせんをしのかも鳥いで、ゆけばおやはありくとさいなめど夜妻さためつ

をし鴨といひて鴛も鴨のうち也と云りさる事成へし鴨は種類多くてかる鴨小鴨なとさまゝ有鴛も同く群浮ひて同種と見ゆされはをしのかも鳥ともつゝけし成へし出て行はといひおこさん爲也水鳥類は羽音高く群立ものなれば朝鳥の朝立行むら鳥の我むれいなはなと云おやはありくとさいなめとは父母のみたりに夜行して女にくまふそとてさゝへいなむ也さいなむは塞サヘいなむ成へし夜妻は定つとは妻とすへき女は定め得たりと云也夜行すれば親の心にはそむけとも出て逢女は約定せりいかにせんと云意成へし伊天々由加波と有は前後にかなはず眞淵朝妻と云詞を引て晝も向ひするたるは本妻也夜妻は其裏にて夜のみひそかに逢妻にて忍妻也と云るは過たり妻は閨房中の契りにて夜を専らにすれば夜妻といふのみ

鶏鳴

とりはなきぬてふかささくらまろがしがものをおしはし

風は吾心と同じき風也心合の友といへは隔なく親しく同心の事也さる風故にあつらへ告る也入綾心あひの説むつかし

更衣

己呂毛加戸世牟也沙岐牟太知和加岐奴波乃波良之乃波良波岐乃波奈須利也沙岐牟太知也
衣がへせん我衣は野原しの原萩の花すり

更衣は四月の更衣にあらず我と人と衣を取かへきるを云古へは互に衣をかり又取かへもせしさま也野原篠原以下は吾衣の摺フのよきをいへり○入綾につれなき人を戀とて我衣は野原しの原いきかよふほどに萩か花摺となれりいざ衣がへせんやと女に云を直にさきんだちへかけたる也と解るはわろしわろくなりたるをぬきかふる調ならんや聞へし野原篠原は萩の咲所を云るにてふせい也

何爲

伊加爾世牟世牟也乎之乃加毛止利伊天由加波於也波安利久止左伊名女止與川萬左太女川也沙岐牟太知也

きたりるてすれながこなすまで

てふは植槻の歌のと同じく歌ふ詞成へし笠櫻丸本抄の人名と云説によりて考へしは笠は氏櫻麻呂は名にて其人の通る女の歌成へししが物は汝が物にて紀の歌にしがなげは土佐日記にしが足はなといふしがにてそれがと云か如し物は男根をあらはにはて聞せたる詞おしはしの所は説かたけれと發起させ來り居てと云やうの意歎すれば即交合也是もあらはにはて聞せたる詞齊明紀にをやしに我をひきてせし人のなと有か如し爲るは何事も皆する也物は何も皆物なれとかうやうの事は古もあらはにはて聞せたる成へし汝か子成すまては女の腹に子を懐むまで成へし養ひ子をなさぬ子と云の返也櫻丸數會に及ふ間に鶏の鳴たるとやうの事にやといひ試みたりしに入綾をみれば○とりはなきぬてふけさくらまきれしたひものをおしすがりるてこそとゞこほれなくこなすまでと有本によりて鶏は鳴ぬと云今朝サクラマキ閣シタヒ混れ下紐オシの緒に押すがり居てこそとゞこほれなく子なすまでと解て逢し夜のつとめての別に女のと

りつき滞るさまを云也と云り此方義理も聞ゆれば用へし已かおもひしは櫻丸人名と云先入の誤成へし

老鼠

爾之天良乃於以禰須美和加禰須美於牟裳都无川介左川无川介左川牟川法師ニ末宇左牟師ニ末宇勢法師ニ末宇佐牟師爾末宇勢
にし寺の老鼠若ねずみおんもつむつけさつむつほうしにまうさん師に申せ

御裳袈裟を鼠の喰たる也嚼は齒にて物をほりくゝと喰を云田舎にて餅の霰いり豆の類を喰をつむといへりもとより鼠の物くふにもいへり法師に申ん師に申せとはほうしは侍者沙彌の類にて師は貴主すなはち法師か師也法師も師も同じやうなれと法師は輕き方にいひならして中間法師下司法師など云り今俗ほうすと云に同じさて是は裳袈裟を鼠の喰損したるをはしめて見出て人の惡事を訴ふるやうに我此事を見つけたり法師に告て師にうつたへ申さすへしと云意も見つけたる人は下部にて直に貴主にいひかたければ侍者に告ていはしむる

本名は開とありと云也和名抄に房内經云玉門女陰名也楊氏漢語抄云尿通鼻と有是也さて一本にくほをくをと記しつびをつらとあるはつつましき事故に唄聲の然か聞ゆる所を記せし也次の詞どもをも此でうに心得てとくへし○けふくなく毛ふくれ囊にてこは男陰を云也萬葉十六丁にうましものいづくあかぬをさかどらか角乃布久禮爾しくひあひにけんと有此角のふくれも男陰を云り囊は和名抄に針灸經云陰囊俗云布久利と有是也此根と囊とを相兼て云こと今俗の男陰を指て金玉とも云か如し○たも賜はれと云ことの約れるにやあらん今の言にも賜はれと云ことをたもれと云と同例なれば也○ひのなかの尿の中のと云を此は都を省きたる也○ひつきめな此句心得かたし一本ともにはひつきめと有てな字なし嘉禎本の或説にひつきめと有此等を相合せて考るにひつきめなにて屎つくめなとの上略なるへし口をつくむなと云箒にて書紀には閉字をつくめとよめりもし此意ならば是も屎閉めんと云にてんをなと云は古言の格にて萬葉に例多しさて屎の中の屎とは俗にい

也西寺は京にも奈良にも有いつれにや

隱名

くほの名をばなにとかいふくほの名をはなにとかいふつらたりけふくなくたもろひのなかのひつきめけふくなくたもろ

くほの名云々こは次々皆醜婦を罵りいふ稱を並へ舉たる成へしまつ久保は女の面の中くほなるを云俗におたふくと云類成へしつらたりは頬垂にて俗にほうたれと云けふくは黻と云病有りて和名抄に肉憤起也と有萬葉に角乃布久禮などいひて醜きさまの面也毛黻はそれに毛さへ生たる成へしなうたもろ以下解かたけれと古へ醜婦をおとしめいふ詞と聞えたりと註し侍しか是も入綾に○くほのなをばなにとかいふつびたりけふくなくたもろひのなかのひつきめなと云に依て○くほの名をば今按に女陰の一名にて上古に保登と云る類也新撰字鏡上卷ニ云尿音朱開也久保とある是也屎は玉門を朱門と云に同じ和名抄にも出たり次に引へし○なにとかいふ一名は久保と云が本名は又何とか云と也○つびたりその

はゆる子孫と云物を指るにて玉門の奥區を云也一篇の意は開の名を何とかいふ其本名は尿たり然らば毛陰囊賜はれかし屎の中の子壺を箒めて子を生さんと云成へしか、れは陰陽和合の歌なるからに律と呂との間に置るならん上といへり此考明なるやうなれば用へし其中に毛陰囊と云る語如何あらん證例もひかす又根囊相兼て金玉と云なとも心得す考へし屎はとにて陰門奥區を云歟吉舌を比奈佐岐と有もヒノ先と聞ゆれば也もしさらはつゝむつほむつむなとの心にて陰門の意にやひの中のひの詞聞ゆへし又萬葉十六の歌は角乃布久禮醜士の顔面のうたにとらされは聞えかたし左注の文應下姓醜士之所誂也と有にかなはず是を男陰の事としては高姓美士といへとも男陰なき人はなければ也但し守部は此歌も別解有にや陰陽和合の歌なるからに律と呂との間に置の説はいか、催馬樂は呂律と立るの説も有をやすへてかうやうの歌は解かたく意得かたきも尊き事也たとへは器物の如き彫の消失たるあかつきてさだかならざるに古色も有事なり證據あればと

て余りいひあらはしては再ひ謠ひあくる代もなかるへ
しされと解なす人出きぬれば又其うへをもいはてはあ
られぬわさ也歎へし

梁塵後抄 催馬樂 下

呂

安名尊 三段

安名太不止介不乃太不止左也伊爾之戸毛波禮 二段伊爾之
戸毛加久也安利介无也介不乃太不止左 三段安波禮會已與
之也介不乃太不止左
あなたふと今日のたふとさいにしへもかくや有けんけふ
のたふとさ

此歌は一時さる事にあたりてよめる成へし意は明らか
し

新年

安太良之岐止之乃波之女爾也加久之已曾波禮 二段加久之
已曾川加戸末川良女也與呂川與末天爾 三段安波禮會已與
之也與呂川與末天爾
あたらしき年のはしめにかくしこそつかへまつらめ萬代
までに

續日本紀聖武天皇天平十四年正月十六日天皇御大極

つ

古今集春部に出諸注春かけての説非也正義に梅か枝に
冬より來居る鶯のけふは春にかゝりてさへなくにいま
た雪は降つゝと雪の春色を妨るを厭へる歌也といへり

櫻人 二段

左久良比止曾乃不禰知々女之末川太乎止末知川久禮留見
天加戸利已牟也會與也沙須加戸利已牟也會與也 二段 已止
乎已曾安須止毛以波女乎知加太爾川萬左留世名々禮波安
春毛左禰已之也會與也沙須毛左禰已之也會與也
さくら人其船ちよめ島つ田を十町作れる見て歸り來んさ
すかへりこん 二段 言をこそ明日とはいはめ彼方に妻さ
るせなれば明日もさねこじさすもさね不來

契沖云櫻は所の名にて難波人須磨人と云たくひ成へし
和名抄に尾張愛智郡に作良郷ありそこの人をいふか云
々と云り其船ちよめは諸説の如くとよめ成へし一本に
は止々女と有島つ田は海中の島に有田也故に船にて行
へし十町作れりは多く作成へしさすかへりこん諸説皆
明日也といへれどさすはさあすにてさきの明日明後日

殿^宴群臣^{云々}又賜^宴天下有位人并諸司史生^{於是}
六位以下人等鼓琴歌曰新年始爾何久志社仕奉良米萬
代麻豆丹と有歌也古今集大歌所におほなほひのうたと
て下旬千年をかねてたのしきをつめと有左注に日本紀
にはつかへまつらめ萬代までにとしたるを同歌として
彼此云説あれとよろしからすそは師の正義に辨しおか
れたり真淵云初春をいふのみならず久邇新京にての事
なれば兼ていふにも有へしと云るはあたらず新しき年
の始にかくしこそとは年の始毎にかくこそといふにて
今よりは毎年かくあらん事をねかふ意なれば久邇の新
京をあたらしき代の始と祝ふにはあらずさて上の穴尊
ももし此同日の詠にはあらぬか二首連ねて時情よくか
なへり

梅枝

牟女加衣爾岐井留宇久比須也波留加介天波禮 二段波留加
介天名介止毛伊萬太也由岐波不利川々 三段安波禮會已與
之也由岐波不利川々
むめが枝に來居る鶯はるかけてなけともいまた雪は降つ

也西國にて一昨日明後年サトヒヒと云サ也又本抄にはしやすともあり志明日也明後々日シラサテといふ語もありさて一段の終のは見て歸りこん明日歸り來んとなくてはかなはず二段の終のは明日もさねこじさすもさねこじと有へし歌は櫻人よ其舟と、めよ我島つ田を多く作り打乗行て見てかへりこんといふ意一首也結句を再び返して明日かへりこんと云成へし二段は家なる妻か詞にて明日記に許登袁許曾須宜波良登伊波米云云日本紀に去等鳥許曾哆多瀨等異絆梅云々と有類にて言にこそ云々といへ實は云々と云意也彼方に妻さるせな入綾に枕片去とも夜床加多左里ともよめる左里にて彼方に思ヒ妻を避おくを云なり此句一わたりは妻を避て彼方へ行ク夫なればとも聞ゆるやうなれと此二段は女の詞なれば避ち置クかくし妻を妬がりて云にそある換言に妻よはふ人なれば昔も其意にとれりし也といへり此説しかるへしおやさくる妻なとも親の避る妻なればさけ置妻と云意なればさも聞ゆへし二段は家なる妻か詞なれば言に

こそ明日歸りこんとのたまへ彼方に思妻あれは明日もこじさ明日もこじし明日もこじと云也さあすは明後日しあすは明後々日也さねはかるく付云詞にてさねあらすさねなしといへり

葦垣

安之加岐末加岐末加岐加岐和介天不已須止於比已須止波禮二天不已須止太禮加太禮加己乃已止乎於也爾末宇與己之末宇之之三止々呂介留己乃以戸己乃以戸乃止與女於也爾末宇與己之介良之毛四安女川知乃加見毛加見毛曾宇之太戸和禮波末宇與己之末宇左須五須加乃禰乃須加名須加名岐已止乎和禮波岐久和禮波岐久加名。あし垣まがきかき分てこすとおひこすと二段たれか此事をおやにまうよこし申し三段と、ろける此家のおとよめおやにまうよこしけらしも四天地の神もそうしたべ我は申よこし申さす五菅の根のすがなき事を我はきくかな

てふは田中の森や森や天不の類かおひこすは負越にて歌は声の籬をかき分て夜々大家の弟婦を負て忍ひ出る

者ありと誰人か此事を父母に申説しと云也三段は再びいひて同し事也と、ろける此家の弟婦をとを文字入て聞へし契沖云日本紀萬葉に讒の字をヨコスと訓たれば申讒也清き物を汚すをヨゴスと云讒者はよき人をいひけかす也と云れとヨコは横の意にて正直なる事を偽りて横さまにさまたくる成へし萬葉に人言のよこすを聞て我脊子が云云なとよめり三段と、ろける此家の弟婦とは繁榮の大家は従者も多く人の出入もしけ、れは轟くといへりさる家の弟婦なれば父母の寵愛も殊更也さるを夜々垣越て誘ひ出す男ありと讒したる人有と云也弟婦か讒したるといふ説はとるへからず四段よりは誰か此事を云々といはれたる人の答へたる意也天神地祇も證し給へ云々は古への淳朴のならばせにて何事にも偽なしと云證に天地の神云々と云しと見えたり我は申讒し申さずと也五段も同人の言葉也菅根は詞をかさぬるのみすかなきは入綾にすけなきなと同言にておもひやりなく心つよく物云こと、聞ゆと云り物いふ上に限る語にはあらねと意はさる事なるへしこ、は無實の事

をさくもの哉と歎息する也 本抄と、ろけるは家の落破れたる心也と有よろしからず又家に在男の女をつれて垣を負こしたる事のあるをおやの知りたるは弟婦を告たるらんと云事也と云るもよからず家の男子女をつれて垣越て去りなは何ぞ弟婦の告をまたん又弟婦の弟は其娘を愛して云稱也大領の弟むすめ龍宮の弟姫の類也 讒者をいふに美稱もいか、眞淵はと、ろけるは物さわかしき生れなる弟婦也といへりいよ、わろし入綾も弟婦を讒者としと、ろけるこの家を一段の終につけてわれ忍々垣を踰てうしろぐらき事するやうに誰か此事を親に讒言せしその横言によりて此家をうちと、ろきさわけりこは家のおとよめが横言せしならんと云に弟嫁聞て天地の神たちも證し給へわれはさる横言はせず思ひよらぬすけなき事をも聞もの哉となりと云り四垣密夫を覓よし也といへるを見れば女の垣を越て外へ出る也又おひこすは追越なりといへり何を追にやふみこすはさても有へしかくては其家に弟婦と今一人女有ての問答也親に告るなどは必弟婦か事を外人の父母に

告るならては事情かなはずや

山城 三段

也末之呂乃己末乃和太利乃宇利川久利奈與也良伊之奈也
左以之名也宇利川久利宇利川久利波禮二段宇利川久利和
禮乎保之止伊不伊加爾世牟奈與也良伊之奈也左以之名也
以加爾世牟伊加爾世牟波禮三段伊加爾世牟奈利也之名末
之宇利太川末天爾也良伊之名也左以之名也宇利太川末宇
利太川末天爾

やましろのこまのわたりのうりつくり我をほしといふい
かにせんなりやしなまし瓜たつまでに

狛は地名山城國相樂郡瓜の名所とそ瓜作りは瓜を作る
人にて男女共日毎に瓜畑にて出會をもて此男其女を妻
になれといふ也 萬葉に山城の久世のわく子がほしと
いふ我あふさわに我をほしといふ山しろの久世と有同
意也さて是は女の歌にて我を妻にほしといふいかにせ
ん意に隨んやいかあらんと也男女の中らひになるな
らぬと多くいへりなりもならずもねてかたらはんの如
し瓜立まては瓜の花より漸大く成を瓜立といひけん

まかね吹吉備の中山おひにせるほそ谷川のおとのさやけ

古今集大歌所の歌に出萬葉にも大君の御笠の山の帯に
せる云々みもろの神の帯にせるなと河をいへる同しつ
けあり帯にせるは山の腰をめくるを云まかねは眞は
例の美稱にて金也此山などより堀出るは專鐵成べし吹
は其あら金をたゝらにかけて吹て出すを云也

紀伊州 二段

岐乃久爾乃之良々乃波末爾末之良々乃波末爾岐天井留加
毛女波禮會乃太末毛天己二段加世之毛不伊太禮波名己利
之毛太天禮波美名會己岐利天波禮會乃太末美衣春
紀國のしらゝの濱に眞しらゝの濱に來て居るかもめ其玉
持來二段風しも吹たればなごりしも立れば水底きりて其
玉見えす

天治譜に残リ二段近代絶不レ歌仍不レ注セ其詞也とあり然
に神樂ノ本あめなるひはり云々の次に入て本末四段と
なる今こゝに舉 本之良々乃波萬爾萬志良々乃は萬に於
利爲留加毛女會乃多萬毛天古末加世之毛不以多禮は奈

か立はものゝ成立也さて是はかりそめの會事にて生涯
の妻に定るといふやうの事にはあらず一時の事なるへ
し故に瓜作る間の事也 しなか鳥いなふし垣網さす
やの歌又詩の丘中有麻の類思ふへし入綾に處女初得
薦ニ寢於人ニ曰ニ破瓜一と云こと猶漢の例をあまた引
て童女の初て男する事に解るめつらしき考のやうなれ
とまさしくそれを瓜たつといひし例は聞えずまたさた
めなくなるなる瓜のつら見てもたちやより來んこまの
すきものと云たちやを瓜をたつといふにもうけたりと
云は強たり又我をほしといふいかにせんを女の詞とし
そのいかにせんを男の詞にも用ひてなりやしなましを
男のうたとせる甚あるましき解也つらねて女の詞とき
こゆ

眞金吹 二段

末加彌不久岐比乃名加也萬於比爾世留奈與也良伊之奈也
左以之名也於比爾世留於比爾世留波禮二段於比爾世留保
會太爾加波乃於止乃佐也計左也良伊之奈也左以之名也於
止乃左也於止乃左也介左也

古呂之毛多天は美那會古奈利天會乃多萬會乃多萬美江
が 本加世之毛也美奈は奈古呂之毛爲奈は安佐利天毛
天己會乃止會乃止之萬仁 未會乃者止會乃は都志
萬に加世志毛也美奈は古乃多萬安佐利毛天加毛 白良
濱は入綾に南紀名勝志云牟婁郡白良濱は瀬戸庄湯崎村
海邊十町許を云とありと云り眞は例のにて吉野美吉野
の美の類かすへて濱は眞砂の白きものなれはいひ出し
成へし來て居る鷗其玉持來は海底の玉をかつき出て持
ちきたれと也蝮玉ともいひすへて貝類貝殼の磨けたる
光ある丸石の類皆玉と云と見えたり歌によりて心得へ
し二段は鷗の答る意也風しもなごりしものしもは助言
也波瀛は風の吹止たる跡に波の立残りて有を云萬葉に
なごりとも云る同し詞也水底きりてはくもりて見えぬ
也霧と云もさへきるの稱にてきらふなと働けても云也
さて神樂に入たるノ本四段もおもしろき續き也初紀國
のとなくて志良々乃濱に眞志良々の濱にと云出たるい
とよしおり居る鷗もよし水底なりては浪に鳴にや見え
ずと受るにはきりてのかた勝れるか風しも止なば波瀛

しも居なばよく聞えたり浪は立もの故其靜るを居ると云あさるは水底の玉を取を云意を得て求食なども書りはと島は今海邊湊などに石垣に築出たるを波戸と云り此古き名成べし島は必海中ならでも凡にいふべしさらば鷗の玉かづき出て持來べき所也終りの安佐利毛天加毛はあさりもて行ん也上のくつかひにかんに同し牟毛は同音に用ひたり

葛城 三段

加川良岐乃天良乃末戸名留也止與良乃天良乃爾之名留也二段 衣乃波井爾之良太末之川久也末之良太末之川久於々之屯止於々之屯止 三段 加之天波久爾曾左加衣牟也和伊戸良曾止美世牟於々之屯止於々之屯止於々之屯止於々之屯止 屯止
かづらきの寺の前なるや豊浦の寺の西なるや榎葉井にし
ら玉しづくや眞白玉しづくしかしては國ぞ榮んや吾家等
ごとみせむ

こは續日本紀三十一光仁紀の童謡也曰天皇諱白壁王云々又嘗龍潛之時童謡曰葛城乃寺乃前在也豊浦寺乃西在

し風俗歌に我門にしだる小柳しだるかいで葉國ぞ富せん郡ぞ昌ん郷ぞ富せん吾家ぞ富せん云々といへるも柳雞冠木の若葉のしたりたるはいかにも富榮えたるおもむき有物なるをいひて云々ぞ富んといへり今は家作り墻壁の光澤をいへればいよよく聞えたりさて其白壁の詞おのつから皇子の諱に合ひ櫻井の井の詞も内親王の名によしあれは識者配妃登極の徴とせし成べし童謡は其意ありて作れるものにあらずさて後樂府に歌へるには白壁はいかにそや聞ゆればうるはしく白玉眞白玉とかへられたる成べし櫻井榎葉井は何れにても有べし換たる意をたすけいはは其井の清水を汲あくるやかに白玉なしてしたる雫の水底に沈むけしきを云へしされとしかしては國家富昌るとつゝけたるにはよくかなへりともなくや打つけに家作り墻壁のきら／＼しく映るにはしかし〇入綾に豊浦寺の事行囊抄を考るに云元興寺は飛鳥村西南久米寺へ行方に在豊等村ノ内也昔ハ四方ニ四門ヲ建テ四ノ額ヲ掛タリ扁曰東門ニハ飛鳥寺西門ニハ葛城寺一本ニハ法興寺ト誤リ南門ニハ元興寺北門ニハ

也於志止刀志度櫻井爾白壁之豆好壁之豆也於志止刀志然爲波國昌也吾家昌也於志止刀志度于時井上内親王爲妃識者以爲井上則内親王之名白壁爲天皇之諱蓋天皇登極之徴也この歌を傳へてうたひならしたるもの也葛城寺豊浦寺の事は次にいふべし先續紀の童謡を解く古今集に水のおもにしつく花の色さやかに云々と有は水の上に咲靡ける花のあり／＼とつるをさやかかの序にいへり今此歌のしづくも其類にて白壁のきら／＼しきが井の水底に見ゆるをいふもとしづくの詞は下着にて水底に在るをいへと影のうつりて水中に在か如きをいへり壁は和名抄壁和名加開室之屏蔽也と有又墻壁具に石灰波比白土波比と有て壁を塗る事今の白壁に異ならずされば櫻井の彼方此方郷里富榮えて家作りのきら／＼しき白壁の水底にうつる見て歌へるなり好壁よきかべと訓にやもしは其白塗の琢磨至れるものを眞壁ともいひけんか今眞壁といふ名の有にて知りぬまらば好壁の字マカベとかマシラカベとか訓へし後にうたひかへたるも白玉ましら玉といへれば也好の字は壁を美る詞しる

法滿寺ト云境内方二二町余最坊舎數十宇有シト也今ハ僅ニ二間三間ノ瓦葺ノ御堂ニ御丈一丈釋迦佛ノ銅像一體昔ノ餘波ニ殘レリ云々豊浦寺云是也」又大和巡路記に此寺の記録とて引て右の趣に云り然れば此寺東門は飛鳥に向ひたる故に飛鳥寺といひ西門は葛城に向ひたる故に葛城寺といひし成へし推古御時葛城邊にいまた寺あらざりければ彼四ツ五ツの寺號の中にも豊浦は本の大宮の號飛鳥葛城は地名なりける故にかの四天王寺を難波寺といひしやうに専ら此二ツを以て呼しならんかし然るときは別に葛城寺と云か有しにはあらず今此四句は彼榎葉井の在方角を此寺の前通りにして少し西の方にあるよしを詞をかへて云るにて二寺のあはひと云にはあらず云々と猶くわしくいへり此説よし舊説色々解わつらひて或は此によりてよめる近き歌を迄誤のやうにいへれと此説にてよく聞えたり法隆寺の記録などにも聖德太子建立の寺は皆しれたる中に豊浦寺もその如くあるよし也先豊浦寺と云は高市郡推古天皇の皇居の跡を寺となして惣號也四門に額云々と打たる

は各其寺其内に在し也飛鳥寺元興寺等皆奈良へ引移されたるにても知らる今も大乘院の宮を飛鳥御殿と稱す其號とそ承るされは此井は豊浦寺の前葛城寺の前にて共に西なるをいへる也入綾此寺の前通りにして少西といへるは猶其意を得ざる也五六百年前迄は凡そ人も心得たる事と見えて體源抄卷十一に資賢云昔人々葛城ヲタヅネンタメニ行向ケリ路邊ニ板葺ノ古寺アリ下居テ畫の破子解一ノ翁アリ寺ノ名ヲ問答云葛城寺ナリ人々はヲ感シテ葛城ヲ歌フ八十返に及テコレヨリ還リ畢或人云有賢其中ニアリト云々又寺ノ後ニ井アリ翁江ノ波井ト號スト云々孫將舊跡を尋テ行向フ其時寺ハ如形現存井ハツプレタリケリ無名抄ゑのは井の事或人云宮内卿有賢朝臣時の殿上人七八人あひともなひて大和國かつらきのかたへあそひにゆかれたる事ありその時ある所にあれたるだうのおほきにやうくしきか見えければあやしめてその名をあふんことにとひけれと知れる人もなかりけりかゝるあひたにことの外に鬢白き翁ひとりまみえけりこれはしもやうあらむとてたつねけ

竹河 二段

太介加波乃波之乃川女名留也波之乃川女名留也波名會乃爾波禮 二波名會乃爾和禮乎波波名天也和禮乎波波奈天也女左之太久戸天

たけ河の橋のつめなる花ぞのに我をばはなてめざしたくへて

竹河本抄を始いろくといへと契沖齋宮によれる歌を引て伊勢國多氣郡に有とせり入綾に云今按に先注皆たがへり竹川橋は伊勢國多氣郡齋宮にて今に其處に笛川も竹川も花園村と云もありて各其名のこりたりそのよし行囊抄にいと委く記したる此に其要のみを採出ていさゝか云へし齋宮村三村並テ有シガ今ハ一村トナレリ編笠ヲ多ク造ル所也齋宮の舊跡ハ通町ノ左ニ在黒木ノ花表ノ形モアリ宮ハナシ里俗ハ野宮ト云サレド其ハ誤也野宮トハ群行已前ノ洛北ノ宮ノ稱也云々笛川橋今ハ三間許ノ小橋也俊頼集に伊勢の齋宮に侍りける頃よめる「笛川のいしなとりつゝ見えつるはねによろつ代を吹ながせとや云々多氣川ハ齋宮村ノ並ノ西ノ方也竹河

れはこれをはとよらの寺とそ申といふ人々いみじき事也と返々感してさるにてはもし此へんにゑのは井といふ井やあるととふみなあせて水も侍らねとあとは今に侍りとて堂よりにいづくほとならぬほとにゆきてをしへければ人々興に入てやかてそこにむれるてかつらきといふ歌數十返うたひてこの翁にきぬともぬきてかつけたりければおほえぬことにあひてよろこひかしこまりてさりにけるとそ云々は同説と聞えたれと無名抄は少の傳への違もありけ也體源抄に資賢云昔人々と云るも無名抄に宮内卿有賢朝臣時の殿上人七八人といへるも皆樂うたひ物にたけたる人々故葛城の催馬樂にうたひ傳へたる葛城寺のあと榎葉井をも尋見んとて大和の方へ行れたる也もとより高市郡豊浦をさして行たる也葛城をタヅネンタメと云葛城山などの事ならんやさて行てはみたれとも廢寺の跡なれば知れかたきにかの老翁にあひてしれたる也兩説を合せてみれば明らかしされは葛城豊浦吐懷編などにいへる説はさらにあたらぬ事なり

橋トテ橋アリ笛川ノ同流也源順集に貞元元年のはしめ齋宮の侍従の厨におはする間には八月二十五日庚申夜人々参りあひて遊ぶにいほひの心を「神代より色もかはらぬ竹川のよしを君にそかそへわたらん」伊勢名所拾遺云多計河橋齋宮村のやがて西の方なる村を竹川と云今に花園など云田畠の字あり」とて歌をあまた引たり猶此花その事は次に云へし〇はしづめなるや」今按に橋の頭にて端の心ならん天智紀九年五月の童謡に于知波志能都梅能阿素弭爾伊提麻栖古萬葉九に大橋之頭爾家有者なとよみて今も橋つめと云と有〇は花園に」今按に行囊抄の上のつゝきに多川橋云々花園村此村に今も花園と云田畠の名アリ是昔ノ齋宮ノ花園ナルベシ竹川ニ花モミヂヲヨミ合セタルモ此故歟」伊勢舊跡志云竹川の橋の前に花園の名有是は昔齋内親王の御心を慰め奉らんとて四時の花紅葉をおひたしくあつめ殖られたる跡也今の花園村邊迄いと廣き間の事と見えたり其川は大和伊勢の境なる高見嶺より落て凡二十里下流は一里計りにして大淀の浦黒部村の海に入」

これらにて見へし○二段われをはなてめざしたくへ
て」今按に其花麗なる花園の内へ童女をそへて我をは
放か^{ハナテ}しと云也そは齋宮は男禁斷にて其一構の中に若き
女ともい多かりつるを世の若きをのこどもの羨し
みてうたひし也たくへは具せしむるをいふ云々と云り
此歌は此説にていとよく聞えたり

河口 二段 天治譜近代強不歌仍不注其詞也

かはぐちのせきのあらがきやせきのあらかきやまもれと
もはれ二段まもれともいでゝわれぬぬやいでゝわれぬぬ
やせきのあらがき

本抄河口關は伊勢國といへり入綾に此關の事色々説を
舉たり考見るへし六帖に川口の關のあら垣守れとも出
てわかぬぬ忍ひくゝに上二句は守れとももの序也父母の
守れとも忍ひ出て夫と寝ぬると云也今は結句關のあら
垣を再ひいひてとちめたる是も古歌のさま也あら垣は
關門の左右に木をならへ立て人の通ふましく構へたる
を云成へし

此殿 二段

し大かたにして止むへし

天治譜此殿西此殿奥 鷹山 已上三首強不歌仍不注其詞
也

此殿西 二段

このとのゝおくのさかやのうはたまりあはれうはたまり
らはれ二段はるひすらゆけとゆけどもつきすにしのくら
がきやにしのくらがき

是も榮花をほむる也上のは直に殿作りをいひ是は其殿
に屬したる倉の廣大なるかあまた連れるを云り西の倉
としも云るは其殿西の方に倉有し成へし倉庫は五穀實
物等を納置ものにて是又富榮を見るに足へし其倉立つ
つける永き春日のくるゝ迄經行とも盡すと云也すらは
さながらにて春日一ぱいと云か如し別に倉垣と云垣の
あるにはあらず

此殿 二段

このとのゝおくのさかやのうはたまりあはれうはたまり
はれ二段うはたまりわれをわれをこふらしこさかこえな
るやこさかこえなる

己乃止乃波牟戸毛无戸毛止美介利左岐久左乃安波禮左岐
久左乃波禮二段左岐久左乃美川波與川波乃名加爾止乃川
久利世利也止乃川久利世利也

このとはむべも富けりさき草のみつばよつばにとの作
りせり

此歌は次の西のくら垣と同しく富昌たるをほむる也む
べは心にさこそと得る意なれば兼て聞及ひしにたかは
ずさこそ富さかえけりといふやうの意也三枝草は三と
云ん枕のみ三端四端は軒の端の幾重も立かさなれるを
云如三魚鱗^ニと云か如し正義に榮花は何はあれと家作
りのいかめしくきらくしきにいちしろき物なればか
くいへりと有乃名加と有は衍字なるべし三十一言の歌
を安波禮はれなと入てかへし歌へる多けれど凡同さま
なるに此所此文字餘りなし三枝の説人々いろいろの説
あれども三侯^{ミツツ}と云もの成へしとおもはるゝ也されと古
書にいへる趣も思ひむかへて引つくれはいかやうにも
聞なざるゝもの也いつ迄いくらの説を出したりとて正
にあたりやいなや又定る期なしすへて枕詞は此類多

此殿の奥の酒屋とは古へは酒を家々にて醸する事にて
大家は別に造酒場をかまへたる成へし其酒屋奥の方に
有を云也賣酒もなきにあらねと造り酒を賞したる趣顯
宗紀室壽の詞などにも知らるうはたまりは古本宇波
奈里と有或人奈の字を太末二字に寫し誤れりと云るさ
も有へしうはなりは古へ前妻後妻をこなみうはなりと
云て神武天皇の御歌にも有和名抄に後妻奈利と有後夫
を宇波乎と云に對へる名なれとも必後妻ならても大方
年長たる女をいふと見えたり入綾には姥専女を轉じて
云ときこゆと云り是もしかるへし神樂酒殿は今朝はな
はきそ云々又みかこしに我手なとりそ云々なといへる
をもて思ふに酒屋の中は多く女の仕ふる事と見えたり
我を戀らしこさかこえなる一本共にこさかこゆなるま
たこさかこえすなる此句は何れにしても解かたし濃酒
歎こえは假名誤りて乞歎さらは我を戀らし酒乞ぬかと
云の意にやまたは醴^{コサカ}を作るにほどよりも濃くなるは人
を思ふ印なと云古への諺も有けんかこゆなるコクナル
と云へきをユと云るにや皆おしあて也入綾小賢肥なる

やと男の嘲るにやと云肥たるは賢きと云義常にあらは
こそさもいはめ何の義理もなき事也そのうへ我を戀ら
しとあらんには必其戀るによりて云々の趣を云へし老
女か身體の事につくへき歌にあらす思ふへし

鷹山 二段

たか山にたかをはなちあけておくをなみあはれおくをな
みはれ二おくをなみわがすがするときにあへるせな
かもあへるせなかも

高山に鷹を放ち上ては狩人のあやまちて鷹を放失ひし
也おくは假名乎久にて萬葉十七放逸鷹の長歌にかけり
いにきと歸りきてしはふれ告れ呼久余思乃曾許爾奈家
禮婆云々と云り拾遺集にはし鷹のをき餌にせんとかま
へたるおしあゆるすな鼠とるへしなとも有をきはわさ
をきなどのをきにて我方に招く意也鷹を放ち上て招く
方のなきといひてそれを序とし思ふ人を招きよすへき
すべのなくて侘たるをりに思の外逢りとよろこふ意成
へし〇入綾に招よしなくてとかくもてなやめるをりし
もあやにくにあへるを云也然れば此歌は女のうたにて

と云のみまきるゝかたもなき戀のうた也

藤生野 二段

不知不乃々加太知加太知加波良爾之女波也之奈與也之女
波也之奈與也二之女波也之以川岐以波比之之留久止岐
爾安戸留加毛也止岐爾安戸留加毛也
ふぢふ野のかたちが原にしめはやしいはひししるく時に
あへるかも

藤生野は山城國相樂郡藤生村と云處もありとは入綾に
千五百番歌合を引又夫木の歌をも引れと此歌によりて
作れる歌なればたのむへからすしめはやしははへさせ
成へししめは限領る意がもとにて繩など引て領るを云
萬葉などにも此をいろくうつし用ひたり神にいへ
るは不淨を隔る注連戀にいへは女を我物に定置事の類
なりいはひは是も齋がもとにてうつしては祝の意にも
云りさてこゝは加太知加波良乎と有本しかるへきか次
の鈴鹿川も同じやうの歌にて考るにみの山にしゝに生
たる玉かしは豊明にあふかたのしさと云歌も玉柏が大
嘗に取用られたるをよろこぶ意也鈴鹿川此歌も共に風

親などの留守に女かあやまちて高き山に鷹を放せあけ
てもてあつかふをりしも思ふ男に逢たるを時わろしと
て悔むなりと云るはたかふへし鷹を放ちあけてなと女
の所作ならんや親の留守になとあまりの事也一首の調
も序なる事を聞しらす又曲名に鷹山とせるは謠物にな
りての誤也高山と書へき例なり

美作 二段

美萬左加也久女乃久女乃左良也末左良左良爾奈與也左良
左良爾奈與也二左良左良爾和加名和加名波太天之與呂
川與末天爾也與呂川與末天爾也
みまさかや久米のさら山さらくゝに我名はたてじ萬代ま
でに

古今集大歌所に清和の御への美作の國の歌とあれど其
時作られたるにはあらて古き戀の歌の有しを序におも
しらく地名をいへると萬代と云詞の有によりて貞觀の
大嘗主基方の風俗に用られたる成へし一本に和加名波
大衣之と有は其時かへられたるか又後にうたひかへた
るにや上はさらくゝの序にて我名はいつまでもたてじ

俗歌の題に取られたるを時にあへりと云成へしさらは
かねてより注連はへいはひしもしるく時にあへりと云
鈴鹿川も昔より人のめてし所なるがめつるもしるく此
産時にあへりと云成へし以川岐は以は比を誤れる物也
外此類はわがなわがなはたてじわがすがするときに
われをわれを戀らしなといひさして重て次にいふ例也
こゝもいはひはひし也又此下に毛文字有へし必なく
てはとゝのほらす鈴鹿川にも有り加太知加波良爾と有
ては其注連はへ祝ふ所のもの何物とも聞えずそれ故に
或は神にやといひ又いつきといふ詞をたすけて女の事
などにいひなすあたらぬ事なるへし入綾に藤原氏を藤
生野に比し其姫君のかほかたちのすくれ給へるをかた
ちか原といひなししめはやしは豫てより奉らんと申し
はやしおきつるを云いつきいはひしは彼にしき綾の中
につゝめるいはひ子とよみたるやうにいつきかしづき
いはひ來しよし也しるく時にあへるかもは其かひあり
て入内の時運にあへる哉と云ほととの心也と云りあまり
にもて付たる説也用へからすざる事を作りて我か見し

如く古歌を解はいくらにもいはるへし知れかたき所は
しられざるもたふとからずや

妹與我

伊毛止安禮止伊留左乃也末乃也末安良岐天名止利不禮
會也加遠萬左留加爾也止久末左留加爾也

妹と我といさの山の山あらゝぎ手なとりふれそかをま
さるかにとくまさるかに

妹と我とはいると云枕詞なるへしざるは夫婦は立居出
入共に諸共にたくふ事常なればいかにも冠らせつへし
いるさの山は名所と聞ゆ諸説但馬國と云り入綾に 上略
彼國にそれとおほしき山の名見えす山城大和の邊にも
此名なし如此在所の定かならぬに其歌の甚多きはいか
なる事ならん又此名所に限りて然かあまたなる歌とも
の中に傍の地名あはせよみたる一首も見えず云々本名
所にあらず佐はゆくさくさかへるさなといふ時の意の
佐にていつこの山にまれ入時の山の心によみたるか弘
りたるにもやあらんと云り此説も一ツの考なれば捨か
たけれと猶名所と聞ゆる方にや後に多くよみ出たるは

止奈留前裁安岐波岐名天之古加良保比之太利也奈岐
あさみとり濃花田染かけたりと見るまでに玉光るした光
る新京朱雀の垂柳又は田居所なる前栽秋萩翟麥唐葵した
り柳

淺緑はうすみとり濃花田は深緑也染かけたりは染出し
たり染上たりなど云んが如しさて是は淺緑染かけたり
と見るまでに云々と云歌を歌ふに任せて初句を濃花田
と再び詞をかへていへる外にも例多しさて新京の事に
うつれるさま也玉光るは玉の如く光る也した光はした
はした照した泣俗にしたもの云々と云類にてつよく
光るかたち也磨き建たる新京のきら／＼しきをほむる
也朱雀は平安城の朱雀大路にて並樹の柳あるを云是は
遷都ほとなき時の作なれば新京と云り又は田居所なる
前栽は萬葉に伏見の田居などいへる田居にて田舎の事
とは所の詞なるべし上は先新京の柳のけしきより花麗
の至りをほめ又はといふより洛外の私の家居の趣をほ
めたる也秋萩翟麥唐葵は前栽有へき花をいひならへた
り結句垂柳は上の柳を再び歌ひ返したる體成へし〇入

皆此催馬樂かもとにて月にも鳥にもいひかけの便よけ
れば人毎にいへる物也但馬ならてもいつこにかさる山
名こそあるらめ山あらゝき和名抄辛夷和名夜末阿良々木一蘭
云古不之波之加美何れ蘭の字なとよみたれば香氣有も
の成へし手なとりふれそとりは打撥なと云類軽くそへ
たる詞也手觸る事なかれと云也終り二句解かたし毒の
説はあるへからず毒まさると云詞も義聞えず和名抄に
も辛夷は其子可噉之とあれは毒草にあらず入綾には
かをかすがにかをまさすがにと有本をとりて香を
令薫兼香を令増兼の意といへり先さてありなんやさ
れと妹と我と入る山の山蘭に手をふる事勿れわれらか
袖に香をかをらすその爲にと云るはかの入佐をも名所
にあらずとして云る説也歌の調もさは聞とりかたし初
は枕詞入佐は名所として聞かた古の意にやかに古今
集かへりくるかになとにいへるか如し

淺緑

安左美止利己以波奈太曾女加介太利止也美留萬天爾太萬
比加留之太比加留新京朱雀左加乃之太利也奈岐萬太波太萬

畿にまだいたるとなると有本によりて高砂に心もまだ
きけむをまだいけむと云るも又おなし然ればこれはす
こし譏りたるにやあらんかゝる事もちまたの謳歌の
ならひにはあれと恐れ多かれは今はたゞ語釋のみあら
く説て止なんかしと云るは玉光る新京も早く荒て田
舎と成べしと云心に解たる也まだいの詞はそれにもせ
よ初より終まで只新京又私の家所迄をほめたる調の外
聞えぬうた也早田村と成るの詞ならば既に成とけたる
上により外は聞えぬ也又其心ならば秋萩なてしこ云々
よりも次に有へし聞人きくへし

天治本白馬妹頭門 已上二首強不歌仍不注其詞也

青馬

あをのまはなればとりつなけさをのまはなればとりつな
けしのいさやのしのいさやのさをこがひこなるさいろん
こまたいたむこのたいきのわらはのさをこがひこなるさ
いろんこ

入綾云青之馬放者取繫也さをのま眞青馬也中略 しのい
さやの萬葉十三に梓弓弓腹振起志之能岐羽突二手挾云

々とある是也矢に矧羽を凌羽と云は風を凌きて直に飛
故也太刀に云凌きも心は同じさは眞箭也さをこがひ
こなる箭雄子之孫なると云歟箭を狭と云は萬葉十三に
投左乃遠離居而廿に阿良之乎乃伊乎佐太波佐美牟可比
多知云々綏靖紀に一發二發とある此發も箭の事也さて
又萬葉九に木國之昔弓雄之響矢用鹿取靡坂上爾會安留
とよみたる是と合せて思ふに弓に強き人を弓雄といへ
は矢をよく的し人を箭雄子と云しにやさいろこ眞郎子
を音便に云歟いろはいろせいろど郎女などのいろ也ま
たいたんこのたいきのわらはの此句は考に眞大膽子の
大氣の童子と云歟と云るさることにや但したいきは多
力の音便にて剛き童と云成へしといへり此説しかるへ
し神樂のふるや男の太刀もかなの類にて人の名などは
其世にはよく知れたる事も今は何事共聞えぬ事多かる
へし此説に付て猶いはは入綾に引るしのぎ羽を二手挾
はなちけん人し悔しも云云と云る長歌も初木國の室の
江のべにとあれはかの昔弓雄と云る同人の事にて何そ
其箭を射たる事に付て命を失ひしと云やうの事を妻な

を笠にきるには腋を張わさなればひち笠と云も同じ事
也なといひて近來古學者のかたくなにいふ説を破した
れと是はまさしく比左かたを比知かたと誤りたるいち
しるければたとひいかほと古き時よりの誤りても誤は
誤り也したかふへからす

席田 二段

牟之呂太乃也牟之呂太乃伊川奴岐加波爾也須无川留乃伊
川奴岐加波爾也須牟川留乃 二段 須牟川留乃也須牟川留乃
知止世乎加禰天會安會比安戶留千止世乎加禰天會安會比
安戶留
むしろ田のいつぬき河にすむつるの千年をかねてそあそ
ひあへる
千年をかねては千とせをかけてと云んも同じ眞淵云尾
張國人道丸云いつぬき川は美濃に有此川大野郡より出
て席田郡を通り本巢郡の須の俣川に入る今俗糸貫川と
いふ

大宮

おほみやのにしのごんちにあやめこんたりさやめこんた

といためる歌成へし諸注梓弓より二手挾迄は離けんの
詞の序とせれと是ははなちけん人し悔しもとつゝ調
に外は聞とられぬにやさらはしのいさやのさをこは紀
國にありし勇士にて其孫なるへし

妹之門

いもがかどやせなが門ゆきすぎかねてやわがゆかばひぢ
がさのひちかさの雨もやふらなむしでたをさあまやどり
かさやどりやとりてまからむしてたをさ

此歌は萬葉十一に妹門去過不勝都久方乃雨毛零奴可其
乎因將爲と有を六帖に妹か門行過かねつひちかさの雨
もふらなんあまかくれせんとして入たり此誤たる方を取
て詞を作りそへてうたへるもの也妹か門夫か門と二ツ
にいひては義をなさす歌ふに任せて詞を少かへたるの
み淺綠濃花田に同じしてたをさは歌ふ節の詞成へし古
今集俳諧にいくはくの田を作ればか郭公してのたをさ
を朝なくよふと有も郭公はよふものにいへればして
たをさは別也是には乃文字をさへ加へて云るいかな
る事にや入綾に萬葉の歌の袖を笠に着といふを引て袖

りたりやりたんな
大宮の西の小路に菖蒲籠りたりと云か菖蒲の多く茂り
たる様にやこみちをコンチこもりたりをコンタリなと
云皆音便也我のみやこもたりといへは高砂の尾上に立
る松もこもたりさやめはさあやめ也青の馬佐乎乃萬に
同じ入綾にはこみたりにて五日の料の菖蒲を多く持よ
せたるが西の小路にしけくこみあひたるをいへるなら
んとあり是らは實は菖蒲にや何事にや聞知かたし其世
にてはよく聞えたる事也菖蒲ならば五月五日の料に市
立なとしたるさま成へし

總角

安介萬岐也止字止字比呂波加利也止字止字左加利天禰太
禮止毛萬呂比安比介利止字止字加與利安比介利止字止字
あけまきひろばかりさかりてねたれどもまるひあひけり
かよりあひけり

總角既にいへりさる童と尋ばかり離りて寝たれども轉
び逢にけり寄合ひにけりと云也さかりは遠さかりなと
のさかり也かよりのかは發語萬葉にもかよりあひにけ

りかよりあはんかもなとよめりさて是は童と少し間を
おきて同じく寝たるかより合てあひ事せしよし也轉ひ
合なとわらはのさまおもしろし初句安介萬岐止と有へ
き所也歌ふによりて省れたるにや安比爾介利本抄は爾
文字ありある方歌調まさりぬへし入綾に止字止字を意
あらせて解たるはわろくや今歌の意を解時をもとの歌
にして解へきなり

本滋 二段

毛止之介岐毛止之介岐比乃名加也萬牟加之與利牟加之
加良二段牟加之加良牟加之與利名乃不利已奴波伊萬乃與
乃太女介不乃比乃太女

もと茂き吉備の中山昔より名のふりこぬは今の代のため
けふの日のため

もと茂きは山は麓の茂き也古今序にも筑波山の麓より
もしけくと云り吉備の中山既に出つ昔より昔からは同
し事を少かへてうたへるのみ名のふりこぬはとは美名
の珍らしからぬものにならす盛にもてなざるをいふ
今の代の爲今日の日の爲は次の叢山と同じく大嘗會に

みまくさとりかへまゆとしめ

御馬草取飼也刀自は古書多く見えてこゝなどは只女を
いふめは女也眉刀自は今俗に下女など白齒と云はいま
だ齒を染ぬほと女をいふことく少女の生のまゝなる
眉をはらはて有を眉刀自女といひし成べし

酒 飲

左介乎太字戸天太戸惠宇天太牟止已輪會也萬宇天久留與
呂保比會萬宇天久留丹名丹名太利也良牟奈太利知利良
さけをたうべてたべゑうてたんところんぞまうでくるよ
ろほひぞまうでくる

たべをたうべと延云也賜の意よりいへれば多く尊き方
より賜ふ飲食に云り即是もさる意成べし飲醉ては明け
し太牟止已輪會はたんにてもだふにても音也酔て倒る
音を云今もドントコロブと云也今ならは轉てそ云々と
で文字有へき所也古へはなくて聞えし成べしよろほひ
はよりの詞にほひはひらひなどの活言のそへるにてよ
ろめくさま也是はさる所にて酒を給りていたく酔て或
は轉ひ或はよろめきて退くさま也太牟止已輪をたんと

作りてうたはれたるにやさらは當代の爲大嘗行る、今
日の爲と云意成へし上の細谷川の歌の名高きによりて
其名のふり來ぬといふ意も有べし結句は再びうたひか
へたる例の姿にや又只少し詞をかへてかへしたるにや
入綾はもとは木の事として孝徳紀もごとくに花は咲ど
も又萬葉おほしもこのもと山など云歌を引り是も聞
えたる事なれど此頃の此歌などにはもと、はかり木を
いはん事如何とおもへは先、如くいひ置つ

美乃山

美乃也萬爾之之爾於比太留太萬加之波止與乃安加利爾安
不加太乃之左也安不加太乃之左也

叢山にしに生ひたるたまがしは豊明にあふがたのしさ
本抄承和帝の大嘗會悠紀の風俗歌也と有りしは茂き
也玉柏は柏をほめて云也柏葉は専ら用らるゝ故に其玉
柏が豊明にあふをたのしと思へるよし也

眉止自女

美萬久左止利加戸萬由止自女萬由止自女萬由止自女萬由
止自女萬由止自女也萬由止自女萬由止自女

こりんと訓て多く懲る事とせらるなどさる詞續き有べし
もおもはれす又輪はろんの備字には用ゆへからすもし
は論の字にやと思はるゝにつけて上の如くいひ試みた
る也○入綾に今按に上のたふと懲んぞといへる縁にた
んな云々と云笛の譜をとり出てやがてその譜の詞ども
を醉人のよろほふ足の拍子にとれる氣取のをかしき也
是を十五拍子にうたふをきかへもいはずおもしろき
節どもならん一首の意は酒をたうべてたべ酔てたんと
懲りなんぞ此まうでくる道に勿よろほひそまうでくる
其足つきのをかしさよ拍子をとらばたんなたりや云々
とあはせて見べきさまそよと也と云り守部は歌を解に
ほしきまゝに意をあらせて打見たるやうにいへるしか
るへからぬ事也其うへ是を十五拍子にうたふをきかは
云々なといへる決てあるましき事也催馬樂となりては
樂にうつりたるうへの事故いづれの歌とてもさるもの
にあらずもとの國風の流歌の時こそ入綾にいへるやう
の趣もあるへき事なれ凡例に云し事共と合せ見るべし

田中井戸

太名加乃井止爾比加禮留太那岐川女安己女己安己女
太良利良利太奈加乃己安己女
たなかのるとにひかれるたなきつめあこめこあこめ

田中の井戸は田中の杜田中の里の如し井は田に水まかせん料なれば必田中に有り和名抄水葱水菜可食也と有りて今も食料につましむる也萬葉にも字惠古奈宜云々古奈伎我波奈乎云々と有り田に生れは田水葱と云其葉つやあれは光ると云りあこめこあこめは吾子女小吾子女也吾子は古へしたしみ云詞是は童女なり

無力蝦

知加良奈伊加陪留 保禰名伊美々須
ちからないかへる ほねないみいす

和名抄蛙和名賀また蚯蚓和名美須と有り本抄みすは蛙か取喰もの也故に對して云るにやといかあらん只はかなきむしを二ッ擧たりと見てありなんや神樂早歌などの類也次にも奥山なと同じ

難波海

名无波乃字美名无波乃字美已岐毛天乃保留乎不爾於保不

しのほれと願ふ心也今伏見迄行へき乗人を淀よりあく
るたくひ也

鈴之川

すゝか川やそせのたきをみな人のめぐるもしるくや時に
あへる時にあへるかも

八十瀬の瀧は漲る所の多き山川のけしき也皆人のめくるは少迂也一本めつると有に從ふへし皆人の賞る也時にあへるとは大管などに此鈴鹿川を取いて、歌れたるを云上美乃山など同意也○入綾に此川の事を云るに行囊抄云鈴鹿川は坂下ノ明神ノ邊ヨリ關ノ地藏マテ二里許ノ間右ニ流レ左ニユキ幾度モ涉ル故ニ八十瀬川ト號ス」とて古歌紀行等をあまた出せるを見るに川も小瀧の如く山よりいくつも落て流れけるを行めぐりて實に八十たびもわたりしさま也今も山國に四十八瀬など云所これかれあり其狀なりけん湘秦紀行云 上略關ヨリ坂下マデノ間近年マデ八十瀬川ノ谷水ノ支流イクラトモナク渡リテ登リケルガ往年霖雨ニ谷水漲リ出坂下ノ驛舍悉ク流レ没シケレバ此災ヲ除ントテ官吏ニ仰テ山ヲ

禰川久之川萬天爾以末須己之乃保禮也末左岐萬天耳
なんばのうみこぎもてのほるをぶね大舟つくしつまでに
今すこしのほれ山崎までに

つくしづ入綾に後撰雜一に女ともたちのもにつくしよりさしぐしを心さすとて大江玉淵女難波がたなにもあらずみをつくしふるきころのしるしはかりぞ此歌詞書につくしといひて歌には難波のみをつくしをよめればこゝのつくしつと同じく淀川より難波迄のあひたに然云地名のありし也玉淵女の攝津國によりありし事大和物語に亭子の帝鳥飼院におはしまし時此玉淵か女をめしてとりかひと云ことをよませ給へりしに淺みとりかひあるはるにあひぬれば霞ならねとたちのほりけりとよめる事有にてしるしと云り可然考なりさて昔は淀川の水も深くて大船小船共に山崎の大橋のもと迄のほりし也筑紫津は其少川下と聞えたり土左日記の頃既に川水少き時は船のほりかねし事見えたり今少しのほれと云るは大かた山崎迄はのほしかたくて少し下なるとつくしつより乗人を上る也故に乗り居る人の今すこ

切開キ新道ヲ付カヘラレシヨリ今ハ谷川ヲ下ニ願テ其上ノ高キ所ヲ通ル故ニ往還ノ勞スクナシ云々 中略 此説の如く成へし又歌の意を解たる所にめぐるもしるく今按に此川にあふさきるさに流れめぐりたるをわたりてはわかれ別れては又めぐり逢へるをもてかくつゞけたり上は序也たとへ也一本にめつるもと有はくもじを見たがへてうつしひがめたる也 一首の意は鈴鹿川八十瀬の瀧つ山川を皆人の渡りめぐりてあまた、ひいたづきけるがつひにからうじて待し時世に遇けるよといふ也譬へたることわりおもしろしと云るはいか、あらんめくると云詞を流れめぐりたるをと川にかけ又別れては又あふと云も聞えず皆人のめくるとより外聞へき方なし同人の又ゆきあふ事あるへからす上る人と下る人のあふと云意にや序也たとへ也と云もいか、序たとへ兼たりと聞や何れの歌も裏に意有としていへれば我見る所とはたかへり

石川 三段

伊之加波乃古末宇止爾於比乎止良禮天加良岐久以須留

二段 伊加名留伊加奈留於比曾波名太乃於比乃名加波太衣太留三加也留加也留加名加波太衣太留
いし河のこまうどに帯をとられてからきくいするいかなるおびぞはなたの帯のなかはたえたる

石川は河内國石川郡 同國錦部郡に百濟大縣郡に巨麻コノまた若江郡にも同名有ていにしへ百濟高麗の人を置れし所なりといひ傳へたり既に出たるしだらかまうどのひとへの狩衣なとりれそ云々の類にて高麗人と通し居る女の歌也さてときおきて相寝せし帯を其高麗人に取ト隠されていたく悔るよし也 二段 其帯はいかなる帯ぞと問をまうけて色は花田なりしが古き帯にて中はやれ絶たる帯也と女が耻ハチ悔る意也常に馴たる男の殊に夜の事なればやれ切たる帯のまゝに逢しを取かくされて見つけらるゝ事をからく悔る女の情也 三段 かやるかくふしの詞成へし○入綾にかやるかあやるかと本につきて例の是に意あらせていろくゝにいへれと既に帯をとられて云々は中は絶たる迄にて其意盡たれば三段は只返しふし詞としてかならん

奥山

おく山にきゝるやをぢきをやはけんづるまきやはけんづるきけづるをぢ

をぢは年長たる人を云詞也もと父チ父の兄を小父オヤヂと云かもと成へし日本紀萬葉等にあまたいへり今俗おやぢと廣くいふか如し木をや削るなり也波の波は除て聞へし常歌に云也は云々のかへる意にはあらず眞木と云もここは意なし只木を再び云意也

奥々山

おく山に木ながすが木かをぢきやときやときややはけんづるまきやはけんづるきけづるをぢ

深山にて袖したる木は川あれば流し出し常に川なき所は谷底に切ため置て大雨の時に流し出す也さが木は汝が木かと問意也木やとくは汝か木なるやの意かきうやはきをや也やはの詞上に云か如し

我家

和加伊戸波止波利帳を毛多禮太留乎於保支美支萬世无已爾世无美左可奈爾奈與介无安波比左多乎可加世與介无安

がよからんといふか也

波比左太平可加世與介无ウ
わがいへはとはりてうをもたれたるを大ききませウせウ御ウ看ウに何よけんあはびさたをかかせよけん

和加伊戸にて論なけれと上の例和伊戸と有本抄にはわいへんはとあり即わいへを謡へるまゝと聞えたりとはりてうは門に張る帳也和名抄帳音長張也施張於床上ニ也云々古へ聲は女のもとにかよひ住ものにて其女の家には父母も玉の如くもてはやすものなれば玉はやす武庫と云枕詞にも用たり此歌は吾家は帷帳なと垂ていと富貴也諸王の若公達にても來給へあはれ聲にしかしつき申さんさて聲殿の御看には何かよからんとて次々陰門に似たる貝をならへ云る也土左日記になにの蘆陰にことつけてはやのつまのいすしあはひ云々と云る合せ見へしさておもへはとはり帳も施張於床上ニといへる寢所の事にや女子有家の親のたわむれ云る意也おほきみは諸王親王なときはやかに云類にはあらて凡さる高貴の人と云成へし榮螺子佐左江又佐太江とも石陰子加世とあり左太江加の加はあはひかさたえかかせか

第六 梁塵後抄

萬延元年庚申四月

江戶日本橋一丁目

須原屋茂兵衛

同淺草茅町二丁目

須原屋伊八

同日本橋二丁目

三都 山城屋佐兵衛

同日本橋二丁目

小林新兵衛

同芝神明前

岡田屋嘉七

同芝神明前

書林 和泉屋吉兵衛

同横山町三丁目

和泉屋金右衛門

京三條通界町

出雲寺文次郎

大阪心齋橋通北久太郎町

河内屋喜兵衛

三九八

同心齋橋通唐物町

河内屋吉兵衛

梁塵後抄 終

第七 本朝樂府三種合解 【卷一東遊】

本朝樂府三種合解卷一
東遊歌

東を去るづまのしるしは、わかれ此四と
けは、いまだ人にも見せずありぬるを、又その
あくる年の夏もおなじ病をせしに、此たびは秋に
なりて、なほりしが一とせもおかず打つときて、
ふたゝびまでおもき病にわづらひぬれば、身もい
たくつかれて、今年になりぬるまでも、そのなご
りなほやまず、すべての事いと物うく先にしさせ
し事ども、とりいでむ事などは、いよ、おもひた
えて、今しばしがほど、本のごとすくよかになり
なむまでは、何わざも皆とめてありぬべけれ
ど、又去年の冬賀茂臨時祭も、ふたゝびおこなは
れて、東遊もありしときくに、右の註さくは本よ
りいたづらにあらむが、口をしきまでにせしわざ
なれば、いたくはしくせむともあらず、さり
とて誰も心得がたくすなるものを、人にも見せ
ば、すこしのしるしは、なきにしもあらざるべけ
れば、たゞにあらむよりはとて、こたびうつしと
とのへたるそのついでに、神樂、催馬樂にもおよ

をもく、これの三種の歌の註さくは、わかれ此四と
せ先の冬より、その明年の春かけて、あやしく腫
るゝ病をやみしに、からくして夏の比になほりぬ
れど、暑きあひだは、萬の事打すてすぎにしを、
秋になりてやゝすしくなりゆくにつけて、さて
のみ徒らにあらむは口をしきに、それまでに何く
れとしさせし事どもは、いとくたやすからねば
おもき病の後には、にはかにとりいづくもあら
ぬに、東遊は、はやくより世に久しくすたれぬる
が、先に賀茂のまつり再びおこなはれしよりは、
東あそびもおこりて、今は年ごとにたえずあめれ
ど、その春また石清水臨時祭、ふたゝび行はれて
後は、東遊の事ことに世にいひさわぎぬるを、そ
の歌の心は、むかしよりとけるものなく、誰も心
得がたくすなれば、せめてそればかりの物をだに
とて、試に註釋をかきしが、みづからのつましる
しまでに、しるせるまゝにて、いとみだりがはし

べるなり、されど東遊はあるが中にも、古ければまことに心得がたき事もなきにあらず、また神樂、催馬樂も、すべてはいとやすらかなれど、あまたの中には、凡例にもいへる如く、文字の誤れる外に、うたひひがめたる所ありと見えて、ことに心得難きふしぐもまじれば、いづれもみなうたがひをのこせる所、すくなからぬに、はたかくかりそめに物せしには、誤れる事、またかうがへもらせる事さへおほからむを、見る人ふかくなとがめそとて、いさゝか註さくのおこりを書のはしに、かくはのぶるになむ。

文化十二年三月曲水宴のあくる日關深しるす

のせたるは、一、歌はありて二、歌はなく、駿河舞の歌は初の歌の一段のみにて、二段より下はみななく、求子はあれど全からず、加太於呂之は是もなし、おもふに一二、歌と駿河舞とは本異なるを、朝野群載に二、歌と駿河舞の歌と一つになりたるは、誤なる事いふ迄もなけれど、箏、箏譜にのせたるなどは、本謠ふものなれば、その時にしたがひてさまぐに略きてもうたへるが、後にはおのづからの定りの如くなりて、傳はれるものと見えて、あながちに誤といふにはあらじなれど、その本はしからぬをわがもてる古本はいとたらひて、上にいふ如く花鳥にいへるにもあへれば、今はすべて古本によりて尙右にいへる外にも朝野群載箏、箏譜にのせたるに異なる所あるは、そのをちぐにしろせり、又古本には裏書歌あり、そは裏書歌としるして本文より一字さけてかきぬ。一、神樂も右の古本東遊の次にのせたるは、初に神樂の作法をくはしくして、さて歌の引聲拍子などをもしるせるうへに、難波方歌の裏書に難波方不レ入ニ

本朝樂府三種合解凡例

一本朝樂府とは、こゝに傳ふる所の異邦の樂に對へていふ、三種は東遊、神樂、催馬樂の三つなり、本朝樂府は尙風俗、今様、神歌などあまたあれど、いづれも心詞いやしくして、とくにたらず、その中に風俗のみ古くて、をさぐ右の三種にもおとらず、すがたければ、附録として後にそへぬ。

一、東遊は花鳥餘情に東遊譜云先一二、歌次駿河舞次求子次加太於呂之調子高麗雙調也とあり、わが古本とてもてる東遊の次第全く右におなじく、笛、調子高麗雙調ともある上に、歌の引聲音節拍子をはじめ和琴の調絃法打法まで、くはしくしるせるを見れば、是やがて花鳥にいへる東遊譜なる事疑ひなし、右の外に朝野群載にのせたるは、一、歌の外に二、歌は駿河舞の初の歌と次の歌の半と、すべて一つになりて、次の歌の半より後の駿河舞の歌はみななく、求子加太於呂之もなし、又別にわがもてる神樂、箏、箏譜のおくに

此譜、以三他本二所書入一也とあるを見れば、是又神樂の譜なる事明らけし、さて世にあまねく傳ふる所の梁塵愚案抄にくらぶれば、すべていと正しく誤も少ければ、是も古本によりて愚案抄と異なる所は、そのをちぐにしろせり、又前にいへる神樂、箏、箏譜には、庭火歌の次に阿知女作法ありて、その次に神、韓神、薦枕、篠波、千歳、早歌、吉々利々、得錢子、木綿作、朝藏、其駒をのせて、いづれにも傍にはかせをつけたり、それにも異なる所あるは、右におなじくしるせり、又内侍所御神樂式といふ書あるよし今井似閑の萬葉緯にいへたど、いまだ其書を見ざれば、くはしき事はえいはず、今はたゞ萬葉緯にあけたる異同のみを是にはしるせり、又古本には東遊におなじく裏書歌あり、そも東遊裏書歌におなじく一字さけてかけり、又其駒の所にもいへる如く、末には後にくはへたるもありと見えて、古本になきが梁塵愚案抄にあるもあり、そは愚案抄としるして裏書歌とおなじなみかけり、又愚案抄には歌の次

第も末に至りては古本と異なる所あり、その餘籙中抄、拾芥抄、體源抄等に神樂の目錄をのせたるにも、おの／＼かはりあるを、そのをち／＼にしるさむは、いとまぎらはしければ、愚案抄には目錄なきにより、新たに目錄をつくり其餘の目錄はそのまゝにあげて別に末にいだしぬ。

一 催馬樂もわがもてる古本は、歌の引聲拍子などをもちくはしくしるせるに、今井氏の萬葉緯にのせたるは、本宗尊親王の御みづからかゝせ給へる催馬樂譜をうつし傳へたるよしにて、それには引聲拍子などは略きてしるさゞれど、其餘はすべてわがもてる本におなじきうへに、呂歌の中に葦垣歌の止々呂介留といふより下、眞金吹歌^{ヒトツタ}、山城のうたの奈利也之名末之といふまでおちたるよしをいへるに、わがもてる本にも、しかおちたれば、わがもてる本もやがて宗尊親王の御本のうつしなる事疑ひなし、さて是も梁塵愚案抄にのせたるにくらぶれば、いと正しきによりわがもてる本によりて、愚案抄と異なる

れど、是もいまだその書を見ざれば、萬葉緯に拾芥抄の目錄をあけたる中にしるせるまゝを是にはいだしせり、又藻鹽草には神樂、催馬樂ともにのせたれど、そは梁塵愚案抄に全くおなじければしるさず、尙東遊、神樂、催馬樂ともに右にいへる外に異なる本、又考ふべき物もあらめど、もとよりわが學びの淺らなるうへに、友の交りも博からねば見聞くことなきを後にうる事もあらばそのをりにいふべし。

一 附録の風俗は體源抄にのせたる歌數、次第ともに、拾芥抄にいだせる目錄にもあへれば、それによりぬ、尙外に源氏物語奥入、河海抄等にのせたる上野の歌、また袖中抄の小車の歌、政事要略の衛門府の歌なども古く見えてすてがたけれど、附録なればさまではとてとゞめぬ、さるはいづれもめづらしきかうがへなどもあらばことにしるしもしつべけれど、さる事もなきに何のやうにかとてうるさければ、みなもらしつるなり。

一 前にもいへる如く、東遊、神樂、催馬樂ともに本書

所は神樂におなじくそのをち／＼にしるせり、又別に天治二年の奥書ある本のうつしをもてり、右にいへる古本と愚案抄にはいづれも律呂とついでたるを、それには呂律とついでたり、そのよしは註にいへり、その中に異なる所あるをも右におなじくしるせり、又源氏物語奥入、河海等の諸抄に催馬樂を引けるにも、異なる所あるは是もそのをち／＼にしるせり、又催馬樂は歌數次第ともにわがもてる古本と、梁塵愚案抄、天治本とははじめよりいたく異なるのみにあらず、籙中抄に神樂の目錄の外に催馬樂の目錄をものせたるも、天治本におなじく呂律とついでたるに、その中にもかはりあり、また拾芥抄にものせたるそれにもかはりあり、又仁智要録にのせたるにもかはりありて、是もそのをち／＼にしるさむは、ことにまぎらはしきにより、神樂におなじく、愚案抄には是も目錄なきにより新たに目錄をつくり、その餘の目錄はそのまゝにあげて別に末にいだしぬ、又伊呂波字類抄にも催馬抄の目錄をのせたるよしな

には、歌の引聲、拍子などをくはしくしるせる中に、東遊には音のふしまでをもしるせれど、歌の心をとかむにはやうなきうへに、かへりてまぎらはしければ、是には歌の詞とうたふ聲とのみをあけて、その餘はみなしるさず、されば歌もよみやすからむために假名にてかくべけれど、その中に文字の誤れる所をいはむに、假名にてはそのよしさだかならぬ事もあれば、本のまゝに眞名にかきて、傍に片假名をつけつ、尙歌の引聲、拍子、音節などをもしらむともはゞ、本書を求めて見るべし、又風俗は體源抄には片假名にてかけれど、今井氏もいへる如く、源氏物語奥入にのせたる上野の歌は眞名にてかき、河海抄にも眞名にかければ、いづれも本はみな眞名にかきしなるべきにより、今も前の三種に用ひたる文字の例にならひて、すべて眞名に改めてかきつ。

一 東遊はしばらくおきて、神樂、催馬樂ともに文字の誤れる外に、もとうたふものなればうたひひがめたる所もありと見えて、心得がたき事おほき中に、本

歌などあるはそのうたひひがめたる所しらるれど、さらぬはいかにともしりがたきを、まして風俗は體源抄にのせたるのみにて、同書に本朝書籍目錄をのせたるに風俗譜一卷あれど今傳はらず、難波乃圓江、甲斐之禰、伊勢人、荒田の四首にはかせつけたるをもてれど、大方ことなる事なく、その外に考ふべきものなければ、ことに心得がたき事おほきにより、今はたゞいふべきかぎりをいひて、その餘はみなもだしつ、又われ先に書紀の歌の註をかき、また萬葉集の註をまかけれど、そはいまだをはず、それらにすでにいへる事はたゞそのよしをしるして、わづらはしければこれにはいはず、二書をいさむ後に見るべきなり。

歌舞する事をすべてあそぶといへり、後の物にも古今六帖の歌に、行水の上にいのれる河社川波高くあそぶ聲かな、又聲高くあそぶなる哉足曳の山人今ぞとほるべらなるとよみ、うつほ物語俊蔭卷にたゞ御手ひとつあそばせ、源氏物語松風卷に其駒などみだれ遊びて、同物語若菜卷に青柳遊び給ふ、又葛城遊び給ふなどあり、又桐壺卷に御遊せさせ賜ふとあるも管絃の御遊をいへるにて、尙餘の卷々にも數しらすあり、さて東遊歌といふは初の一二歌より、次の駿河舞歌、求子歌、加太於呂之のうたまでをすべていへる事は凡例にいだせる花鳥餘情の東遊譜の文を見しるべし、しかるを一二歌には名なきにより、そのみを東遊歌といふとなおもひあやまりそ、一二歌に名なきよしは、一二歌はあるが中にも古くよりうたへるものと見えて、次なる駿河舞歌、求子歌、加太於呂之のうたなどは、後にくはへたるにより一二歌にわかつたために殊に名つきたるものと見えたり、おなじ東遊歌の中にも此けぢめある事をしるべし、又東遊、東舞といふけぢめあり、

本朝樂府三種合解 卷一

東遊歌

東國をあづまといふよしは書紀の傳へと、古事記の傳へと少し異なれど、共に日本武尊の御言より始れる名なる事は、世の人もしれる所なるうへに、萬葉集卷二の註にくはしくいへればこれには略きつ、さてあづまとは相模、駿河などはもとよりにて、遠江までをもすべてあづまといふ事は、この駿河舞の歌の中に遠江の地名見え、又萬葉集卷十四東歌の中にも、遠江國の歌をのせたるにてしらる、かくて三河國をあづまといへるは何にも見えたる事なし、そはや、都に近ければおのづからにしかいはざりしものと見えたり、遊は古今集に神樂歌を神あそびのうたとあるあそびにおなじく歌舞をいふ、古事記に天若彦が身まかれる所に、日八日夜八夜以遊、また建内宿禰大臣のいへる言に猶阿三蘇婆勢其大御琴などありて、古へは笛ふき琴ひき

そは駿河舞の所にいふを見るべし、かくて都の歌舞をおきて東國のをしも用ふるはいかにといふに、おもふに上宮太子の異邦の樂を傳へ賜ひしより後は、すべての事みな異邦の樂をのみ用ひしなるべきにより、このもとよりの歌舞はおのづからにすたれて、東國にのみこれりと見えたり、しかるを是を公の神事に用ひ給ひしはいづれの御代の比の事にや、平城天皇の大同類聚方をえらばせ給ひ、醫式を立させ給ひしなど、すべて異邦のわざをやめて、専らこの事をおこさせ給へるを見れば此の天皇の御代の事などにや、物に見えたるは年中行事秘抄に、宇多天皇の寛平元年十一月廿一日賀茂臨時祭に東遊ありしをはじめとす、この天皇よりはじまりしもしりがたし、これの今の次第は延喜二十年の勅定なるよし本書に見ゆ、また神事の外にも東遊を用ふる事は、北山抄賭弓還獵の所に、大將先著坐云々三献訖有絃歌之興給祿有差或命東遊將監以下舞と見えたり○さて此書は歌の意をとくをむねとせれど樂器また其餘の事をも序にいはむ、先樂器は本

書に笛調子高麗双調とあれば、東遊の笛はやがて狛笛を用ゆと見えたり、體源抄にも昔は狛笛も東遊の笛も同笛にて侍るなりとあり、しかるを又同書に東遊の笛は狛笛よりはふとく横笛よりは細き笛なりといへるは中管の事と見えて、同書に中管の事をいへる所に、中管者又名「歌笛」、律書樂圖云長笛短笛の間是を中管といふ、東遊の時此笛を用ふ、狛笛は今少し大きな笛なり、近來は此笛を用ひずして狛笛にて東遊を吹なり、とありて前にいへると合ざるはいかにといふに、同書に太笛の事をいへる所に、太笛も本は横笛の一越調に合ふほどの笛にてぞ侍りける、此世はそれも今少しふとくなりたり、是らはみなうたうたひの音どもの此世には不足なればふとくなしたるとぞ、此事は鳥羽院の御時の事なり、近比は申すに及ばざる事なりとあると、同書に昔の狛笛は横笛の尻よりさしいれらる、程にちいさかりけり、しかるに今の世には事の外に大きになりたるなりとあるを合せおもふに、昔は狛笛にて東遊を吹きしが歌うたひの音不足なるにより、後に

中管にかへて吹きしを、又後に狛笛の大きになりたる世には又その狛笛にてふけりと見ゆ、同じ狛笛といふにも昔のは細く後の世のは太くして、細きは音高く太きは音低きなり、たゞし歌うたひの音不足なるにより笛を太くしたりといへるは誤なり、後世人の聲昔の人より不足すべきよしなし、是は律のたがひによれる事なり、そのよしをいはむにこと長ければこゝにははぶけり、狛笛は同書に高麗笛又名高句麗笛、又伎横笛、又作「狛笛」、又作「籥」、唐令云高麗笛伎横笛、又高麗笛者俗云「古末布江」、右の舞樂此笛をもて吹なり、三音あり、一越調呂、双調呂、平調律なりとあり、拾芥抄にも高麗樂曲をいへる所に、一越調、平調、双調と見えたり、又凡例にいへる神樂、箏、箏、譜のおくに東遊をものせれば、東遊には箏、箏をも用ふる事しられたり、又本書に和琴調絃法をのせれば東遊の琴は和琴を用ふるなり、體源抄にも東遊和琴の調は双調呂なりと見え、花鳥餘情にも東遊の琴は和琴なりと見ゆ、和琴の事は書紀應神御卷歌の註にくはしくいへれば、これに

は略きつ、和琴とは本唐琴に對へていへる名なるを、後に是を東琴ともいふは、専らむねと此東遊に用ふるによりていへる名なり、しかるを或書に都にははやくすたれて、東國にのみのこれりしにより東琴といふといへるはわろきよしは書紀の歌の註にいへる如し、又體源抄に神樂、催馬樂、東遊等の拍子を尺拍子といふとあり、拍板にて拍子をとるを尺拍子といへば、東遊の拍子をとるには拍板を用ふるなり、源氏物語若菜卷に東遊の耳なれたるはなつかしく、ことにうちあはせたる拍子もつゞみをはなれてと、のへとりたる、とあるも、花鳥に、東遊には大鼓なし、大鼓をうたぬをつづみをはなる、といへり、とありて、東遊には大鼓を用ひず、拍板にて拍子をとるによりしかいへるなり、拍板は和名抄音樂部鐘鼓類に、拍子、蔣魴切韻云拍打也、拍板、樂器名也とあり、さて尺拍子は本笏拍子とかくを、同書服玩部に四聲字苑云笏音忽俗云尺とありて、笏を俗に尺といふにより尺拍子ともかけるなり、是を笏拍子といふよしは、體源抄に拍者以木造其形似笏とあ

りて、拍板の形の笏に似たるにより拍板にて拍子をとるを笏拍子とはいふなり、かくて調子の事は上にひける如く、本書に笛調子高麗双調とあるうへに、體源抄にも東遊和琴の調は双調呂なりともあれば、今更にいふに及ばねど、體源に呂なりともしいへるは、常の双調はもとより呂調なれど、律音もあればことに呂なりといへるなるべし、是はさる事にて本書に和琴調絃法をしるせるも、體源抄にしるせるも、ともに常の双調とは一越聲の位次序をたがへり、是は東遊のみならず、神樂も太笛にては平調、横笛にては一越調なるに、箏絃の次第などは宮商角徵羽と順についでたるを、神樂の和琴調絃の次第はいたくちがへり、そはいかなるよしぞといふに、體源抄に神樂の事をいへる所に、顯仲云上代は神樂は無調也とあるは、上代は歌人の聲の高下に合せて、絃の音をしらべて、平調、一越調などいふ定りはなかりしをいふときこえて、實にしかあるべき理りなる事は、平調、一越調などいふ名は、異邦の樂を傳へし後にいで來りたる名にて、上代にはなき事

なれば神樂にかぎらず、東遊も、その餘の歌もすべて上代にはみなそのうたふふしに隨ひてそれごとくに調法は異なるべけれど、定りたる調子はなかりしなり、しかるを東遊神樂の二つには、この古への調法を傳へたるに、後に異邦より傳へ來し調法の、このもとよりの調法に近きをとりて調子を双調、平調など、定めたるものと見ゆれば、かの異邦の調法にことごとくあはざるもことわりなり、しかれば双調、平調などいへど本異邦の調法にならひたるものにはあらで、この古へより傳へたる調法に強て異邦の調法をあてたるものなり、これを見れば東遊、神樂の調法は、この古へよりの調法なるを、今の代までも傳はれる事は、いともくたふときわざなるを、世にしろ人のなきはいかにぞや、此事初にはいかにも心得ざりしを、われかくかくに考へてからくしておもひえたり、ゆめなほざりにな見すぐしそ、又本書に打琴法といふあり、打とはいかにするをいふにか、いまださだかならず、ただし體源抄に神樂の事をいへる所に、忠季云、神樂は近

來其の程以ての外に延たり云々、和琴をもて打は和琴の中絶して前後の詞の次の忘る、程なりとあるは、文字の誤ありと見えて、そのいへる心髓に心得がたけれど、又同書に或説を引て、朝倉は古へより以來各相捍讓して、上手にうたはせむとするなり、菅搔するに拍子取拍子を打て、人に譲らむとて拍子を打て待つなりとある、拍子取は拍板にて拍子をとる人をいひて、和琴を菅搔する人をいふにはあらざるべけれど、拍子を打といふは、うたをうたはぬあひだにするわざをいふときこゆるを合せおもふに、和琴に打といふも、うたをうたはぬ間に和琴にて拍子を打をいふことときこえたり、此事よく尋ねたるうへにてしるすべけれど、今和琴のことをいふに打法をのこしてふつにいはずらむも、しらぬことをかくすに似て心ぎたなきわざなれば、見む人のおもはむことをもはからずして、試におしはかりごとをいふなり、尙後にもしれらむ人とひて定めてむ、かくて又舞人の事は、神樂の註にくはしくいへれど、その外に源氏物語松風巻に近衛づか

さの名高きとねり、物のふしども、とある所の花鳥餘情に北山抄の文を引て、今案するに物節といふは近衛舍人の中に東遊に達したるものをいふ、東遊の事、物節の役なりとあり、又陪從といふあり、歌をうたふ人なり、同物語若菜巻にべいじうも石清水賀茂の臨時祭などにめす人々のとある所の花鳥に、陪從をば歌人といふ、十二人四位五位六位各四人なり、臨時祭の調樂は近衛陣にて是を行ふ、故に陪從は多くは近衛づかさなりとあり、又陪從といふあり、十二人の外に加はりたるをいひて、是も同卷に、くは、りたる二人なむ近衛づかさの名高きかぎりをめしたりけるとある所の花鳥にくはし、又裝束の事は是も右の同若菜巻に山藍にてする竹のふしとある所の花鳥に、賀茂臨時祭、舞人竹、紋青搦、袍蒲萄染、下襲地搦、袴合袴、陪從、櫻欄紋、青搦、袍柳色、下襲白、表袴合、大口赤紐半臂、忘緒引帶等各門著とあり、青搦は山あるにてするをいふ、御即位大嘗會假名記に、臨時祭の舞人のきるをば青搦といひ、大嘗會の時は小忌といふ、小忌青搦はおなじものなれど、

裁縫のやうかはれりとあり、山あるは唐にて透骨草といふ草なりと直海元周いへり、飾抄に搦様形木文小草梅柳水蕨雉蝶小鳥以山藍搦之無山藍時用麥目波志木と見ゆ、又赤紐は同書に著小忌、右肩、舞人著、左肩、依袒楊也とあり、尙裝束の事また裁縫の事は、桃花藥葉、體言抄等に見え、衣色の事は胡曹抄に見えたり、右にひける花鳥の白表袴を一本に白綾袴とあるは誤なり、そは體源抄に表袴、面綾或唐綾とありて、表袴の面には綾を用ふるにより表字の傍に綾とかきたるを表字を誤なりと心得て、さかしらに改めて綾とかけるものなり、又挿頭の花の事は、是も源氏若菜巻にかざしの花のいろくとある所の花鳥に、臨時祭、挿頭使、藤舞人、櫻陪從、山吹舞人陪從は右にさすなりとあり、體源抄にも春日若宮祭は舞人、櫻陪從、山吹使、藤左にさす以上造花他月に行へども相かはらずとあり、たゞし藤左にさすとあるは使のみの事にて、舞人陪從は右にさす事は前の花鳥の文を見てしるべし、その外に生花をさす事も同書に見えたり、かくて石清水臨時祭も右の定

と聞ゆる事は堀川院後の百首石清水臨時祭の歌に、山水のながれにうかぶ松が枝にかざしの藤をかけてこそ見れ、又男山峯の櫻に諸人のかざしの花をたぐへてぞ見るとよめるにてしらるゝを、又體源に或人云、舞人冠をきる時は必ずかざしの花をさすべきなり、時の花をさすべきうへは其季に隨ふべきなり、たとひ造花をさすとも、その季の花をさすべきなりとあり、又童舞は左櫻右山吹通例なりとありて、次に仁治に新熊野僧正童舞を十一月に興福寺にわたされたりけるには、左白菊右黄菊なり、承元新羅祭十月に侍りけるは左は菊、右りむだうなり、如レ此例をしりて用ふべきなりとあるを見れば、右にひける若菜卷なるは十月の事にて賀茂臨時祭などは十一月なれば藤櫻山吹にはあらざるにかおほつかなし、此事も後に尋ぬべきにこそ、さて右のくだりの事どもはあまりにくだぐしけれど、都の外にありていまだそのくはしき事を見聞かぬわがともがらのために、見あたれる事、又おもひよれる事どもを筆のゆくまゝにしるせるになむ。

ぬをや、○者禮奈のはれは拍子の聲にて下の奈はそへたる言なり、○天平止乃部呂奈は手をとゝのへよなにて手はあそびもの、手をいふ、前にもいへるうつほ物語に御手ひとつあそばせ、源氏物語若菜卷にもたゞ御手ひとつあそばしてとあり、その前にも帚木卷に手なのこい給ひそとあり、又若菜卷に琴にゆの手りんの手などもいへり、とゝのへは是も若菜卷にきむのねを離れては何事かを物をとゝのへしるるべとはせむとあり、とゝのへよをとゝのへろといふは東人の言にて、萬葉集卷十四東歌に、狛錦紐ときさけてぬるがうへにあどせろとかもあやにかなしき、又白雲のたえにし妹をあせせろと心にのりてこゝばかなしけ、又まつがうらにさわゑうらたちまひとごとおもほすなもろわがもふのすもとある、あどせろは何とせよ、あせせろは何とせよ、おもほすなもろはおもほすなむよなり、下のなは上のはれなのなにおなじくそへたる言なり、○宇太止乃部无奈は歌とゝのへむにて奈は上におなじ、○左加无乃禰は相模の嶺なり、相模は和名抄東海國部に

一、歌

乎乎乎乎 者禮奈 天平止乃部呂
奈 宇太止乃部无奈 左加无乃禰
乎乎乎乎

○乎乎乎乎はたゞ歌をうたひいづる前にいふ聲と聞ゆ、神樂の阿知女法に於於於とあり、下の裏書歌にも於於於とあり、朝野群載にもこゝを於於於とあればこれのみに乎とあるは誤かともおもへど、阿知女法に又於介といふ言のあるに、此二歌にも於介といふ言あり、もし於を誤りて乎とかけるものならむには、於介も乎介とあるべきにさはなくて是のみ乎とあるは誤にはあらで、於於於とあるぞかへりて誤にはあるべき、尙下の裏書歌にいふを見るべきなり、さて前にいへる算策譜に此上にあはれといふ言あるは、いかゞなり、そのよしは次にはれなとあるはれとあはれのはれとは本同言なれば此上にあはれとはあるべくもあら

相模佐加三とあれど、古へは左加无といひて古事記弟橘比賣命の御歌にも佐賀牟能哀怒とあり、相模の嶺は萬葉集卷十四相模國歌の中に相模禰乃とある山にて、今相模國大住郡に大山といふ山ある是なり、和名抄に甲斐國都留郡相模といふ所あれど、その嶺にはあらず、たゞし都留郡は相模國となれば本は相模國の中なるべく相模といふ國名も都留郡の相模よりいでたる名なるべくおもはるゝは、下にいへる相模川も都留郡より流れ出る川なるを合せおもふべし、相模國の山は外に足柄箱根などもあれど、相模の嶺といふは今の大山なる證は上にひける萬葉集卷十四の歌のすべては、相模嶺の小峯見そぐし忘れ來る妹が名よびてわをねしなくなとある、その妹が名よびてわをねしなくなとよめるは、同卷に、あしがらの御坂かしくみくもり夜のあが下ばへをこちでつるかもとよめると、同集卷十五に、かしこみとのらすありしを三越路の手向にたちて妹が名のりつとよめるを合せ見れば、忘れ來る妹が名よびてとよめるは、人丸の妹が名よびて袖ぞふりつる

とよめる如く、おもひにたへずてよべるにはあらで、よばずてはえあらぬ故のありてよべるにて、足柄の坂にての事なる事しるければ、見過ぐせし相模嶺は今の大山をおきて外にある事なきをおもふべし、しかるを今大山といふは右の萬葉に相模嶺の小峯とよめるを見るに、本は相模嶺の小峯とぞいひけむを後に誤りて、たゞ大峯といひしを、又大山とさへいへるものなるべし、さて前にもいへる如く相模國の山は外にもあれど、是をわきて相模嶺といふよしは此山相模國の中に獨りはなれだてるにより、ことに相模嶺とはいひしものと見えたり、こゝにまたひとつの考へあり、そは大山の北東を流れて下にては今の平塚驛と藤澤驛との間を流る、川を馬入川といふを、昔は相模川といへり、川の西は八幡村といひ、東は中島駿河町といひて舟わたしあり、此川甲斐國都留郡猿橋の下よりながれ來れば、此川を相模川といふは本都留郡の相模といふ所より出でたる名なる事しるし、此川古へに名高かりしなどにて、かの甲斐國都留郡の相模といふ所は本より相

〇平乎平乎は上におなじ、是は次の二歌をうたひいづる前にいへるなり。

二、歌

和賀世古加 介左乃古止 天者 奈
奈川乎乃 也川乎乃古止乎 之良部
太留古止也奈 於介也 安末乃可川
乃 於介也 乎乎乎乎

〇和賀世古加は我夫子之て男を世といふは古言なり、くはしくは書紀應神御卷歌の註にいへり、此上には本書に衣の言あれど、そは前の一歌の終のさかむのねのねの言を引きたる聲を再びいひて、此歌をおこすのみにて、ことさらにうたふ聲にあらざるにより、これには除きてしるさず、本書に駿河舞歌の初に也の言あるもこれにおなじ、そこにいふを合せ見るべし、〇介左乃古止は今朝の琴にて、古への琴の事は是も書紀應神御卷歌の註にくはしくいへる事前にもいへり、これ

模國の中にてはなく、甲斐國なれど、たゞ此川相模國中を流るゝにより國名によべるにや、もししからば、大山も本より國中に獨りはなれだちたるに、此川に近ければ相模嶺とはいひしにもあるべし、尙前の方よきに似たれど都留郡の相模といふ所を本相模國の中なるべしといふも少し強たるに近ければ、是をも後の考へのためにしるしおくなり、かくて此歌に相模の嶺をよめるよしは、萬葉集卷九に見えたる筑波山の耀歌などのやうに、相模の嶺にのほりて遊ぶによりいへるは、仙覺が萬葉抄に引ける肥前國風土記云、杵島郡縣南二里有二孤山云々、郷閭士女提酒抱琴、每歲春秋携手登望樂飲、歌舞曲盡而歸とあるを合せおもふべし、又今大山にある寺名を大山寺といひて、山號を雨降山といふよし、そは延喜式神名帳に相模國大住郡阿夫利神社ありて、やがて此山にいませる神なるに、阿夫利を雨降とかけけるを字音となへたるなりと、賀茂眞淵いへり、これによれば此歌も本阿夫利神社の祭にうたひしものなどにや、是は此かたよきに似たり、

にいへるは六絃の琴にてやがて今いふ和琴なるべし、今日といふべきを今朝といへるは、この遊は朝のほどよりはじまれるにより、しかいへりと見えたり、〇天者は手者にて手は一歌に手をと、のへろとある手におなじ、たゞし此句手者とばかりにて言たらずきこゆるにより、上句につゞくかともおもへど、琴の手とはいふべけれど琴手とはいふべくもあらず、もし此上に乃の言おちたるにはあらぬか、しからば上句につゞけて一句とすべし、朝野群載には此下に阿波禮とあり、その事は本書の註にくはし、〇奈奈川乎乃は七絃之なり、〇也川乎乃古止乎は八絃之琴をなり、さて七絃八絃といふ七八はすべて數の多きをいふ言にて、實の數をいふにはあらず、くはしくは書紀神代御卷歌の註にいへり、八絃の琴といへるは古事記に如調ニ八絃琴とあり、〇之良部太留古止也奈は調而在琴にて下の也は喚擧る言、奈は例のそへたる言なり、本書に奈の下に乎とあるは、安字の誤にて奈の言を引きたる聲なれば除きてしるさず、草書の安を乎に見まがへたるものなり、

又朝野群載には也を奈に誤れり、○於介也の於介はうたふ聲にて也は喚擧る言なり、神樂の阿知女法、弓立歌、催馬樂の飛鳥井歌には、たゞ於介とあり、青柳歌には是におなじく於介也とあり、古語拾遺に阿波禮阿那於茂志呂阿那多能志阿那夜憩飢憩とある飢憩も同言なり、たゞし註に木名也振其葉之調也とあるは強言にて取用ふべからず、そのよしは上の阿波禮於茂志呂多能志夜憩などをとけるも、みな強言なるにて、飢憩をとけるも、なすらへて強言なる事をしれり、しかるを神樂阿知女法の愚案抄に、右の註をひけるは誤なり、歌のふしかといへるは近し、又こゝを朝野群載に於加三介夜とある於加三は於三ニを誤れるにて、ニニは於の引聲を二つおくりてかけるものなり、○安末乃可川乃はいまださだかならず、おもふに後に祓具にあまがつといふものあり、俗に撫物といふ、又這兒といふも同物なりともいへり、文字にては天兒、尼兒などかけり、源氏物語薄雲卷に、めのと少將とてあてやかなる人ばかりあまがつやうの物とりとあれば、や、

ふは、次の駿河舞の事にて、一二歌にはもとより舞なき上に、一歌に相摸の嶺とさへあれば、それにはあらでたゞその琴の音のおもしろきをほめて、我せこが琴の音は常人の手にはあらず、天人の手なりといへるなるべし、一二歌の舞なき事は次の駿河舞の所にいへり、こゝを朝野群載に安末乃止呂加津乃とあれど何のよしともきこえず、誤なる事しるければとらず、すべて群載は誤多く、乎於のわきだめさへなくて、乎字をかくべき所をも、みな於とかけり、しかるをこの二歌などは本書をおきて群載の外にはある事なきを、群載は右にいへる如く誤おほきに、本書の今までも傳はれるは皇神たちのさきはひまして、いまだ此東遊を世にたえしめ給はざるにて、誠に責ぶべく重みすべきは本書にぞありける、○於介也は上におなじ、群載には介字を脱せり、○乎乎乎乎は一歌にいへる如く是は次の駿河舞の歌をうたひいづる前にいへるなり。

古くよりあるものなり、かくて中昔よりこなたの言に山里人を山がつといひて、常に文字には山賤とかけれど、そは意を得てかけるのみにて、かつは賤字の心にはあらざることは、源氏物語帚木卷に山がつの垣はあるともといふ歌の所の河海抄に山兒とかけるにてしるべし、されどまた兒字の心にもあらで、かつはずべて人をいふ言ときこえたり、しかれば此あまのかつは天の人といふにて、あまのかつのは上の天者といふをうけて天人の手なりといふにや、天兒、山兒のかつをにぐるは天、山よりつゞけいふにより濁るにて、本はすみていへる事は言の初を濁る例はなきにしてしるるを、今は天のかつとの、言あればかつは本のまゝにすみてよむべきなり、たゞし萬葉集卷十八に安米比度とあるは天にある人のいひなるを、あまとは下より上を見あげたる方をいふ言なれば、こゝにあまのかつといへるは、それとは少しちがひて、たゞ大空を飛かける、唐にて飛仙といふ類の人をいふなり、よくわかまへてなおもひまがへそ、また天女の舞をうつつせりとい

駿河舞

後拾遺集神祇部に、式部大輔資業伊豫守に侍りけるとき、かの國の三島明神に東遊してたてまつりけるをよめる、能因法師のうたに、有度濱に天の羽衣むかしきてふりけむ袖やけふのはふり子とあるを、顯昭の袖中抄に引ていへらく、むかし駿河國のうと濱に神女のあまくだりてまひしを、野叟のまねび傳へて舞を、今は駿河舞とて東遊にするは是なりといへり、又範兼卿の童蒙抄にも、むかし駿河國の有度濱に神女天降りて舞ひしをうつつして今の世には駿河舞とて東遊にするとなり、尙その外にもうと濱に神女の天降りし事は駿河國風土記に見え、體源抄にも丙辰記といふ書を引て、駿河國有度濱に天人あまくだりて歌舞しけるを、或翁沙をほりて中にかくれ居て見傳へたりと申せり、今の東遊とて、公家にも諸社の行幸には必ず是を用ひらるといへり、丙辰記といふ書はすべての書ざま偽書と見え、うけ用ひ難きものなれど、是らを合せ見ればその

事のありなしはしばらくおきて、天女の天降りしといふ事は古くより言傳へし事と見えたり、たゞし東遊にする駿河舞はこの次の歌なるを、袖中抄に能因の歌を引て是なりとあるは、やがて能因の歌をいへるごとくきこえてまぎらはしき書ざまなり、能因のうたはこの東遊の中の求子歌をうつして新たによめるにて、後に東遊歌とよめるはいづれもみな求子歌をうつせるにて、強ていはゞ東舞歌とはいふべけれど駿河舞歌とはいふべからず、されば後によめるは東遊歌或は求子歌などいひて、駿河舞歌といへるはなきなり、尙後に東遊歌とよめるは、いづれもみな求子歌をうつせるものなる事は、後の求子歌の所にその歌どもをあけたるを見てしるべし、又駿河舞と求子とは別なる事はいふまでもなければ、駿河舞と求子は拍子も舞の手も異なる事は本書に駿河歌打琴法求子打琴法と別にあけ、體源抄に求子駿河舞をば諸舞といひ、求子ばかりを片舞といふとあるにてしられたり、しかるに能因の歌は求子歌をうつしながら天の羽衣をよめるは是もくはしから

ば、こゝも本は駿河歌とありけむもしりがたし、そはとまれかくまれ有聲とては何の聲をいふともきこえざれば、有聲の聲字は舞の誤なること疑ひなし、本より聲と舞とは互に見まがふべき字にて、次にひける公事根源の舞字は聲の誤なること、そこにいへるをむかへ見てしるべし、かくて求子歌は註に有舞とありて、歌の後に右一曲二段終又始舞終而後止とあれば、是も舞ある事しるし、加太於呂之は註に同音唱之此歌可退出とのみありて有舞といふ言はなく、歌の後にも右一曲二段終又始之退出後止とありて、舞の事は見えざれば是は一二歌におなじく、舞なきことしるる、されば前にひける體源抄にも駿河舞、求子の舞の事のみをいひて一二歌と加太於呂之には舞の事をいはずるなり、しかるを公事根源石清水臨時祭の所に、大ひれかへしうたひて舞たえずしてまかりいづとある、大ひれはやがて加太於呂之なるに、舞たえずとあるは舞字は聲の誤にて、正しく建武年中行事には聲たえずとあるなり、もしもとより舞字ならむには舞やます

ざるよみかたなり、後の求子の所にあけたる歌はいづれもみな其社の事をよみて、羽衣の事をよめるはなきぞよろしき、さて序にいはむ、一二歌を初め駿河舞、求子、加太於呂之までをすべて東遊といふは前にもいへる如くなる中に、本書に一二歌は後に已上二曲唱各一度とのみありて、求子などの如く註に有舞といふこと見えざれば、一二歌には舞なき事しられたり、次に駿河舞の註に有聲とある聲字は舞の誤なる事、求子に有舞とあるを見てしるる、上に、駿河舞としもいへば舞ある事はいふまでもなく、歌の後に已上六段終更始待舞竟而止とあるにても、舞ある事はいちじるし、但し駿河舞といひてまた註に有舞といふは、すこしいかゞなるやうなれど、こゝに駿河舞といへる舞をむねといふにはあらで、次の歌は駿河舞の歌なりといふよしをしるせるのみなるに註に有舞といふは、一二歌に舞なきに對へて是には舞ありといへるにておのゝそのおもむきことなれば、くるしからざる上に、本書打琴法に駿河歌とあり、箏篋譜にも駿河歌とあれ

とはいふべけれど、舞たえずとはいふべくもあらぬをや、公事根源の今本に舞たえずとあるにより加太於呂之に舞ありとゆめなおもひあやまりそ、かゝればすべてを東遊といひ、すべての歌を東遊歌とはいへど、わかつていふ時は一二歌と加太於呂之には舞なければ、駿河舞歌といふべからざる事はもとよりにて、駿河舞と求子とは舞の手異なりと見ゆれば、求子歌をも駿河舞歌とはいふべからざる事は上にいへる如し、しかるを朝野群載に東舞章曲とて一二歌をのせたるは誤なり、そは舞字をあそびとよみて、まひとはよまざるかとも思へど、さてはまぎらはしくていとあるまじき書きざまなれば、本よりあづままひなる事しるきを、しかかけるはくはしからぬわざなり、されど東舞といふ事も古くは釋日本紀に見え、また年中行事秘抄にも見えたれば、はやくよりいへる言ときこゆれば、舞をむねといふ時は駿河舞、求子の二つの舞はすべて今も東舞といふべきなり、たゞし釋紀に見えたるは仁賢御卷に殊舞とあるを、養老私記を引て、舞狀者乍立乍居而

舞、今東舞是也とありて、殊舞をやがて東舞の如くいへるは、たゞその狀の似たるをいふのみときこゆれど是もまぎらはしくいかなる書ざまなり、これによりて又殊舞をやがて東舞となおもひまがへそ、すべて中昔の書作れる人たちの物かくわざに拙くして、今より見ればまぎらはしき事のおほきぞ人まどはしなるや、又古への久米舞の事はこゝにやうなけれど、その狀は駿河舞に似たるよし江家次第にいへれば、匡房卿の比までは傳はれりと見ゆるを、いつの比より絶えたるに前後にはすべてきこゆる事なし、此駿河舞も前にもいへる如く古へはいづれの社の祭にも用ひ給ひしが、中比世の中亂れしより後は久しくさる事もなく、今猿樂の羽衣といふものに駿河舞あれど是にはたちつるつするやうの事はなくて、常の舞に異ならねば誠の駿河舞にはあらず、そも別に其の家に祕事とする舞の手ありといへど、いかなるにかおほつかなし、しかるに此二百年ばかりこのかた古へにもたぐひなく世の中をさまれるによりもろくのすたれりし事どもおこりゆくまに

以毛 古止古曾與之 古止古曾與之
奈江久佐乃以毛者 古止古曾與之
安部留止支 以左左禰奈无也 奈江
久佐乃以毛 古止古曾與之

○宇止波末爾は於有度濱なり、有度は和名抄國郡部に駿河國有度宇止とある所にて、その濱は駿河國風土記に、自久能浦至御穗吳服神社之前都曰有度濱とあれば、廣き程の事なれど、こゝにいへるは三種のあたりをいふなり、三種は延喜式神名帳に廬原郡御穗神社とありて、今も廬原郡なれど有度郡にもかゝれり、或書に三保の島一里四方ばかり三種明神の社あり、此島大かたは廬原郡にて、その内に有度郡もすこしあり、羽衣をかけしといふ松のあたりは有度郡にて、羽衣の松の跡としてそのかたばかりのこれり、羽衣の宮はその近きあたり平松といふ所にありといへり、羽衣の松などいふは後の人の作り出せる空言と聞ゆれど、天女の天降りしといひ傳へたる所はそのあたりなる事明

まに櫻町院の御時賀茂祭再びおこなはれて後は、東遊も年ごとにあれば、古への久米舞の狀もおもひはかるべきたづきあれど、われいにし年、京にのほりてありし時は何心なくて等閑にのみ見すぐせし事のくやしきに、今年また石清水臨時祭再びおこなはれて、ことに舞の手もくはしくなれりときくは、めでたしともめでたき御わざなるを、病にふして見にもものほらざるものから、えもだしあらでそのころ

男山かざしの花のもろともむかしにかへる舞人の袖

となむおもひつゞける、そもこれには歌の心をむねとくくに、かくまでいふもいかなる上に、みづからの歌をさへしるせるは、いとをこがましけれど、古への事のゆかしきあまりに見む人のわらはむ事をもえさりあへぬにこそ。

宇止波末爾 須留加奈留 宇止者末爾
宇知余須留奈美者 奈江久佐乃

らかなり、天女の羽衣の事をよめるは前にひける能因の歌の外にも參議雅經卿の集に、いにしへの天の羽衣来てとへばいふ事もなきうと濱の松、家隆卿の集に、うと濱のあまの羽衣春は来て今もかすみの袖やふるらむなどあり、たゞ有度濱をよめるは新古今集に、うと濱のうとくのみやは世をばへむ浪のよるゝあひ見てしかな、新勅撰集に、いつとなく戀するがなるうと濱のうとくも人のなりまさるかなとあり、又兼盛集にもうと濱をよめるあり、尙あるべし、さて此上に本書に也の字あれど、そは前の二歌の初に衣とあるとおなじく、この歌をいひいでむとて二歌の終の於介也の也の言を再びいへるのみにて、こと更にうたふ聲にはあらざれば除きてしるさる事二歌の初にいへる如し、○須留加奈留は駿河爾有なり、駿河は和名抄東海國部に駿河須流加とあり、駿河といふ名は本同書に同國駿河郡駿河とある所よりいでたる名にて、一所の小名のそのあたりの大名になれる事、郡にも國にも例多し、風土記にいへることは俗説にてとるにたらず、爾有を奈

留といふは、にあるのにあをつむればなとなるにより、しかいへる事は人皆のしれる如くなり、○宇止者末爾は上の如し、同言をかく重ねいふはうたふもの、常なり、此下いづれも同言を重ねいへるは是になづらへてしるべし、○宇知余須留奈美者は打よする浪はなり、浪に打といふは常の事なれど、こゝはよするこゝとを強くいはむとて打といへるなり、さて是は何のよしにいへるともさだかならぬをおもふに、我により來る女を浪のよるにたとへていへるにや、されどしかよめる例、外にある事なければいかゞあらむ、尙よく考ふべし、又よるとよするとは自他の違あれど、みづからよるをもよするといへり、くはしくは書紀崇神御卷歌の註にいへり、○奈江久佐乃以毛の奈江久佐は古事記沼河比賣の歌に奴延久佐能賣邇志阿禮婆とある奴延久佐におなじく、なえくしたる草をいひて女のさまのよわくたをやかなるにたとへたるなり、などぬとのとは常にかよひて、後にも草の風になびきふすを、ぬえふすとも、のえふすともいへり、次

すく出來ぬをうらみて偽言すといへるなどにや、尙考ふべきなり、さてこれは上にこそといへれば、下はよきといふさだまりなるに、よしといへるはてにをはとののはざれば之は支の字の誤かともおもへど、朝野群載にも之とあり、箒簾譜も是におなじく、催馬樂の大芹にも、古世利己曾由天天毛牟末之といふ言あり、その上にうたふものは常いふとは異なる事もまゝあるならひなれば、必ずしも誤とも定めかたきにより、しばらく本のまゝに之とかけり、たゞしこそといひて、きとぢむるも後にはなき事なれど古へは常の事にて、書紀仁徳御卷歌の註に例を引いてくはしくいへり、○古止古曾與之は上の言をかへしいへるにて、うたふもの、常なる中にその事をつよくいはむとてこと更にかへしいへるあり、やがてこゝなる是なり、さて此歌は二段にて初より是まで一段、次の奈江久佐乃以毛者より下又一段なり、○奈江久佐乃以毛者は上の如くにて、者の言をはりたるのみなり、○安部留止支は逢有時なり、萬葉集卷十四に、うたてけに心いぶせし事はかりよく

の以毛は妹にて女をさして妹といふは古言なり、是も書紀應神御卷歌の註にいへり、しかるを本書には奈江久佐乃以毛とあり、朝野群載には奈江久佐とあり、初にはいと心得がたくさまんにおもひしが、後に箒簾譜を見るにそれには片假名にてナエとあり、しかれば本書も朝野群載もともに誤にて、本は奈江とありしなるべきに、江を仁に誤れるを奈江久佐といふことはあるべくもあらねば、仁は二の誤にて、上の奈をおくりてかけるものとおもへるにより奈江とかきたるものなることしるければ、是には奈江と眞名に改めてかきつ、かくて言の心もいと明らかなる事上にいへる如し、○古止古曾與之は言社吉なり、されば言こそよしとは、たゞ言のみこそよけれ實にはしからずといふ心にて書紀允恭御卷の歌に、言をこそたみといはめ、古事記の歌に、言をこそ菅原といはめ、催馬樂の櫻人、言をこそあすともいはめなどある、いづれも實にはしからずといふ心なるに、これは何ゆゑにしかいへるにかおほつかなきを、もしはその女の常はたや

せ我せこ根骨時だにとあり、○以左左禰奈无也は率載にて、以左はいざなふ言、左禰の左はそへたる言なり、左寝といへるは萬葉に數しらすあり、神樂歌にも夜はさねなむやとあり、尙左の言は、書紀神武御卷歌の註にいへり、さねなむのなむはねがふ言にて、下の也は喚擧る言なり、是を本書に以左左者禰奈无也とあり、その時はいざさはいざさらばにて、千五百番歌合前權僧正のうたに、春雨のふるから小野のあづさ弓おしていざさは若菜つみてむ、うたひもの、神歌といふものにも、いざさは伊勢にかゝりなむとあり、又後ものにも、いざさは給へなどいへり、されどいざさはといふはや、後の言ときこゆるに、此歌は古くよりうたへればしかにはあらざるべき上に、これはさらばといふべき所にはあらざれば、者の字あるはわるし、われ年比尋ねもとめて別本を二つ得て校せしに一本に者の字なきによりて、これには除きつ、朝野群載にも者の字はなくして以左之禰奈无也とあり、之は左の字をおくりてかける二を誤れるものと見えたり、○奈江久

佐乃以毛は上におなじ。○古止古會與之は是も上におなじ、○さて前にいへる天女の歌をうつせしといふ時にうたへる歌は此歌なるべし、次々の歌も同時にいできたるか、いと末の歌には遠江國の地名あれば、歌のふし、舞の手などは、おなじ駿河舞の中なればもとよりおなじかるべき事はいふまでもなけれど、歌の詞は後に加へたるものと見えたり。

安奈也須良介 安奈也須良 也須良

安難也須良介 禰利乃乎乃 古呂

毛能 曾天乎多禮天 曾天乎多禮天

也 安奈也須良介

○安奈也須良介の安奈は書紀神代御卷、一書註に、妍哉此云阿那而惠哉、神武御卷註に大醜此云、安奈彌備句、などなる阿那、缺奈におなじく古語拾遺註に、古語事之甚切皆稱阿那一とあり、也須は安にて下の良介はみなその状をいふ言なり、さて是は萬葉集卷十一に目乎安見とある安におなじく、女の姿のよろしくて見るに

細布我紐緒ともよめるにてしらる、錦紐は延喜織部式にも見えたり、さて紐を緒といふはいかゝなるやうなれど、右の萬葉の歌に紐緒とあり、その外にも紐緒とよめるあまたあるに、こゝは練の紐緒とはいひがたければ、練よりつゞけてはたゞ緒といひても、次に衣のといふ言あれば衣の紐緒なる事明らかなるにより、緒とのみいへるなり、本書註に或説乎爲毛とあるによれば、練の裳にて事もなくきこゆれど、練の裳の衣とはつゞきがたければ、こゝは毛とあるはわろし、○古呂毛能は衣之なり、さて練の緒の衣とは練絹の紐を付たる衣をいひて練絹の紐は錦の紐ばかりこそなければ、白細布の紐などよりはよければ、東人の心にはいとめでたきものにおもひて、かくはよめるなり、本書の註に或能爲與とあれど與にてはこゝもわろし、○曾天乎多禮天は垂袖而なり、古への衣の袖は長ければしづかにありく時などはみな袖をたるゝなり、萬葉集卷十九に、袖たれていざわが苑に鶯のこづたひちらす梅のはな見奈などもよめり、梅花見奈の奈を今本には爾

事もなくやすらかなるをいへり、大醜は右の外にも萬葉集卷三に痛醜とありて、今とうらうへなり、痛の字をあなとよむ例はその註にいへり、○安奈也須良は上におなじくして、介の言を略きたるなり、○也須良は是又上の安奈をはぶけり、朝野群載には此下に今ひとつ也須良とあり、あるもわろからねど、なきかたよろしかるべきよしは、次の註にいふを見るべし、そも一本にはなし、○安難也須良介は上にいへる如し、たゞし此上の二句は初句を次第に言を略きたるを、是は又初句をふたゝびかへしいひて、次の詞をおこせるなり、これを見れば上に也須良と二つあるは誤なるべし、さて本書に安難の下の傍に阿奈とあり、そは上の二つは安奈とかけるを、これのみ安難とかける事のみぎらはしきにより、後にかきしものと見えたり、○禰利乃乎乃は練之緒之にて、練絹にて作れる衣の紐の緒をいへり、練は和名抄布帛部に練熟絹也和名禰利岐沼とあり、紐は組の緒ならでも絹にても作るべき事は、萬葉集に狗錦紐とよめるあまたある上に卷十二に、白

と誤れり、奈を爾に誤れるは外にも例あり、その註にいふべし、此下に本書の註に也とあれど下句に也とあればこゝにはなきぞよき、○曾天乎多禮天也は上の如くにて下に也の言のそひたるのみなり、此句本書には上の二字を眞名、下の五字を片假名にて傍にかけり、そはうつせるをりに脱たるを後にかけるものと見ゆれば今はみな眞名に直して本文にかきつ、○安奈也須良介は上の如し、かく重ねいへるはそのやすらかなる事をかへすくもめでいへるなり。
千止利由惠仁 者末爾天天安會布
千止利由惠仁 安也毛奈支 古末津
加宇禮爾 安美奈者利曾也 安美奈
破利曾
○千止利由惠仁は千鳥故にて千鳥の鳴聲のおもしろき故にといふなり、千鳥は萬葉集卷四に、千鳥鳴佐保の河瀬、また千鳥鳴佐保の河門とよみ、その外の巻にもあまたよみ、古今集にも千鳥なく佐保の川霧とよめ

る千鳥におなじく、今もしかいふ鳥なり、たゞし漢名をいかにいふにか、眉州志といふ書に水史一名夜燕又一名冬燕其形似鵲領多栖海邊古屋之間とあるを、この千鳥なりと直海氏はいへり、又萬葉集卷十一に、明ぬべく千鳥しばなく、同集卷十六に、わが門の榎實もりはむ百千鳥千鳥は來れど君ぞ來まさぬ、古今集に、百千鳥さへづる春はなどよめるはおほくの鳥をいひて今とは異なり、○者末爾天天安會布は於濱出遊なり、千鳥は書紀神代御卷の歌に、播磨都智耐理とあり、後のうたにも濱千鳥ともよみて洲濱におほくをる鳥なれば、千鳥のなく聲をきかむとて、濱に出て遊ぶといふなり、この濱も有度濱をいふべし、○千止利由惠仁は上の如し、たゞし是は次句の安也毛奈支につけていふにはあらず、初の句をかへしいひてわが濱にいで、あそぶはその千鳥ゆるなり、といふなりこの言よくせずは心得たがふべきもので、○安毛毛奈支は文も無にて、あやなきは古今集に、山吹はあやなくさきそ、又あやなくけふや詠めくらさむ、又しるしらぬ何かあ

やなくわきていはむなどよめるにおなじく、何のしるしもなきをいふ、本は同集に、春の夜の闇はあやなし梅の花とよめる如く、色のあやめなきをいふ言なるをうつしては、かくしるしなき事にいへり、さて此あやもなきは網を張りたりとて小松が末は、千鳥をうるよしもなく何のしるしもなきをいふなり、あやもなきは小松が末にかゝりて網をはるにかゝるにあらず、なくといはでなきといへる事をおもふべし、○古末津加宇禮爾は小松之末になり、末をうれといふは古言にて、萬葉集卷二に子松が宇禮を又見けむかもとあり、同卷に子松が末にこけむすまでにとある末も、うれとよむ例にて、同集卷十一に平山子松末有廉叙波とあるは、うれのうれむぞとかさねいへるにて、末の字をうれとよむ證なり、又同集卷十四に藤の宇良葉、またうらがれせななどある宇良は宇禮を下の言につけていはむとて、宇良といへるにて、あれの山をあら山、あれの野をあら野などいふにおなじく、五音の第四の音を第一の音にていへるなり、是はらりるれるの音に限らず、

いづれの音にてもすべて下につけていふ時は、五音の第一の音にていふ事は、書紀神武御卷歌の註にくはしくいへり、うら葉といふ言は後の歌にもよめり、しかるを今の西國人の下の言につけていはずして、たゞに末をうらといふは誤なり、○安美奈者利會也の安美奈者利は網莫張なり、次の會は其にて、網をさしていふ、此言の事は書紀神武御卷歌の註にくはしくいへり、下のやは例の喚擧る言なり、一本には也字なし、これはあるかたよろし、さて小松が末は千鳥をうるよしもなく何のしるしもなき所なるに、徒らに千鳥おどろかしに網をはる事なかれといふなり、○安美奈破利會は上の如し、會を本書に留とあるは誤なり、今は一本によりぬ、さて伊勢内宮年中行事歌の中、鳥名子歌十二首の第十一首に波末爾伊天天安會不知止利名利安也之奈支已萬川加宇戸爾安見那於加禮會とあるは、此歌をとなく誤れるものと見ゆ、この濱に出てあそぶは千鳥をきく人の濱にいで、遊ぶなるを、濱にいで、あそぶ千鳥とはいづくより濱にいで、千鳥の遊ぶにや、

千鳥なりといへるも千鳥のみづからといふ如くにきいていかなり、安也之奈支之字は正しく毛を誤れるものなり、また網におかれといふもいかなるや、こは序にいふなり、

以者太之太仁 加佐和須禮太利也
以者太之太仁 止乃者良毛 之留久
毛可奈也 可左末川利於加旡 可佐
末川利於可無也 之良左良旡
安世可會乃 止乃者良 之良左良旡
以者太奈留 也多部能止乃者 千
加支止奈利乎 千可支止奈利乎

○以者太之太仁の以者太は和名抄國郡部に遠江國磐田伊波太とあるそこなるべし、次にもいはたなるやたべとあるにて以者太は地名なる事明らけし、之太も磐田にある地名なるべし、さていはただとは駿河國に志太郡あるにより、そこにわかたむために磐田にある

之太を、いはたしだといへりと見えたり、今住吉といふ所は攝津國住吉郡に住吉社ある所なるを、同國兎原郡にも住吉社ありて、そこをも住吉といふを、住吉郡なるにわかたむとて、今兎原住吉といふ類なり、又山城國綴喜郡にある田原といふ所を、今宇治田原といふは、宇治に近き所なるによりしかいへるにて、光仁天皇陵ある大和國添上郡田原といふ所は、古へにはその名きこえし所なれど今はしかるにもあらざれば、それにわかたむといへるにはあらざるべけれど、地名を重ねいふは同例なり、下の仁はそこにといふなり、この仁は本書には江とあれど江にてはいかにとも心得がたきにより、私に改めたるなり、○加佐和須禮太利也の加佐は笠、和須禮太利は忘而有なり、上の所に笠をわすれたりといふにて、下の也は例の喚擧る言なり、○以者太之太仁は上の如し、○止乃者良毛の止乃者は殿者にて、良は下に添へいふ言、下の毛もたゞ軽く添へたる言なり、たゞし者良の二字は誤りて上下になりたるにて、本は止乃良者毛にてもあるべし、又後に殿

原といふはおなじなみの殿をひろくさしていふ言なり、やがて是なるは源氏物語神卷に、あやしのほうしばらといふ言も見えたり、されど殿原といふは、いと後の言ときこえておほつかなけれど試にいふなり、さて殿とは郡の大小領などをいふべし、萬葉集卷十四に、つむが野に鈴がおときこゆかむしだの殿のなかしとがりすらしも、又いねつけばかゝるわが手を今宵もか殿のわく子がとりてなけかむなどあり、○之留久毛可奈世の之留久はしるべくにて、毛可は願ふ言、奈はそへたる言、也は例のやなり、たゞし毛可奈といふは今の京となりて後の言にて、萬葉にはみなもがもとあるを、こゝにもがなとあるは、後にうたふをりに改めたるにか、この歌は駿河舞の歌の中にも後に加へたるものと見ゆる事は、前にいへる如くなれど今の京となりての歌とはきこえぬを、もがなとあるはおほつかなし、さるは萬葉にこそ見えぬ、今の京の前よりもや、くにもがなともいひしにもあるべし、さてしるくもがなはわすれたる笠を殿のしるべくあれかしといふな

り、○加左末川利於可无は笠、將置なり、その忘れたる笠をとりにつかす、やがてそのまゝに殿にたてまつりおかむといふなり、さて笠は太刀鏡ばかりこそなけれ、古へはいさゝか重みせるものにて、萬葉集卷十六に、妹けせる菅笠小笠わがうなける珠の七條とりかへもまをさむものをとよみて、其外にも萬葉に笠をよめる歌おほきは、重みせるゆゑなり、今も田舎は同事にていやしき歌に、姉や妹に菅笠きせて笠や菅笠もみの紐などもうたへり、○可左末川利於可无也は上の如くにて、下に也の言のそはりたるのみなり、○之良左良无は不知將有にてしかたてまつりおかめども、そを殿はしらすあらむかと心もとなくおもふよしなり、此歌も初の歌におなじく二段にて是まで一段下又一段なり、その中下の一段は上の一段の答なり、かく問答の言を一首によめるは萬葉集卷五に山上憶良の貧窮問答の歌あり、尙古くは同集卷十三にあり、この前にひける卷十六の歌も問答の歌なり、○安世可曾乃は何か其にて何を安世といふは東人の言にて今も陸奥にてはし

かひよしなり、是を都あたりの人はなぜといへり、歌によめるは前にひける萬葉集卷十四の東歌に、白雲のたえにし妹をあせ、ろと心にのりてこゝばかなしけとある外にも、同卷に、あしがりのまゝのこすけの菅枕あぜかまかさむ子ろせ手まくら、又、かみつけぬあそ山つらぬをひろみはひにしものをあぜかたえせむ、又、あぜといへかさねにあはなくまひくれてよひにはこなにあけぬしだ來る、又、夕占にもこよひとのらろわがせなはあぜどもこよひよろ來まさぬ、又、苗代の小なぎが花を衣にすりなるまにくあぜかかなしけなどあり、よひにはこなによひ爾の爾を、今本に奈に誤れり、是は前にいへる奈を爾に誤れるとくらうへなり、○止乃者良は上の如くにして下に毛の字なきのみなり、○之良左良无は是も上の如くなれど、こゝろは上とはちがひて初句のあぜかをうけて何故にかしらすあらむ、必ず殿はしるべしといふなり、○以者太奈留は磐田爾有なり、爾有は前にいへり、○也多部能止乃者也多部は磐田にある地名なり、止乃者

は上の如くにて、上にいへる殿はやがて此也多部の殿なり、本書の註に或者爲乃とあるはよくもきこえず、○千加支止奈利乎は近隣をなり、笠をわすれておきたる磐田之太は殿のいませる也多部とは近き隣なるものをといふにて、おきたる笠を必ずその殿はしりてとるべければ、心ざしの程はむなしからじといふなり、さてとなりといふ言の心は、外の有所にて外のありかとはわが宅地の外にあるありかをいふ、外のありかのをあをつめてなといひ、下のかをはぶきてとなりといへるなり、かをはぶく例は妹がりといふも本妹がありかなるを、あと下のかとをはぶきたるにて今と全く同じ、しかるを後に妹のがり、人のがりなどいふはがりといふ言をいかに心得たるにかおほつかなし、そのうへ言のはじめを濁るはなき事なれば、妹がりといふがりは、もとよりにごるべき理なれど上にのといひて下をがりとはいへるべくもあらぬをや、天の河、安の河など河のかをにごりていふは別に故ある事にて、此例にあらす、そはくはしく書紀齊明御卷歌の註にいへり、○千

求子歌

求子といふはいかなる心の名にや、次にいさせる歌は古今集にのせたる藤原敏行朝臣のよめる冬の賀茂祭の歌にて、求子といふ名には何のよしもなきを、よくおもふに求子歌は本別にありしを賀茂祭のをりに殊に敏行朝臣に仰せて新たによましめて求子の音節にうたはしめ給ひしものと見えたるに、かの冬の賀茂祭は年中行事秘抄によれば、寛平元年十一月廿一日己酉に初めて行はれたるに、仍自去去年習東舞とあればその時に右の歌はよめるにや、又扶桑略記に、醍醐天皇昌泰元年十一月十九日己酉奉遣臨時祭使於賀茂神社、先朝有使仍當今相傳從今年被行レ之とあるを見れば、宇多天皇の寛平元年に初めておこなはれしより後八とせの間はなかりしを、醍醐天皇位につかせ給ひて再びせさせ給ひしと見ゆ、敏行朝臣のよめるは此時なりしもしりがたし、古今集に見えたる敏行朝臣の、老ぬとてなどかわが身をせめ來けむとよめるは、寛平

可支止奈利乎は上の如くにておなじ言をかへしいへるなり、本書には此次に裏書の榊歌の本末と幣歌の本末とすべて四首あれど、そは神樂歌にのせたれば是には除てしるさず、歌の心は神樂歌にいふを見るべし、

の御時の歌にてその時すでに年老ぬと見ゆれど、身まかられしは拾芥抄に至延喜七とあり古今集目録といふ書にも延喜七年卒とあり、その下に家傳云昌泰四年卒ともありて、ともに醍醐天皇の御代なれば右の歌をよめるはいづれの時とも定めがたし、されどそはいづれにまれ、これなるは延喜廿年の勅定なれば、その時に古くよりある求子歌はおきて、敏行朝臣の歌を専ら用ひ給へる定になりしなり、是より古き求子歌はすたれたるに、その後は又いづれの社にも東遊歌とてたてまつれ給ふは、みな敏行朝臣の歌ならひて新たによましめ給ふ事となりて、八雲御抄にあげ給へる如く、右の冬の賀茂祭の歌の外に、八幡臨時祭は紀貫之、平野女使は大中臣能宣、松尾行幸は源兼澄、日吉行幸は大貳實政、祇園行幸は藤原經衡、船岡今宮崇尊時は藤原長能よみて、貫之の歌は續古今集に、能宣のは拾遺集に、兼澄實政經衡長能四人のはともに後拾遺集にのせたり、又八幡臨時祭の貫之のは續古今集にのせたる外に家集に今一首あり、又能宣集に、冷泉院の御時初

めて石清水臨時祭行ひ給ふにとなふべき歌奉り侍りしに、君が代に水底すめる石清水ながれて千代につかへまつらむ、又圓融院の天延三年感神院の東遊歌を年中行事秘抄、公事根源の二書にのせたるは、少しのかはりあれど、是等もみな新たによましめ給へるなり、又、公事ならでも前の駿河舞の所にいへる能因の歌も新たによめるなり、又定家卿の拾遺愚草に住吉並依羅社に求子歌よみて奉るべきよし祠官申し、かばたてまつりしとありて、住吉の松が根あらふしき波にいのる御かけは千代もかはらじ、君が代はよさみの森のことはに松と杉とや千たびさかえむなどもありて、後々にはかくいづれにも新たによむ事となりたるにより、いよ古への求子歌はすたれはて、今は求子といふ名の心さへしられずなりにたるなり、たゞし源氏物語末摘花、卷にたゞ梅のはなの色のごと三笠山のをとめをばすててとうたひすさびてとある所の奥入に、求子歌なり、春日社にては三笠山とうたふ、餘社にては各其所をうたふなりとあり、河海抄にもその如くにあり、是を見

といへり、處女塚の事は本萬葉集にいでたる古事にて、その塚はまさしく攝津國鬼原郡にあるを、太平記にも求女塚とあり、猿樂のうたひものにも求女塚とあり、今もしかいへれば古くよりも求女塚といひしときこゆれば、をとめ子をもとめ子といふまじきにもあらず、されど右の外にをとめをもとめといへる事はいまだ見えざれば、尙おほつかなくこそ、さて前にいへる八幡臨時祭は江家次第、年中行事秘抄、公事根源等には天慶五年四月廿八日に初るよしをいひて、その歌は續古今集の貫之の歌に、上の二句のみかはりて下の三句は全くおなじきをのせたり、こはおもふに貫之の歌は續古今集にも家集にも詞書に、朱雀院の御時とあれば同時ときこゆるを、歌にかはりあるは集には後に改めてのせたるを、續古今集は家集をとれるものと見えたり、右の天慶を公事根源の今本には天曆に誤れり、天曆は朱雀院の次、村上天皇の年號なり、また能宣集に、冷泉院の御時はじめて石清水臨時祭おこなひ給ふとあるは、是も賀茂臨時祭の如く、朱雀院の御時天慶

ればたゞ梅の花のごとしかふといへるはやがて古き求子の歌にや、しからば求子とはすてたるをとめ子を求むるよしにてもあるべし、その時は子をもとむといふを求子とかけるに、下よりかへらずしてその文字のまゝによみを付たるものなり、されど右の歌はかたはしのみにて全からねば、慥なる事はしりがたき上に、後によめる歌によりておもへば、古き求子歌もおなじ常の三十一字の歌なるべきを右の歌は文字の數定らねば、しかにはあらぬか、そもうたふふしによりて言の長短には拘はらぬにもあるべし、かにかくに右の歌は後によめるには異なるを求子歌なりとしも殊にいへるは古き求子歌なるべくおもはるゝなり、今井氏はもとをとは通ひて求子はをとめ子にて、やがて右の歌にをとめをばすて、といふ言のあるにより名付たるなるべしといへるは是も古き求子歌は右の歌なるべくおもへるなり、俊賴朝臣の歌に、もとめづかおまへにかゝる柴舟のきたけになれやよるかたもなしとよめるもとめづかを袖中抄に大和物語をひきて、をとめ塚の事なり

五年に初めて行はれしよりは久しくなかりしを、冷泉院の御時に初めてといへるにて、八幡臨時祭は、冷泉院の御時に初めておこなはれしといふにはあらず、此事よくせずはおもひまがふべきものなり、その後、圓融院の御時御宿願の賽によりて、天祿二年三月八日におこなはれし事、扶桑略記に見え、それより毎年此事も此時よりなるべし、是は序にいへり、又拾遺愚草の求子の歌二首の中、前の歌は續後拾遺集にものせたるを明月記には東遊歌とあり、平野行幸の東遊歌をも河海抄には求子といへり、是は後に東遊歌とてよめるは駿河舞の所にもいへる如く、みな求子歌にならひてよめるにより、ひろくは東遊歌といふを古くよりある餘の東遊歌にわかちては、求子歌といへるものなり、しかるを公事にて東遊歌といひ、私事にては求子歌といへるならむと今井氏のいへるははしからず、又上にひける八雲御抄の平野女使を拾遺集には男使とあり、いづれよけむしらねど江家次第平野祭條に内侍參進

可^レ供^レ之とあり、又承平四年十一月十二日内侍有障
不^レ參以^三女史^二爲^三代官^一とあるを見れば、常は内侍う
け給はりて女使なるを、扶桑略記によるに能宣のよめ
るは寛和元年四月の事ときこゆるに、其時は同書に左
衛門權佐藤原惟成爲^レ使とあれば、男使とあるかたよ
きに似たり、男使ともしもいふは、常は女使なる故なる
べし、尙男使女使の事は江家次第にも見えたり、又松
尾行幸のをりのよみ人兼澄を、八雲御抄の今本に兼隆
とあるは誤なり、兼隆といふ歌人はきこえたる事な
し、後拾遺集に兼澄とあるによりて改めつ、兼澄は家
集もあり、又感神院といふは祇園社の事なり、又大和
物語拾穂抄に公事根源を引て、石清水臨時祭、賀茂臨
時祭いづれにも舞人あり、祇園日吉にもあれど舞人の
沙汰なしとあるは、いかなる事にか、公事根源を見る
に日吉臨時祭はある事なし、祇園臨時祭には同書にま
さしく殿上五位東遊を奉らると見えたるをや、是らは
見當るまゝにいふなり、又上にひける俊賴朝臣の歌の、
きたけになれやよるかたもなしとあるなしはなきとい

比女古末川 與呂川世不止毛 以呂
者可者 安波禮 以呂者可者良之

○安者禮は何事にまれ心に物をせちにおもふ時にいふ
言なる事、書紀景行御卷の歌の註にはしくはいへる如
し、このあはれは切にめづる心なり、○千者也布留は
本神といふ言をいひてむとての枕詞なるを、是はう
つして神の御社をいはむとていへるなり、言の心は是
も書紀仁徳御卷歌の註にいへり、○賀茂能也之呂乃
賀茂之社之なり、賀茂社は延喜式神名帳に賀茂別雷
神社亦若雷とありて本日向の曾の峰に天降まし、賀茂
建角命にまして、初は神武天皇の御先にたちて葛城の
峯にいまし、そこより山城國相樂郡岡田の賀茂にゆき
まし、それよりまた同國愛宕郡今の賀茂にいたりまし
て鎮りませし事、山城國風土記に見えたり、賀茂とい
ふ名は本葛城の高鴨にいませしにより、山城の岡田に
もその名をうつし、今の所をも賀茂と名付たるなり、
社のやは屋にて、しろはその所をしるよしの名なり、

ふべき所なるを然よめるは彼朝臣の僻よみにて、堀川
院百首の中、同朝臣の歌に、世の中はうき身にそへる
影なれやおもひすつれどはなれざりけりとよめるにお
なじ誤なり、その後西行の歌に津國のなにはの春は夢
なれやあしのかれ葉に風わたるなりとよめるも、俊賴
朝臣の僻よみならひたるものにてみな誤なり、その
前にも朗詠集に萬葉集の、百敷の大宮人はいとまれ
や梅をかざしてこゝにつどへるといふ歌を、櫻かざし
てけふもくらしつとしてのせたるなども誤なり、新古
今集にもその如くあるは朗詠集をとれるものなり、是
も序にいへり、かくて求子歌の事は十に六七までも今
井氏の萬葉緯に證書どもをいだせるを、今は取用ひ
て、その上にわがかうがへたる事どもを加へてしるせ
るなり、後の人今井氏の功をゆめなわすれかろしむ
そ。

安者禮 千者也布留 賀茂能也之呂
乃 比女古末川 安者禮

筆葉譜には此句を此御社とあり、是は異社にうたふ時
にうたひかへたるものなり、○比女古末川は姫小松に
て、姫松は俗に女松男松とてある女松をいふ、皮赤く
て葉の細かなる松なり、契沖もはやくしかいへり、或
人はひめとはすべて小さくてうるはしきをいふといへ
れど、姫百合姫椿などこそさる心にもあらめ、姫小松
の姫はさる心にはあらざる事は、古今集に、われ見て
も久しくなりぬ住の江の岸の姫松いくよへぬらむ、又
住の江のきしの姫松人ならば幾代かへしと問はましも
のをとよめるは、年老たる松をいへるなれば、姫松は
小さくうるはしき松をいふにあらず、女松なる事明ら
かなり、○安者禮は上の如し、此歌二段にて是まで一段
なり、○比女古末川も上の如し、是より下又一段なり、
さて諸舞片舞の事は前の駿河舞の所に體源抄を引いて
いへる如くなるに片舞の時は第三句よりうたふとある
は、此句より下一段をうたふ事と見えたり、又筆葉譜
にのせたるは此上にうたふ聲とあはれのとありて下は
すべてなし、○以呂者可者は下の色者變良之をいひ

でむとて、良之をばぶきて先いろはかはとのみいへるなり、此例は神樂の片折を始め催馬樂に多き中に、安波禮といふ言をへだてたるは我駒の二段に全くおなじ、たゞしたゞ以呂者といふべきを可者までいへるは少しいかなれば此下に良之の二字脱たるにはあらぬか、しからば下のいろはかはらじは此句を再び重ねいへるものとすべし、又上にいへる如くにて可者は衍文にてもあるべし、○安波禮は上の如し、○以呂者可者良之は色者不_レ變なり、松はもとより常葉なるものを殊にかくよめるは、松によそへて賀茂の社の萬代に榮えまさむ事をたへたるなり、さて此歌は前にいへる如く敏行朝臣のよめるにて、古今集にもいりたればよき事はいふまでもなけれど、後なるはよきも見所すくなく、古きは拙くしてうははわろきやうなるもあれど、よく見れば中に味ありてめでたきを、此歌を専ら用ひ給へるより、古き求子歌はすたれたるぞかへすぐもあたらしきわざなりかし。

るものと見ゆ、さていかなる文字を誤れるにか、止字などはよく似たれど止良止利とは何のよしともきこえず、之字の誤にて之良止利は白鳥かともおもへど、白鳥は延喜式祝詞出雲國造神壽詞に、白鶴乃生御調能玩物とありて、今字音にはくとうといふ鳥なり、熱田大神縁起の歌に、等美和多流久具比何波禰乃、また神樂歌にも、美奈止太爾久久比也川乎利とよめるくぐひはみな白鳥の事なり、しかるに次の乎止利は媒鳥なるべきを白鳥は大なる鳥にて、それを媒鳥にせむ事はいかなれば、尙しかにはあらずてもし次の良字もともに誤にて、比衣止利を誤れるにてはなきか、鴨は和名抄に鴨比衣土利貌似_レ鳥而蒼白者也見え、うたに、籠の内にまだすみなれぬひえ鳥のともよみて、媒鳥にもすべきものなればなり、さてひえ鳥は今ひよ鳥といふ鳥にて、なく聲のひえともひよともきこゆるにより、しか名付けたるなり、次の乎止利は上にいへる如く媒鳥なるべし、媒鳥は右の同抄に文選射雉賦注云少養_ニ雉子_ニ至長

裏書歌

立搔歌

本書註に立字可_レ作_ニ太刀_一何_ニ則此舞拔_レ劍立_ニ其體似_ニ東遊舞_一故以附出_ニとあり、太刀搔は太刀打にて書紀崇神御卷に擊刀をちがきすとよめり、又古今集に鳴の羽搔とよめるかきも羽をふるを、羽ぶきといふにおなじく羽を打つを羽がきといへるにて、この太刀搔のかきにおなじ、古今集の羽搔をいまだよく心得ぬ人おほし、但し此事は賀茂氏もはやくいへり。

立良止利乎止利 津津美乃字倍

安乎也支加 之奈波留那加爾 伊

毛多多留女留 世奈多多留女留

奈止世奈 世那也 加久呂爾之天

○立良止利乎止利の立はうつなく誤字なり、本書に立搔の立とならべてかけるにより、それにまぎれた

狎_レ人能_レ引_ニ雉_一者謂_ニ之媒_ニ師說_ニ乎度利_一とあり、されどそは射雉賦なるにより雉につきていへるのみにて、實にはいづれの鳥にもいひて雉にかぎりたる事にはあらず、歌によめるは鳥名子歌の第八首に、よき籠にてをとりをかけていざやあそばむとあり、同第十首にもその如くあり、又萬葉集卷十三に、末枝にもちひきかけ中枝にいかるが懸け下枝に鶺鴒をかけしが母をとらくをしらにしが父をとらくをしらにとよめるも媒鳥の事なり、さてそは右の歌に中枝下枝をよみ、鳥名子第十首の歌の上にも、大川柳葉廣くてたてる大川柳とよめる如く、媒鳥は木の枝葉のしけりたる所にかくるにより、下によめる堤の上の青柳の中に世奈がかくれたる事をたとへてかくはいへりといひ、右の熱田縁起の今本には具の字を昆に誤り、禰の字を脱せり、本居氏はおちたる字を志字なりとしてその次句にひはほそたわやがひなとあるひはほそをいひいでむためなりといへれど、喙は堅くなつかしからぬものにて、女の手のやはらか

にほそきたとへにいふべくもあらざれば、したがひ難し、右の歌は古事記にもおせて、互に誤あるにより、われ先に古事記と縁起とを引合せてかうがへをかけるに、脱たる字は禰字なるべきよしもそれにくはしくいへり、言長ければこれにはいささず、尙いとまありて古事記の歌の註釋をもかく事あらばまたそのをりにもいふべし、○津津美乃字倍は堤の上なり、堤は和名抄に、陂堤畜水曰陂築土遏水曰塘又謂之堤、和名豆三とあり、○安乎也支加は青柳之なり、あをやなぎをあをやぎといふは常の事にて、ここもあをやなぎといひては下の言あまれるにより、なをばふきたるものにて、言を省くは春さあめを春さめといふにおなじ例なり、雨をさあめといへるは新撰字鏡に凍暴雨波也佐安女とあり、あをやなぎとよめるは萬葉集卷五に安乎夜奈義うめとの花をとあるなり、○之奈波留那加爾の之奈はしなひしなふなどいふしなにおなじと見ゆるを、下を波留といへるぞ心得ぬ、そはいかにといふに、おもひおも

じく、長き心、ひは上にいへる如くそのさまをいふ言なり、にほひなどいふひも是におなじ、たゞしなびくのひは下のくにつゞきて、なびくは長引くなり、しなひとなびくとはなはおなじけれど、ひは異なるを同言とおもひあやまりそ、さればしなひのひはすみていひ、なびくのひは濁りていへるなり、さてそのしなひは催馬樂に、青柳のしなひを見れば、伊勢物語に、その花の中にあやしき藤の花あり花のしなひ三尺ばかりなむありける、大和物語に、やなぎのしなひ物よりけに長きなむ此家によりける、狭衣物語に、宮すこしおきあがり見おこせ給へるつらつきまゆのうつくしさ花のほひ、藤のしなひにもこよなくまさりて、枕草子に藤の花しなひながく色よく咲たるいとめでたしなどあり、又柳藤ならでも萬葉集卷十に、秋はぎのしなひにあらむ妹が姿を、卷十三に、春山のしなひさかえてとあり、しなふとよめるは同集卷三に、まきの葉のしなふせの山、卷二十に、立しなふ妹が姿とあり、○伊毛多多留女留の

ふおもへるといふ例によれば、しなへるとこそいふべきを、しなはるとはおもはるといふ例におなじく、青柳がみづからしなはるといふになりて、他よりいふ事にはならずていかゞなり、風俗歌の、我門にしだる小柳といふ言あり、もしくは奈は太の誤にて波は衍文にてもあらむか、又波はたゞに倍の誤にてもあるべし、さてしだるのしは、しりにて物の末をいふ、たるは垂なり、書紀孝德御卷註に、垂此云三之娜屢とあるは垂の字をやがてしだるにかりたるものなり、又しなへるはしなひてあるといふにおなじ、すべてへるは、ひてあると通ひて、ひてをつゞむればへととなり、あるのあをばふくは常の事なり、されどしなひしなふしなへるなどいふ、ひふへるは本はたゞひはそのさまをいひ、ふはそのはたらきをいひ、へるは又そのはたらけるさまをいへるのみなるに、おのづからに、言ののべつゞめにかへるは、御國の言のくすしきぞかし、かくてしなひのしは、しだるのしにおなじく、なはなびくといふなにおなじ

伊毛は妹、多多留は立而存にてたちてあるのちてあをつゞむればたとなるにより、たゞるといへり、下の女留は是もそのさまをいふ言なり、すべてめりめるめれといふは、みなそのさまをいふ言なり、そのよしは先ありといふは、あるめりにて、あるめりのめをつゞむればたととなりて、あめりはあれりに通ひ、あめるはあるめるにてあれるに通ひ、あめれはあるめれにてあれに通ひ、又いふめりはふめをつゞむればへととなりて、いへりに同じく、いふめるはいへるにおなじく、いふめれはいへれにおなじ、かくていへり、いへる、いへれのへは、前にいへる如くひてに通ひて、いへりはいひてあり、いへるはいひてある、いへれはいひてあれにおなじ、是にてめり、める、めれもみなそのさまをいふ言なる事をしるべきなり、又なめりといふは、にあるめりのにあをつゞめて、なといひ、れをのべてるめといへるにて、なめりはにあれりにおなじ、なめる、なめれも是になすらへてしるべし、又秋もいぬめりなどい

へる、いぬめりはいねりにおなじ、さればこのたゝ
るめるもめをつゝむればれとなりて、たゝれるに
おなじくして、そのたゝれるは、たちてあれるのち
てあをつゝむれば、上にいへる如くたとなるにより、
たゝれるといへるなるを、又たゝれるのたれをつゝ
むればとなりて、たゝるめるはたてるといふに言
ののべつゝめ通へり、こを見るにもいよ、御國の言
ののべつゝめぞ、えもいはすくすしきや、たゝしこ
こはめりといふべき所なるをめるといへるは下のか
くろにしてにつゝけいはむとて、めるといへるなり、
さて此妹は次の世奈の姉妹などをいふべし、○世奈
多多留女留の世は夫にて奈は親しむ言なり、世奈と
よめるは萬葉集卷十四にせなの袖もさやにふらし
つとあり、後には常の事なり、たゝるめるは上の如
し、○奈止世奈の奈止は何とてなり、世奈は上の如
し、奈止の止を本書には片假名にてトとあり、今は
眞名に改めてかきつ、○世那也は上の世奈に也の言
をそへてかさねいへるのみなり、○加久呂爾之天は

といへるは還饗のをり東遊ありし後をいひて、常の
東遊の後をいふにはあらざるに似たり、よく考ふべ
し、又花鳥餘情に神のますは求子の二段なりとある
はいかゞなり、東遊の後にうたふによりしかいへる
にか、おほつかなし。

加美乃末須 加須加乃波良二 多
津也也乎止女 多津也也乎止女
也乎止女波 和加也乎止女波 加
美乃也乎止女 加美乃也乎止女

○加美乃末須は神之坐なり、風俗歌には末須を也須
とあり、河海抄にやすともうたふなり、多好方説と
あり、○加須加乃波良二は於春日原なり、春日は
和名抄に大和國添上郡春日加須加とあり、春日とい
ふ地名の事は書紀武烈御卷歌の註にいへり、此句を
風俗歌には此御社にとあり、これは春日の社にうた
ふにより春日のはらにとかへてうたへるものなり、
大将のかへりあるじに此歌をうたふは、そのかみの

隠れにしてなり、かくれをかくろといふは、らりる
れろをかよはしていへるにて、かくれといふよりは
かへりて古くきこえてよろし、さてかくろにしては、
かくろにてにて、しはたゝそへたる言なり、このし
てといふ言、萬葉集に多き中に、してにすべて心な
きもあり、くはしくは同集卷一の註にいへり、○す
べての心は媒鳥の木の枝葉のしけみにかくれたるが
如く、堤の青柳の中にわがおもふ男の姉妹などと
もに、立てあるが柳にかくれて見えぬを心ぐるしく
おもふよしなり。

春日歌

本書の註に東遊の後多唱二件歌二故以附出とあり、た
ゝし左の歌は本風俗の八處女の歌なるに、源氏物語
瑩卷の河海抄に一方の大将のかへりあるじの日風俗
の神のますといふ歌をうたふ定事なりとあると、前
にいへる北山抄大将賭射還饗の所に、或命東遊將
監以下舞とあるを合せ見れば、東遊之後多唱二件歌

大将はおほくは藤原氏なりし故と見えたり、たゝし
求子の歌の賀茂の社のを、箒簾譜に此御社のとある
によれば、これに春日の原にとあるぞやがて本にて、
かへりて風俗に此御社にとあるは、うたひかへたる
方にもあらむか、尙下にいふを見るべし、春日社は
延喜式神名帳に春日祭神四座とありて、四座は續日
本後紀の宣命によるに、建御賀豆智命、伊波比主命、
天兒屋根命、比賣神なり、延喜式祝詞にのせたるも
その如くなり、さて波良二の二は二にてもあるべし
れど、もしくは仁を誤れるにもあるべし、○多津也
也乎止女は立や八處女にて立は祭の歌舞に立なり、
也は例の喚擧ぐる言、次の八も例の数の多きをいふ
言なり、處女は若き女をいふ、言の心は書紀仁徳御
卷歌の註にくはしくいへり、本書には乎止女の女を
脱せり、今は私に補ひつ、○多津也也乎止女は上の
如し、此句を本書にはおほくの二の字もておくりて
かけり、下の加美乃也乎止女を重ねたる句も是にお
なじ、今は何れも眞名に直してかきつ、○也乎止女

波は八處女者にてそのたてる八處女はといふなり、河海抄に此歌を二段なりとあり、風俗にも二段にわかてるに、是より下を前の一段とし、此上を後の一段として此次の我やをとめはを、わがやをとめぞとあり、下の二句の神のやをとめをみな立ややをとめとあり、二つのうたをならべ見るに、此方よきに似たり、しかればいよ、是を本にて風俗の方をうたひかへたるものと定むべきにや、○和加也乎止女波の和加は我にて上の言をかへしていふに、親しみて我といふ言をそへていへるなり、也の字を本書には世に誤れり、○加美乃也乎止女は神之八處女にて此八處女は常の八處女にはあらず、神につかへまつれる八處女ぞとほめていへるなり、○加美乃也乎止女は上の如し。

倭歌

本書の註に世稱三大歌其類尤多唯稱二一首但其音同之とあり、倭歌大歌といふ事は今殊に何にも見えた

つ。

乎乎乎乎 乎乎乎乎 安末都加世

久毛乃加與比知 布支止知與

乎止女乃須加多 之末良止止女无

○乎乎乎乎は前にいへる如く歌をうたひいづる前にいふ聲ときこゆるを、本は於、一字をかきて下はみな二字をもておくりてかけり、於字をかけるは前にもいへる如く誤なるべし、又前にいへる如く神樂の阿知女法にも於於於とあるを、御神樂式註に於於御先聲也雄雄應とあるよし萬葉緯にいへれど、於と雄應とは假名異なるを一つにいへるは妄りなれば於於御先聲といへるも實は雄雄なるもしりがたし、又乎と於とは、乎はよぶ聲、於はとむる聲といふ人ありて今も俄に物をとむるには於といへば於於於於はとむる聲ともすべけれど、是は俄に物をとむるにはあらざれば従ひがたし、故今は前にある如くみな乎に改めてかきつるなり、さて此歌は古今集

る事なし、古今集に大歌所の御歌としるして、その中にふるきやまとまひのうたとて、しもとゆふかづらき山にふる雪のまなく時なくおもほゆるかなといふ歌をのせたるによれば、倭歌とは倭舞の歌をいひてその類のうたをすべて大歌といへるにか、たゞし左にいだせる歌は古今集にのせたる良岑宗貞朝臣の五節の舞姫を見てよめる歌なれば、しかにはあらぬか、おもふに後にはそれをも倭舞の歌にうたひしにもあるべし、又古今集の外に伊勢、内宮、年中行事歌の中にも大和舞のうたおほく、體源抄に資忠記を引、倭舞の歌は宮人を用ふるよしといへれば其類尤多といへるにか、和舞といふ事は神樂歌の裏書にも見えたり、註の唯稱の稱字はきはめて誤字と見ゆれど、いまだ何字を誤れりともおもひ得ず、但字は本は佐とあり、但とせるは私に改めたるなり、之字は也とあり、一本にはまさしく真名にて也とあれど、本書に此上にも下にも同之といふこと三所までありて、之字の誤なる事疑ひなければ是をも私に改め

にのせたる上に世に女、童の玩ぶ百人一首といふものにもおせて、あまねく人のしりたる歌なれば今は殊更にとかず、そも本文ならば例によりてその心をもとくべけれど、これは裏書なればうるさくてもだせり、たゞし古今集にも百人一首にも終の句をしはしとめむとあるを、これにしまらとあるは本はしかりありけむを古今集をえらべる時に、しばしと直していれたるものなるべし、古今集は古人の歌をえらべる時に直せる事あるは新撰萬葉集とくらべ見てしるべし、百人一首はいと後のものなれば、古今集をとれるものにて、いふまでもなし、さてしばしをしまし、しばらくをしまらくといふは古言にて萬葉集卷十にほとぎすあひだしましおけ、卷十四にしまらくはねつゝもあらむをなどあり、但ししまらとのみいふは少しいかなれば、良は之の誤にて本はしましなりしなるべし。

柏木歌

加之波支乃 毛利乃也 伊止利古

伊止古曾

○加之波支乃ハ榊木之ナリ、榊ハ和名抄ニ榊和名加之波柏和名上同とあれど榊と柏とは異木にて榊はならがしは、柏はこのてがしはなり、歌によめるはならがしはの方にて萬葉集には、そばとよみ、古今集にも佐保山のは、そのもみぢなどよめるもおなじ木にて、俗にははらそといひ又五月五日に此葉にて糕を包むにより、もちがしはともいへり、ならとは、そとを和名抄には別にいだして榊和名奈良柞和名波波曾とあれど、榊は周官といふ書に柞榊とつゞけいへれば柞の類とはきこゆれど、字書を見るに榊と同木なるよしも見えざれば、ならにはあらじ、柞はくぬぎにて、波波曾には是もあたらざるなり、かくて歌にかしはとよめるはならなる證は後撰集に枇杷左大臣よう侍りてならの葉をもとめ侍りければ、ちかぬがあひしりて侍りける家にとりにつかはしたりけ

れば、俊子、わが宿をいつならしてかならの葉をならしがほにはとりにおこせる、返し枇杷左大臣、ならの葉にはもりの神のましけるをしらでぞをりしたりなさるなどある次の歌の初句を、大和物語、袖中抄にはともに、かしは木にとあり、又右の歌を本歌にて、新古今集法橋慶算がよめる歌に、時しもあれ冬ははもりの神無月まばらになりぬ森のかしは木ともあり、又源氏物語かしは木巻にも、おまへのこだちどもおもふ事なけなるけしきを見給ふもいと物あはれなり、かしは木とかへでとのものよりけにわかやかなる色して枝さしかはしたるを、いかなるちぎりにかすゑあへるたのもしさよなどの給ひて、しのびやかにさしよりて、ことならばならしの枝にならさなむ葉守の神のゆるしありやと、みすのとのへだてあるほどこそうらめしけれとてなけしにより居給へるなよび姿、はたいといとうたをやぎけるをやとこれかれつきしろふ、此あへしらへきこゆる少將の君といふ人して、かしは木に葉守の神はまさすと

も人ならずべき宿の木すゑかななどあるにて、かしははならなる事いちじるきに、八雲御抄の木部にもかしははならのはとあるなり、又このてがしは、萬葉集卷十六に、なら山の兒手柏のふたおもにとあり、

尙かしはといふ名の心は神樂歌の註にいふべし、後撰集のちかぬは、大和物語に馬のぜう藤原千兼といふ人の妻に俊子といふ人なむありけるとありて、俊子の夫なり、○毛利乃也の毛利乃は杜之にて也は例の喚擧る言なり、神樂歌にも、うゑつきや田中のもりやとあり、○伊止利古はいまださだかならず、伊は上にそへいふ言にて、止利古は取來かともおもへど、此句の上下に文字いたく脱たりと見えて、何のよしともしりがたし、この歌は本歌ありと見ゆれど、その本歌今きこえねばいかなる文字を脱せりともしるよしなし、本歌ありと見ゆるよしは大和物語に良少將兵衛の佐なりける比、監命婦になむすみける女

のもとより、かしは木のもりの下草おいぬとも身をいたづらになさずもあらなむ、返し、かしは木のもり

の下草老の世にかゝるおもひはあらじとぞおもふとよめるを見れば、かしは木のもりといふには本歌ある事疑ひなし、○伊止古曾は是も何ともきこえがたけれど、もしくは伊止の下に利字おちて、伊止利古は上にいへる如くにや、その時は下の曾は其にて、かしはをさしていへるなるべし、また本のまゝにて伊止古は何處か、又從兄弟をいこといふいとこかともおもへど、言たらねばいづれともしられずなむ、何處をいこといへるは神樂の畫目の歌に見えたり、尙そこにいふべし。

加太於呂之

加太於呂之はうたひぶりの名なり、拾芥抄風俗部雜藝の中に、早歌片下とならべ出せり、但し古事記にさ、ばにうつやあられのといふ歌を夷振之上歌也とありて、おほきみをしまにはぶらばといふ歌を夷振之片下也とあるを見れば、本は夷振の片下とぞいひけむを、たゞ片下とのみいふはいかにといふに、後に片下とい

ひて傳はれるは夷振の片下のみなるにより略きてはただ片下といひしと見ゆるを、又後には片下といふが一つのうたひぶりの名になりたるものなり、もし初よりたゞ片下とのみはむはことならずして、ことわりきこえぬをもて、本は夷振の片下なりし事をささるべきなり、夷振の事は書紀神代御卷歌の註にいへり、さて片下はいかにうたふにか、おもふに今も賀茂、石清水の祭のをりに東遊あるには片下もうたふべけれど、その家にあらざるより外はしるよしなし、體言抄に續教訓抄を引ていはく、所のうたひは又別なるにこそ、法文の歌、今様、片下、早歌これわくものいとかたしとあれば、はやくよりくはしくしれる人はすくなかりしと見えたり、しかるに源氏物語若菜巻に求子はつる末にわかやかなるかむだちめかたぬぎてとある所の花鳥餘情に、長保五年住吉詣於御社左府以下、上達部其外殿上人合十舞了神主立舞左府脱衣被、今案は片舞といふものなり、神社行幸かやうの物語の時は求子はて、後公卿十人肩ぬぎて舞事あり、片下といふ即是な

や小びえの山も秋くれば遠目も見えず霧のまがきにとあるは、正しく此歌をとりてよめるなるに、ひれをひえとよみかへたり、さてその大ひえ小びえは續後撰集神祇歌に、大ひえや小びえの袖に宮木引いづれのねぎかいはひそめけむとありて、此歌は日吉の祭にさき立ちて午日の御うらの歌となむむかしよりいひつたへたとあるを見れば、近江の比叡の山にてこの大ひれ小びれとは異なり、おもひまがふべからず、又禮の字を羅とよみて近江の比良なりといふ人あるは、きはめたる僻言なり、禮をらいとはよめど羅の假名に用ひたる例はなき上に、比良に大小ある事をいまだきかず、東國の山なる事に心づかざるよりいへるものにて、論ふにもたらねどまどふ人もあるべければこゝにことわりぬ、○乎比禮乃也末者也是小比禮之山者哉なり、大比禮小比禮とは比禮の山に大小の二つあるをいふなり、乎比禮の比は濁りてよむべし、すべてこの類の乎の下の言は濁りていふ例なり、そのよしはくはしく書紀景行御卷歌の註にいへり、○與利天古曾は依而社なり、

りとあるは、いかなる事にか、片舞は諸舞にむかへていへる名なる事は前にいへる如くにて、片舞と片下とは異なる上に、さては何とやらむ片下といふが肩をぬぐ事の如くにきこゆるもいかゞなり、もしかたおろしといふ即是とあるかたおろしは、かたまひの誤かともおもへど、片舞といふは求子につきたる名なるを、求子はて、後とあるは本より片おろしにて片まひの誤にはあらざる事明らかし、又神樂歌に片折、諸擧といふ事あるをもて、この片下をとかむとする人あるは誤なり、片折、諸擧の事は神樂歌にいふを見るべし。

於保比禮也 乎比禮乃也末者也 與利天古曾 與利天古曾 也末者與良奈禮也 止保女者安禮止

○於保比禮也の於保は大にて比禮は山の名、下の也は例のやなり、たゞし比禮といふ山はいづくの山にか、東遊歌なれば東國なる事は疑ひなきを、今さる山きこえず、物にも見えたる事なし、曾根好忠集に、大ひえ

依は近くよるをいへり、此歌も二段にて是まで一段なり、○與利天古曾は上の如し、是より下又一段なり、○也末者與良奈禮也は山者吉有哉にて哉は例の喚あぐる也なり、上の山者哉の哉も是におなじ、吉を與良といふは安をやすらといふに同じく、良はそのさまをいふ言なり、○止保女者安禮止は遠目者雖有にて、遠目の目は見えなり、雖有は古今集に、みちのくはいづくはあれどとある、あれどにおなじく、これはよくはあれどといふにて、よりて近まさりのするよしなり、かくいへるはよき女をたとへていへるか、又はたゞ山をほめてよめるにもあるべし。

東遊歌 終

第八風俗譜

文治奧書本

風俗譜

鳴高 又號大宮 三段

難波乃都布良江 二段

玉垂 二段

知々良々

東道

筑波山

荒田

甲斐加禰

伊勢人

大鳥

八乙女 二段

我門 二段

菅村

常陸 又號常陸爾波

鳴高 又號大宮

ナリタカシヤナリタカシ オウミヤチカクテ ナリタカシ
ハレノナリタカシ

二段

ヲトナセソヤミソカナレ ヲウミヤチカクテ ナリタカシ
アハレノナリタカシ

三段

アナカドコンドモヤミソカナレ ヲウミヤチカクテ ナ
リタカシ アハレノナリタカシ

難波乃都布良江

ナバノツブラエノ ハルナレバ カ爪ミテミユル ナバ
ノツブラエ

(裏書) 多近久云從十二月至五月マテハ春ナレバカ爪ミテミ

ユルト歌フ從六月至十一月マテハ秋ナレバキリタチワタル
ト歌フ普通様

最秘説ニハ十一月五節過了テ五月五日マテハ春ナレバト歌
フ五月五日過了テ五節マテハ秋ナレバト歌フ此傳殊可秘
人敢不知

イカルカヤノ ミヤストラニ カルカヤノ シサヤ カイ

カルカヤノ

筑波山

ツクハヤド ハヤドシゲヤド シゲキクソヤ タガコモ
カヨフナシタニ カヨヘワガツドハシタニ

荒田

アラタニオフル トミクサノハナ テニツミレテミヤヘ
デイラムヤ カツタエ

甲斐加禰

カヒカネハ シロキハユキカヤ イナチサノ カヒノケ
ゴロモヤ サラストテフクリヤ サラストテフクリヤ

(裏書) 多近久云好方説甲斐加禰伊勢人不打拍子甚成其哥近
方成方體打之古譜皆着拍子實是明白也

伊勢人

アヅ丁デニ カルカヤノ ヨコチウチニ ナサケオ カ

二段

ツブラエノセナヤ ハルナレバ カ爪ミテミユル ナバ
ノツブラエ

玉垂

タマタレノ カヌ^{イメ}チ ナカニ爪ヘテ アルジハモヤ サ
カナモリ^{イト}ニ サカナモトメニ

二段

コユルギノ イソニ ワカメカリヤゲテ アルジハモヤ
サカナモリニ サカナモトメニ

知々良々

チヂララガカドニ ウソフイドロコソタテレ テウドチ
ヒサゲテ ナドカハヤタテリシモセザラム チノレガヤ
イトコセノカドニ テウドチヒサゲテ

東道

アヅ丁デニ カルカヤノ ヨコチウチニ ナサケオ カ

イセビトハ アヤシキモノゾヤナドトイヘバ チブネニ
ノリテヤ ナミノウヘチ コグヤ ナミノウヘチ コ
グヤ

(裏書) 好方説第二反以後自第二句ハネニ出之

問近久之處全不然每度自初句所唱也云々

(同) 多近久云ナミノウヘチコグヤトニ反同様ニ唱フル常説

ナリ或ハ次ノ度ハ終ノヤノ字ヲ略シテ不歌

(同) 此歌爲卅一字以此曲爲本雖何和歌隨時唱之卽是通靈入
道所語也云々

大鳥

オウトリノ ハネニヤレナムシモフレリ ヤレナム タ
レカサイフチドリゾサイフ カヤグキゾサイフ アラジ
ヤアラジチドリモイハジム カヤグキモ イハジム ミ
トサギモキヤウヨリキテサイハジ

八乙女

ヤチトメハ ワガヤチ トメゾタツヤ ヤチトメタツヤ

常陸歌 又號常陸爾波

ヒタチニハタチコソツクレアダゴコロ カヌトヤキミハ
ヤチトコエ ノチコエ ア丁ヨキ丁セル

本記云

文治二年二月五日にわしの御むろのおほせによりて
ふぞく十四寸さながらさづけたてまつりをはぬたび
ふまいてくはしく御きたありひじひとつものこ
ることなし

右近將監多近久 在判

承元二年十月七日以御本書寫了尤可秘藏不可有外見

萬 歲 磨

風俗十四首無殘所授于右近將監久春畢于時正應第二
曆七月中旬候

前周防守多久資 花押

ヤチトメ

二段

カミノ丁ス コノミヤ シロニ タツヤ ヤチトメ タ
ツヤ ヤチトメ

我門

ワガカドノヤ シタルコヤナギ サハレトウトウ ナヨ
ヤシタルコヤナギシタルカイトバ ナヨヤ シタルコヤ
ナギ

二段

シタルカイトハヤ クニゾサカエムコリ(ホ) リゾサカ
エム サトゾトミセム ワイヘゾ トミセムヤ シタ
ルコヤナギ

菅村

爪ガムラノヤハレコスガ ムラノヤ ムラノヤ スガム
ラノ タイデバワレコソ カイカラメ

凡風俗者

本朝上古之里巷歌謠而催馬樂之類也乃列之樂官
協之聲律或事郊廟或諷朝廷忠夫異域之風詩亦無
異之乎然國亂世降終不用之雖偶有得其傳者又廢
不講日者備州足守邑主豐公定得一軸于京師是則
古風俗譜多久春之筆蹟也都十四關博士調子拍子
及秘訣悉備矣是以謠之則觀百世不傳之風俗于今
世聽百世不傳之歌謠于今世不亦奇哉於是借諸豐
氏手自臨寫之迄博士及久春之花押片隻不遺以爲
龜鑑云爾

于時寶永元年甲申十一月日

源朝臣藏

右風俗譜十四章振古民間之歌曲所謳吟當時之皇化而協之
六律調之八音則可觀古風于今日者誠如源朝臣之言也所謂
見其禮而知其政聞其樂而知其德者足徵矣夫伶人樂師有默
識會通則庶幾乎得古樂之意趣矣然此譜湮晦而不顯於世頃

日松野尾章行主得此卷齋來獻諸
當社實可謂奇有之遇也乃納原本於神庫更寫一本聊述數言
以附獻主云

明治十三年五月

土佐神社宮司

山内豊章謹書

印 印

風俗譜終

第九 やまとまひ歌譜

倭舞歌譜のはしかき

おして、難波の長柄の豊崎宮に、大八州國しろし坐し、
天皇命のみよゆ、太古の御代にたてられたる、國の
みやつこ、縣主らのつかさをやめて、國司をまけ、御世
々のすめらみこと后妣、また皇子たちのみために、おの
れし名代の地を收、神ながらなる皇風を棄て、ひたすら
にことさへぐからざまを、模し給ひしかば、氏々名々に、
家の職と、おのがよ、名におひて、仕奉りこしふる事も、
おのづから、や、く、にすたれゆきつ、神事には、わ
きてやごとなき、縁故ある、忌部の氏さへに、はやくつ
かへまつらふ人もたえはて、事とある時は、忌部代を
充らるゝまでに、なれりけるぞいとかしこき、されば此
のやまとまひも、おほろけならぬかむわざなるを、さる
ものゝまぎれに、ちりほひうせて、おほかたのあたりに
は、名をだにしらすなりにたるを、たまゝ春日宮の神
司、富田の光美連のいへに、とほしらく傳はれるを、よ
にひろくせまほしとて、としごろふかくいたづき、こゝ

らこゝろを盡されし、かひありて、今の御代にあひつ
つ、かしこき朝の祭儀にももちゐられ、又天の下の社々
にも、をしへ傳へよと、みゆるしすらに、かゝふられた
るは、此ぬしのよろこびのみかは、神事のためにも、い
とうれしうなむ、かくて其よし、つたへ承りて、むらじ
がり、行むかふ人もすくなからねば、其歌詞をのみも、
すり巻として、それらのひとくゝに、わかたまほしうお
もひよられたれど、此夏ばかり、大藏省のつかさ人にめ
されて、いへにあらす、わたくしのいとまもひまなきに、
いかでこれよくしてよ、とくと、躬行がもとに、乃樂に、
いひおこされたり、躬行よにはふれて、いまは、かすが
の、野もりめく身にしあなれば、えいなひあへず、やが
て、筆とり、ふみともいさゝかかむがへをはりぬ、とし
は明治のみとせといふとし、かくいふは散位古川躬行、

倭舞歌譜

梅 枝

野もやまも ゆきはふれるを 神がきにのみひとはな
うめはさけり

此歌、二月十一日^上春日祭、自古相傳唱之、

真 神

みかさやま しけるたかねの まさか木を なかとりも
ちて われぞまはまし

又

みかさやま みねのまさかき をりかざし よろづよま
でも つかへまつらむ

此歌、並見于春日社司神祇少副延實、慶長中記文、

常 世

あぐらるの かみのみ手もち ひく琴に まひするをみ
なとこよにもがも

しきしまの大和舞はしもいつれのおほんときよりか、お
ほろけなるかたになりたりけむを、いにし元治のはし
めの年、石上ふりにしさと春日祭をおこさせ給ふにつ
きて、其神司殖栗光美連の家に、かみつ世よりたゞしう
かなでつたへられたりし大和舞をしも、つかうまつらし
め給ひて、千早振神世のてふり春日山のふちなみたちか
へりぬるそ、いとくゝいみじかりける、しかのみなら
ずおのれ古今集大歌所のうたにもとつきて、うたのさま
をいはまほしき一すちありけるに、大和舞の事のさたの
ならざるを、かうかへわつらひしも、かううつなくさへ
なりぬるかしこき大御世の、みさかりをよろこほひて、
天のまさかきとりかさし、日かけのかつら懸ならひつる、
いかて此うたまひの歌人にしもくは、らまほしう思ひな
りぬるあまりに

かりてたにわれもきてしかみやひとのきのよろし
てふおほよそころも

庚午冬

平 忠 秋

古事記朝倉宮段天皇略、天皇幸三行吉野宮之時云々、坐其御吳床、彈御琴、令爲儻其孃子、爾因其孃子之好儻、作御歌、即是、

計歌 以爲常世之換歌

ひとふたみよ いつむゆなや ここのたう もちよろづ

此歌、職員令集解云、饒速日命降自天時、天神授瑞寶十種云々、教導、若有痛所者合茲十寶一二三四五六七八九十云而、布瑠部、由々良々止布瑠部、如此爲之者、死人返生矣、此訓及加百千萬之詞者、依平篤胤說、近來用換詞、

右梅枝已下神主儻之歌也、揚拍子、後上、一首八拍子、又加片儻八段謂之諸舞、蓋神主舞者、諸社神主、祝禰宜、或臨時所卜定之神主等、亦儻之、故名、

一歌

とほつおやに 習ひはべるか あそぶ子ら うたならひ
ふえふくこ たがこなるらむ

此歌、春日社所傳、最古云、

四歌

みやびとの おほ夜すがらに いざとほし ゆきのよろしも おほよすがらに

此歌神樂大前、稱宮人曲也、於伊勢神宮、爲直相歌、見於延曆儀式帳矣、古語拾遺云、至于磯城瑞垣朝中略、就於倭筭縫邑、殊立磯城神籬、奉遷天照大神及草薙劍、令皇女豐御入姬奉齋焉、其遷祭之夕、宮人皆參、終夜宴樂、即唱此歌云、

五歌

みやびとの させる神を われさして よろづよまでに
つかへまつらむ かなであそばむ延後譜

此歌、春日社司中臣祐親記云、嘉元四年十一月十七日、上卿花山院大納言家定卿、辨南曹内侍等參向、倭儻正預中臣祐良奏之、起原大和守藤原忠房朝臣撰譜、延喜十六年二月十一日丙申祭、上卿忠平公、始造着到殿、奏倭儻、率御馬、祝詞造宮預中臣秀基奉仕、以來不可闕神事也云々、

六歌

二歌

しろかねや こがねのうめが はな咲くや 神のとのとも ひらかざらむや

此歌亦稱梅枝曲、迎神、開扉等、後用也、然原唱花開耶乃宮叙耶焉、辭不整、因寬正六年四月春日社司延俊古譜、正之、

三歌

かすがやま 松のひゞきも やすみし、きみがちとせを なほよばふらし

此歌亦稱眞神曲、寬治七年三月 堀川天皇、春日社行幸之時所唱也 作者未詳、

又

しもとゆふ かつらぎ山に ふるゆきの まなくときな く おもほゆるかな

此歌、古今倭歌集大歌所之歌也、社記云、寶曆四年七月五日、祈雨之時、倭舞唱之、

右一歌以下、神祇官人所舞之歌、其五位六位等、依祭祀雖有異同、並用之、

みやびとの こしにさしたる 神をば われとりもちて
よろづよやへむ

此歌、社記云、寬延中大嘗會之倭舞、再興之時、所誦也、右四歌以下、稱宮人曲、爲之五位儻歌矣、延喜式

鎮魂祭、神祇伯又命云、御琴笛會四人共云々、神部於堂上、催拍手、御巫及猿女等、依例儻訖、即神祇官五位六位各一人中臣、及侍從五位以上二人、宮内丞一人、内舍人二人、大舍人二人、以次進儻於庭、就本坐、辨官命官掌、喚宮内省、令賜酒食、行酒三杯以後、拍手退出、かくあるにて、五位六位等の、舞人のありさまを知るべし、

七歌

そらみつ やまとの國は かみがらし たふとくあるらし 此舞みれば

此歌、續日本紀云、天平十五年五月癸卯、宴群臣於内裏、皇太子親儻五節云々、此時所奏御製、三之一也、

八歌

ふちもせも きよくさやけし はかたがは ちとせをま
ちて すめる川かも

此歌、續日本紀云、寶龜元年三月辛卯、葛井、船津、
文、武生、藏、六氏男女二百卅人、供奉歌垣、其服並
著青摺細布衣、垂紅長紐、男女相並、分行徐進歌曰
云々、其歌垣歌曰即是、歌數闕、河内大夫從四位上藤
原朝臣雄田麻呂、以下奏和舞、
右二首、爲六位舞之歌、以上八段稱片舞、

弊歌

みてぐらに ならましものを すめ神の みてにとられ
て なづさはるべく

此歌、即神樂採物幣之歌也、入于拾遺倭歌集、

又

みてぐらは わがにはあらず あめにます とよをか姫
のみやのみてぐら

此歌、家藏在于古譜、其古譜一載山蔓中、

御饌歌

みかま木を いはひとりきて かしぎやに とけよみか

さかどのは ひろしまひろし みかこしの わがてなと
りそ しかつげなくに

此歌、家藏在于古譜、但古本神樂譜作
之加川世那久爾、

立歌

いざたちなむ をしのかもどり みづまさらば とみぞ
まさらむ

此歌、送神、閉扉等用之、蓋神宮鳥女子舞亦用之、見
于度會延經行雲抄、

又

すめ神は よきひまつれば あすよりは あけのころも
を 襲ころもにせむ

此歌、元來神樂弓立之歌也

直會歌

あはれ あなおもしろ あなたぬし あなさやけ おけ

此歌、載于古語拾遺天智戸、當此之時、上天初晴、衆
俱相見、面皆明白、伸手歌舞、相與稱此辭、

志多良歌

しだらうてと て、がのたまへば うちはべり なら

しぐ おともとゞろに

此歌、大神宮延曆儀式帳六月例云、即奈良比御歌仕奉、
其歌渡佐古久志侶、伊須々乃宮仁、御氣立止、宇都奈留
比佐婆、宮毛止々侶爾、蓋取此歌、換其趣、

又

みかのはらに みてならべたる とよみけの とよかし
ぐおとは かみもとゞろに

此歌、家藏載于古譜、原本作于トヨミキ
ノ者誤寫也故改之

御酒歌

このみきは わがみきならず やまとなる おほものぬ
しの かみしみきなり

此歌、日本紀、崇神天皇八年冬十二月丙申朔乙卯、天
皇以三大田々根子、令祭大神神、是日活日、自舉三神
酒、獻天皇、仍歌曰、許能瀾枳破、和餓瀾枳那羅孺、
椰磨等那殊、於朋望能農之能、介瀾之瀾枳、伊々句々
臂々佐々、如是歌之宴于神宮云々、家藏古譜、如二本
文、蓋便於詞語一也、

又

ひはべり
あこめの袖 やれてはべり おびにやせむ たかのを
にせむ

此歌、解齋直相等用焉、行雲抄亦載之、

右歌曲、以三梅枝、眞賢木、宮人、閑歌等、爲三本體唱
之、凡此歌舞者、諸社之神司等、專業之、諸司官人亦、
當三神事奉仕之、而歷三喪亂之世、遂失其傳矣、偶存
吾家者、實可謂三現山之片玉、祭祀之寶典乎、今僅
刻其歌章之一班、以須于同好云爾、

明治第三庚午九月

春日社司從四位中臣殖粟連富田光美

中臣延實記 春日社司慶長中人

奈良の葉のふりし昔は敷島のやまと舞を諸神社に奉るこ
とおほし、中にも吾春日の宮居にもせしこと古事ども

にみえたり、されども時代うつりかはりて歌もまひも春日祭におこたるのみならず、なべて神のみまへにも世々の兵亂に、なにわざも絶えはてたれど、かしのみのひとりよのみだれをまぬがれて、わが富田のいへに、夜光るたまともていつき傳へしをよろこびて、ひとくくのうつやひらでを、よろづ代までも神の受けたまひて、とほつおやのありし形のごとく仕へ奉らしめ給へと、こひねぎまつるになむ、其いにしへをおもへば鹿島より歌をうたひて、時風も秀行もかみあそびにかきならし仕奉りし、そのみ琴さへ年をへて、そこなはれつるを新に造りしことなどを思合せ、なほ大神の御靈たまはりて、三笠山の眞神をかざし、みやびとのおほよそ衣よそになる人の手ぶりも、はてはたゞ神代にかへし、こがねはなさく梅枝の清きしらべを唱へ、つかの木の彌つぎくに拍手うつ杉のこかけはくらけれど、庭火のひかりほのかにも、むかしのあとをつたへむは、大宮の賣神のみさちなるべし。あなおもしろの此やまとまひ、あなめでたのこのやまと舞、

わかやとの櫃にこめたるやまとまひつたへしふしをかたるはかりそ

右慶應元年二月經

天覽了、故雖文辭不雅、姑附此卷端耳。

跋

貴物原寡矣、寡易絶倭舞

皇國之貴物也、久絶而纔存於富田氏一家、斯其歌譜也

倭舞以歌爲本矣、本熟餘宜隨而成焉、是光美先生

所以深用心刻歌譜也、倭舞

皇國之樂也、樂和也、和則合、合則親、君臣和合人々親

其親、天下不有平治者也、天遺此一老爲可

繼富田氏之傳、豈偶然乎哉

庚午九月

源朝臣寬胤花押

倭舞歌譜 終

第十 藤のしなひ

倭舞御巫子神樂は、いとみやびなる物かも、はた其もと末をきくに、めでたき物なるかも、されば神もさぞめで給ひつらむ、舞姫のむかしにかへす袖の追風とおもふ儘をかくなむ

明治七年の夏 神宮祭王季知

神のみまへに仕へまつる歌まひはしも、はやく立さわぐ世のちりにまぎれて、石の上ふるき手ぶりは忌垣のさかき葉地におち、御饌どの、けぶりたえぐに消うせて、たま〜國々の神社に傳へたるも、あるはもろこしの風をとりまじへ、あるは後の世のさとびたる方にながれしが多かるぞくちをしき、春日神社の社司富田光美の家に傳へたるはさるたぐひにあらず、いと正しくみやびたり、さればその倭儼は、はやく世に公にせられて歌譜はた櫻木にほへるを、御巫のまひなほいまだ世にあまねからねば、此ごろ光美講義この東京に出て、もはらその歌まひを教へつたふるに、つぎ〜受習ふ人おほく、いまは大中教院は更なり、その社、かしこの宮とさるべき御

三の歌 神のます

四の歌 祭らるゝ

前中後十二段

歌四首爲一組

初の歌 君が代

白拍子の歌 春日山

中の歌 みかさ山

末の歌 色かへぬ

中段

初の歌 千世まで

白拍子の歌 松のいはひ

中の歌 つるのこ

末の歌 宮人

後段

初の歌 萬代

白拍子の歌 一神めい

中の歌 わがやど

末の歌 殖てみる

第十 藤のしなひ

まつりのをり〜には、かならずこのやまとまひ、また巫儼をかなづる事の如なりぬ、かくてつぎ〜にくにぐに處々の、大やしろ小社にも受傳へ行ひて、後世のさとびたる手ぶりにかへば、それやがて神事の正しくなり、古にかへる一ふしにして、いかし梓中とりもちてつかへまつらし、春日の大神の御ころにもかなはましと、八處女がかざしの藤のうちなびき思ふまゝに、青ずりの此すり巻のはし文を一ことしるしつ

明治七とせといふ年九月

つかへまつる御社の

御まつりはてたるひ

權中教正本居豊顯

目錄

發題四段完備 舞員不定

歌一首爲一曲 毎曲換之

一の歌 れみや

二の歌 珍らしな

田舞四段歌 四首

水谷神樂歌 二首

再興古歌 十首

鳥子名儼歌 十二首

採物

鈴 緒用五色緒

扇 檜扇或用末廣

調度

倭琴 近來用箏

銅拍子

装束

袷衣 青摺緒或任意

袴 紅長袴或用切袴

裳 白

男裝束

烏帽子

袴

櫛

帖紙 紅

和笛

鼓

單衣 紅

帶

挿頭 勝花

淨衣

前

同	同	同	同	同	同	同	同	鈴
歌同鼓同	同	同	同	同	同	同	同	舞伎

御巫舞所圖 春日驗記中
高階隆兼繪

舞妓

同近來之様

採物案

末廣 和笛 大鼓 小鼓

銅拍子 帖紙

挿頭 櫛 箒 青摺 袴

でかへりみたまへ

二の歌 珍らしな

めづらしな けふのかぐらの

やをとめを 神もうれしとみ

まさしらめや

三のうた 神のます

神のます かすがのはらに た

つや八處女 やをとめは わが

やをとめは かみのやをとめ

四の歌

まつらるゝ 神のおまへの や

をとめも はなもひもとく か

すがやまかな

前中後 十二段

前段一組

初の歌

きみがよの ひさしかるべき ためしには 神もうゑけ

第十 藤のしなひ

單 長袴

袷

裳

舞の初にまをす詞

此のやをとめは、たがやをとめぞ、ちはやふる神のみま

へにたつや、

はなのやをと

め、

發題四首完

備舞員不定

詞一首 每曲

換而唱之

一の歌若み

若宮の みか

けうつろふ

ますかゞみ

くもりあらせ

む すみよし

のまつヤレす

みよしのまつ

ヤレ

白拍子のう

た

かすが山 い

はねのまつは

いはねども

千年をみどり

の いろにし

り

亂拍子の歌

みねのあらしは おとせねど 萬歳のひゞきは みゝに

みつ

中のうた

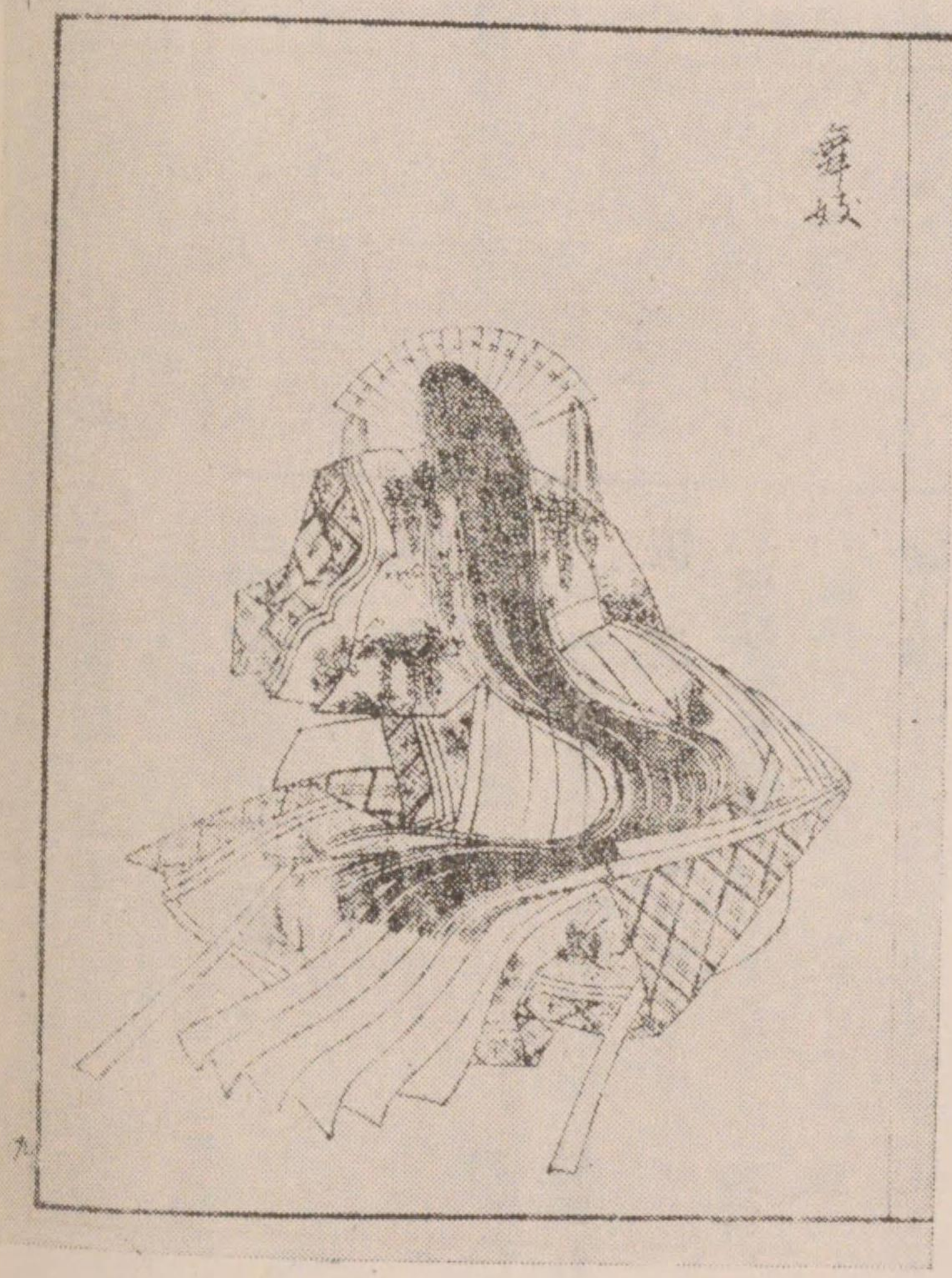
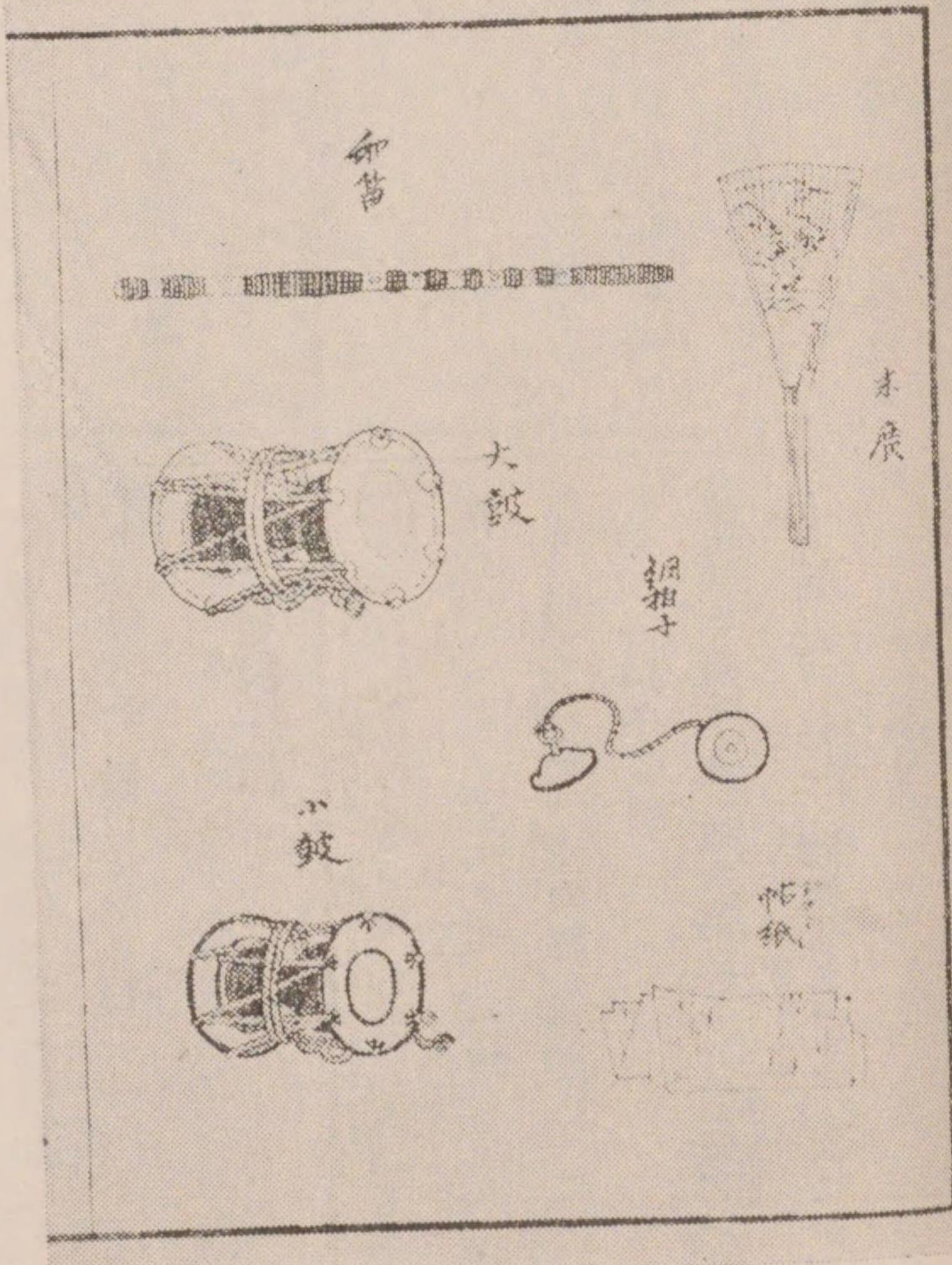
みかさやま おひそふ松のえだごと

たえずもきみが

さかゆべきかなヤレ さかゆべきかな

さかゆべきかな

四六七



末の歌

色かへぬ まつと竹との まつとたけとの まつとたけ
との するのよに いづれひさしとや いづれひさしと
や 君のみぞみむ きみのみぞみむ いづれひさしとや
いづれひさしとや きみのみぞみむ 君のみぞみむ
きみのみぞみむ

中段一組

初のうた

千代までと 君をいのれば みかさやま みねにもおな
じ 〴〵急き〴〵ゆなりヤレ 〴〵急き〴〵ゆなりヤレ

白拍子の哥

松はいはひの ためしにひかる、 かがのみねの ひ
めこまつ やちよのたまつばき いはぬきがはに すむ
つる ながるのうらに あそぶ龜
中のうた

つるのこの また鶴の子の やしはごの そだゝむ世ま
で 君はましませヤレ 君はましませ きみはませや

はるかなるかなヤレ はるかなるかな 〴〵 〴〵 〴〵
ヤレ

末の哥

うゑてみる 殖てみる まがきのたけの 籬のたけの
〴〵 〴〵 〴〵 ふしごとくに いやこもれるちよは
〴〵 きみのみぞみむ ぞみむ 〴〵 いやこもれる千
世は 君のみぞみむ 〴〵 〴〵 〴〵

祝言

千歳や ちとせのせんざいや よろづよの萬ざいや
舞はてゝまをす詞

み神樂こそ めでたうおほしめせ いのちながう何事も
おもふ所願を かなへさせたまへ

田舞四段

哥四首

春日神社にて長寛元年正月始て行はれ今にたえず田
業の式あり、畝からすきなへ籠、苗は松杉、種はも
第十 藤のしなひ

するの歌

みや人の みやびとの するる衣に するるころもに
するる衣に するるころもに

加拍子

ゆふだすき かけてこゝろをや 心をや たれによすら
む たれによすらむ よすらん かけてこゝろをや か
けてこゝろをや かけてこゝろをや こゝろをや たれ
によすらん 誰によすらむ

後段一組

はじめの哥

萬代の まつのをやまの かけしけみ きみをぞいのる
ときはかきはにヤレ 常磐かきはにヤレ

白拍子の歌

神明ところに ましませば 一切諸願もよしなし 萬民
うれへなければ 諫鼓もおきて なにかせむ

中の歌

わがやどの ちよの川竹ふしとはみ さもゆくするの

みもらひ、柳葉を用、装束は男女ともに白衣はかま、
檜帽子をかつき、襷をかき、男は白、女は紅、人別
に五尺、牛は面をかけ黒衣をつく、

わが種うゑうよ 苗種殖うよ 女の手にてをとりて ひ
ろひとるとよヤレ
みましもしけや 若なへとる手やは 白玉とる手こそ
しらたまなゆらや とみぐさのはれヤレ
福萬石に 本國へ殖ちらし てに手をとりて ひろやひ
とるとよヤレ
ちはやぶる 神のやしろしなかりせば かがのはらに
粟まかましを

水谷神樂

此は正應元年正月
よりはじめれり

歌二首

みづやこそ 人のねがひをみて給ふ いざわれともに
水あそびせむ
三十八社の ゆふだすき かけたる人は ちよもこそへ
め

再興の古き哥 十首

あなにやし えをとこそ あなにやし えをとめを
 ひとふたみよ いつむゆなや このたり もちよ
 ろづ
 やくもたつ いづも八へがき つまこめに やへかきつ
 くる そのやへ垣を
 あか玉の ひかりはあれど しらたまの 君がよそひし
 たふとくありけり
 あぐらゐの 神のみ手もち ひく琴に まひするをみな
 とこよにもがも
 いなむしろ 川そひやなぎ みづゆけば なびきおきた
 ち その根はうせす
 からくにの きのべにたちて おほ葉子は ひれふらす
 も やまとへむきて
 をとめども をとめさびすも からたまを たもとにま
 きて をとめさびすも
 あまつかぜ 雲のかよひぢ 吹とぢよ をとめのすがた

山がはにすむや 鶯のめとりましや 此夜になゝたびつ
 まこひやする
 やまかはにたてるくろめすこめまさふくや よき子に
 手をとりにかけて いざやあそばむ
 みなみなき鳥は かりにぞある あられふり 霜おく夜
 も よどこさだめす
 おほかはやなぎ 葉ひろくてたてる 大川柳 よき子に
 手をとりにかけて いざやあそばむ
 はまに出て あそぶちどりなり あやしなき 小松がう
 へに あみなおかれそ
 たちばながもとに 道をふみて かぐはしや わがかよ
 へばぞ 妻もそろふ

しばしとゞめむ

をとめらに をとたちそひ ふみならず にしのみや
こは よろづよの宮

鳥子名歌 十二首

あめなるや やかりかなるや われ人のこ さあれども
 や やかりかなるや われ人のこ
 みちのべの こたちばなを ふさをりもつは たが子な
 ららむ
 とほたふみ いなさの山の しひが枝を ふさをり持ち
 て はいまろもとる
 五百代とぞいふ 君がよは ちよとぞいふ むらさきの
 帯をたれて いざやあそばむ
 おほみやの まへのあられす 誰あられあれむ わが
 かよへばぞ 妻もそろふ
 大宮の まへの川のごと かはのながさ いのちもなが
 く 富もしたまへ

たまちはふ御巫の歌舞はも猿女君のなごりなめれば倭舞
 とともに春日御社に傳へつゝ保安三年三月ばかり若宮の
 おまへに長四丈二尺八寸ひろさ一丈九尺高一丈五尺の舞
 殿一字をたてゝその儀式どもをあらためられしよし本宮
 の社記にみえ元和二年のしはすばかり御巫禊子がかきお
 きし歌譜は鈴屋翁の玉かつまに若宮の神樂哥とて載せら
 れしにおほかたおなじ其ふしはかせ舞の手ぶりをまたま
 かづらたえすわが家につたへ來つゝをちこちにうけなら
 ふ人のいできてをとつ年の冬わか宮祭に舞の袖むかしに
 かへしふたゝびおこし行はれぬるなむいとうれしきいで
 や此歌舞君がさす三笠の山の松風萬よにふき傳へちよの
 川竹ふしとほくさかえゆかむことこそゆふたすき心にか
 けてねがはしけれかくいふは春日の宮に遠長に仕へ來し
 富田光明治の七とせ九月のはじめつかた東京のかりす
 まひにしてこれをしるす

かむの子鈴とるや手草のさやくにたちまふさまはいは

やとのふることを正めに見奉るこゝちしていとおむかし
されば花の八をとめとほめ稱へて神もめで給ふことゝは
なりけらしさてなむ駒のつめ筑紫のくにより道のおくの
宮々社々までも仕奉ることゝはなれりけるなほ常はにか
きはに神のきねなして大み前にたて奉さむこゝろよりそ
の唱歌はさらなりきその雲みけしのかたをははじめなにく
れとま細しく櫻木に彫りて國中あまねく薫りみてしめむ
と思ほし給ふとき、渡りてたなそこもならゝにうちあけ
てあなおもしろあなさやけおけとほめあけむ言葉しるを
そのはしかきともをせるはとみ草の富田のうしにその歌
舞をならひ奉れる大泉のみたみ照井長栖下谷の僑居にし
るす

第十一 梁塵秘抄 卷二

梁塵秘抄 卷第二

法文哥 二百二十首

- 佛哥廿四首 花嚴經一首 阿含經二首
- 方等經二首 船若經三首 無量義經一首
- 普賢經一首 法花經廿八品百十五首
- 懺法哥一首 涅槃哥三首 極樂歌六首
- 僧哥十首 雜法文五十首 四句神哥百七十首

佛哥二十四首

- 釋迦の正覺成ることは、此のたび初めと思ひしに、五百塵點劫よりも、彼方に佛と見え給ふ。
- 釋迦牟尼佛は薩埵王子、彌勒文殊は二二の子、淨飯王は最初の王、摩耶は昔の夫人なり。
- 釋迦の御法のうちにして、五戒三歸を持たしめ、一たび南無といふ人は、花の苑にて道成りぬ。
- 佛はさまざまにいませども、まことは一佛なりとかや。

- 瑠璃の淨土はいさぎよし。月の光はさやかにて、像法轉する末の世に、普く照せば底も無し。
- 普賢薩埵は朝日なり。釋迦は夜晝身を照し、昔の契しありければ、達多は佛になりにけり。
- 文殊はそもく何人ぞ。三世の佛の母といます。十方如來諸法の師、皆是文殊の力なり。
- 觀音大悲は舟筏、補陀洛海にぞ浮べたる。善根求むる人しあらば、のせて渡さむ極樂へ。
- 觀音光を和らけて、六の道をぞ塞けたる。三界劫數わたる人、やらじと思へる心にて。
- 萬の佛の願よりも、千手の誓ぞたのもしき。枯れたる草木も忽ちに、花咲き實なると説い給ふ。
- 毎日恒沙の定に入り、三途の扉を押開き、猛火の炎をかき分けて、地藏薩埵こそ問う給へ。
- 原本のとトアリ。はさチ誤リタルモノナルベシ
- 南天竺の鐵塔を、龍樹や大士の開かずば、まことの御法を如何にして、末の世迄ぞ弘めまし。
- 南天上龍樹菩薩はあはれなり。南天竺の鐵塔を、扉を

藥師も彌陀も釋迦彌勒も、さながら大日とこそ聞け。
○佛は常にいませども、現ならぬぞあはれなる。人の音せぬ曉に、ほのかに夢に見え給ふ。

○佛はどよりか出で給ふ。中天竺より出で給ふ。矩奢揭羅補羅城王舍城、娑栗陀羅矩吒に、鷲峰山。

○彌陀の御顔は秋の月、青蓮の眼は夏の池、四十の齒ぐきは冬の雪、三十二相春の花。

○阿彌陀佛の誓願ぞ、かへすがへすもたのもしき。一たび御名を稱ふれば、佛になるとぞ説い給ふ。

○彌陀の誓ぞたのもしき。十惡五逆の人なれど、一たび御名を稱ふれば、來迎引接疑はず。

○藥師の十二の大願は、衆病悉除ぞたのもしき。一經其耳はさておきつ。皆令満足すぐれたり。

○像法轉じては、藥師の誓ぞたのもしき。一たび御名を聞く人は（稱ふればい）萬の病を無しとぞいふ。

○藥師醫王の淨土をば、瑠璃の淨土と名づけたり。十二の船をかさね來て、我等衆生を渡い給へ。

●●● 原本、得ノ草體ニ類スレド、假名宛ノ誤寫ナルベシ。

開きて秘密教を、金剛薩埵に受け給ふ。
南天上は此の歌を前の南天竺云々の歌の前に入るべしの意ならむ

○眉の間の白毫は、五つの須彌をぞ集めたる。眼の間の青蓮は、四大海をぞ湛へたる。

須彌は原本假名書ニテしなトアリ。サレド觀無量壽經ニ眉間白毫右旋宛轉如五須彌山トアレバ、誤寫ト見テ本文ノ如ク改ム

○眉の間の白毫の、一つの相を思うつべし。須彌の量りをたづぬれば、縱廣八萬由旬なり。

○眞言教のめでたさは、蓬窓宮殿隔てなし。君をも民をも押しなべて、大日如來と説い給ふ。

花嚴經一首

○花嚴經は春の花、七所八會の苑毎に、法界唯心色深く、三章二木法ぞ説く。

阿含經二首

阿含經二首

○阿含經の鹿の聲、鹿野苑にぞ聞ゆなる。諦緣乘の萩の葉に、遍眞無漏の露ぞおく。

○一夏の間を勤めつつ、晝夜に信心怠らず、拘隣比丘。最初には、諦理を悟りて道成りし。

方等經二首

○大集方等は秋の山、四教の紅葉はいろくに、彈訶法會は濃く薄く、隨類ごとにぞ染めてける。

○須彌の峯をば誰か見し。法文聖教に説くぞかし。阿修羅王をば見たるかは、智者の語るを聞くぞかし。

般若經四首

○般若十六善神は、十六會をこそ守るなれ。もとより無漏の法門は、中道にこそ通ふなれ。

○大品般若は春の水、罪障氷の解けぬれば、萬法空寂の浪立ちて、眞如の岸にぞ寄せかくる。

○般若畢竟空の理は、かくの如くぞ思ふべき。正法四十年に、一乗妙法説い給ふ。

雲はれて、曼陀羅曼珠の花ぞ降る。

○釋迦の法華經説く初め、白毫光りは月のごと、曼陀曼珠の花降りて、大地も六種に動きけり。

○彌勒菩薩はあはれなり。天人大會の前にして、昔の佛の有様を、文殊に問ひつつ説い給ふ。

方便品九首

○平等大惠の地の上に、童子の戯れ遊びをも、漸く佛の種として、菩提大樹ぞ生ひにける。

○釋迦の御法は多かれど、十界十如ぞすぐれたる。紫磨黄金の姿にも、我等は劣らぬ身なりけり。

黄金、原本ニヤ金トアリ。疑モナク黄ノ草體ヲ屋ト誤リタルモノナルベシ。又姿にもは原本にはとアレド、コレモノノ誤寫ナルベシ。

○十界十如は法華き(ホノマ)法界唯心悟りなば、一文一偈を聴く人の、佛にならぬは一人なし。

○釋迦の御法はしなく、一實眞如の理をぞ説く。經には聞法歡喜讚、聞く人蓮の身とぞなる。

○般若の御法をたづぬとて、常在東へたづねゆき、妙香城に到りてぞ、畢竟空をば悟りてし。

無量義經一首

○無量義經は蒼ん(む)花、靈鷲の峰にぞ開けたる。三十二相は菓にて、四十二にこそなりにけれ。

普賢經一首

○積れる罪は夜の霜、慈悲の光にたとへずば、行者の心をしづめつつ、實相眞如を思ふべし。

法華經廿八品誦 百十五首

序品五首 第一卷

○空より花降り地は動き、佛の光は世を照し、彌勒文殊は問ひ答へ、法華を説くとぞ豫ねて知る。

○鷲の御山の法の日は、曼陀羅曼珠の華降りて、栴檀沈水満ち匂ひ、六種に大地ぞ動きける。

○法華經弘めし初には、無數の衆生その中に、現瑞空に

○我等が宿世のめでたきは、釋迦牟尼佛の正法に、此の世に生れて人となり、一乗妙法聞くぞかし。

○法華は何れも尊きに、此の品聞くこそあはれなれ。尊けれ。童子の戯れ遊び迄、佛になるとぞ説い給ふ。

○古へ童子の戯れに、沙を塔となしけるも、佛になると説く經を、皆人持ちて縁結べ。

○法華は佛の眞如なり。萬法無二の旨を述べ、一乗妙法聞く人の、佛にならぬは無かりけり。

○法華經八卷が其の中に、方便品こそ頼まれる。若有聞法者無一不成佛と説いたれば。

譬喻品六首 第二卷

○四大聲聞こしらへて、三界火宅を教へ出し、白牛の車をさし寄せて、直至道場定まりぬ。

○稚き子どもは幼けなし。三つの車を乞ふなれば、長者は我が子の愛しさに、白牛の車ぞ與ふなる。

○稚き子どもを誘つると、三つの車を構へつつ、門の外にし出でぬれば、一つ車に乗り給ふ。

○門の外なる三つ車、二つは乗らむとおもほえず。大白牛車に手をかけて、直至道場訪ひ行かむ。

道場原本ニ道をトアリ。場ノ草體ヲをト誤讀シタルモノナ
ルベシ。

○上根舍利弗先づ悟り、菩提樹果ふたり(本ノマ)いて、そらをかけに隠れつつ、八相佛になり給ふ。

○長者の門なる三つ車、羊鹿のは目も立たず、牛の車に心かけ、三界火宅を疾く出でむ。

信解品二首

○長者は我が子の愛しさに、瓔珞衣を脱ぎ棄てて、あやしき姿になりてこそ、漸く近づき給ひしか。

○窮子の譬ごあはれなる。親を離れて五十年、萬の國に誘はれて、草の庵に止まれば。

藥草喻品四首 第三卷

○釋迦の御法は唯一つ。一味の雨にぞ似たりける。三草二木はしなくくに、花咲き實なるぞあはれなる。

化城喻品三首

○一乗妙法説く聞けば、五濁我等も捨てずして、結縁ひさしく説き述べて、佛の道にぞ入り給ふ。

○我等が疲れし處にて、息むる心し無かりせば、寶の處に近くとも、道中にてぞ歸らまし。

○大通智勝の王子ども、各淨土に生るれど第十六の釋迦のみぞ、娑婆に佛になり給ふ。

五百弟子品四首 第四卷

○最初の時には富樓那比丘、よそには菩薩身をかくし、外には聲聞かたちなり。されども皆これ佛なり。

○一乘實相珠清し。衣の裏にぞかけてける。酔の後にぞ悟りぬる。昔の親のうれしさよ。

○釋迦は第十六王子、塵點劫數の彼方より、衣の裏に珠つつみ、磨けば佛になり給ふ。

○親しき友の家に行き、酒に酔臥し伏せるほど、衣の裏に捻く珠を知らぬ人こそあはれなれ。

○大空かき曇り、一味の雨を降らさばや。妙法蓮華を植ゑひろげ、佛にならむてふ種取らむ。

○法華經聞くこそあはれなれ。佛も我等も同じくて、平等大惠摩尼公すゑ(本ノマ)の枝とぞ説い給ふ。

○我等は薄地の凡夫なり。善根勤むる道知らず。一味の雨に潤ひて、などか佛にならざらん。

授記品四首

○大目連等はあはれなり。多くの佛に参りあひて、供養しん(てカ)最後の身なせば、淨土の蓮にぞほるべき。

○釋迦の御弟子は多かれど、すぐれて授記にあづかるは、迦葉須菩提や迦旃延目連よ、是等は後世の佛なり。

○四大聲聞いばかり、喜び身よりも餘らむ。我等は後世の佛ぞと、たしかに聞きつる今日なれば。

○四大聲聞つぎくに、數多の佛にあひくして、八十種好そなへてぞ、淨土の蓮に上るべき。

種好、原本ニすいさうトアリザいこうノ誤寫ナルベシ。ヨ
リテ主文ノ如ク改ム。

人記品四首

○釋迦の御弟子は多かれど、佛の從弟は疎からず。親しきことは誰よりも、阿難尊者ぞおはしける。

○阿難尊者はあはれなり。慈悲の室を住處にて、忍辱衣を身に着つつ、諸法空を御座として、人に教へて知らしめき。

○阿難尊者、如來の親しき弟子なり疎からず。迦毘羅に住して年久し、大願深きによりてなり。

○二千聲聞の佛を讃むる譬には、晝は甘露の注ぐを見、夜は燈火照るがごと。

法師品七首

○寂莫音せぬ山寺に、法華經誦して偈るたり。普賢頭を撫で給ひ、釋迦は常に身を守る。

○忍辱衣を身に着れば、戒香涼しく身に匂ひ、弘誓瓔珞かけつれば、五智の光ぞ輝ける。

○慈悲の御室に往みながら、忍辱衣を身にかけて、忍辱

衣は色深く、慈悲の室には風吹かず、諸法空を御座として、人には教へ持たしむ。

○二乗高原陸地には、佛性蓮華も咲かざりき。泥水堀り得て後よりぞ、妙法蓮華は咲けたる。

○静かに音せぬ道場に、佛に花香奉り、心を静めて暫くも、讀めばぞ佛は見え給ふ。

○法華經八卷は一部なり。廿八品何れをも、須臾の間も聽く人の、佛にならぬは無かりけり。

○法華は諸法にすぐれたり。人の音せぬ所にて、讀誦つもればおのづから、普賢薩埵は見え給ふ。

寶塔品五首

○靈山界會の大空に、寶塔樞を押開き、二人の佛を一たびに、喜び拜み奉る。

○寶塔出でし時、遙かに瑠璃の地となして、瑠璃の樞を押開き、分身佛ぞ集りし。

○寶塔出でし時、須彌も鐵圍も投げ捨てて、遙かに瑠璃の地となして、分身佛ぞ集れる。

○女人五つの障りあり。無垢の淨土はうとけれど、蓮花し濁りに開くれば、龍女も佛になりけり。

○凡そ女人一たびも、此の品誦する聲聽けば、蓮に上るちうや(木ノマ)まで、女人永く離れなむ。

○昔の仙こそあはれなれ。法華を弘めずなりにせば、人をも我が身も今迄に、聲だに聽かずなりなまし。

○常の心の蓮には、三身佛性おはします。垢つききたなき身なれども、佛になるとぞ説き給ふ。

勸持品二首

○我が身は夢に劣らねど、無上道をぞ惜むべき。命は譬の如くなり。如來付囑はあやまたじ。

○法華を行ふ人は皆、忍辱鎧を身に着つつ、露の命を愛せず、蓮の上にのほるべし。

安樂行品三首

○輪王頭に光あり。久しくかくして人知らず。法華經一度もきく人は、頭の玉をぞ手にえたる。

○十方佛神集りて、寶塔樞を押開き、如來滅後の末の世に、法華を説きおき給ひしぞ。

○法華經しばしも持つ人、十方諸佛喜びて、持戒頭陀に異らず、佛になること疾しとかや。

提婆品十首 第五卷

○釋迦の御法を受けずして、背くと人には見せしかど、千歳の勤を今日聞けば、達多は佛の師なりける。

○達多五逆の悪人と、名には負へどもまことには、釋迦の法華經ならひける、阿私仙人これぞかし。

○氷を敲きて水掬ひ、霜を拂ひて薪採り、千歳の春秋を過してぞ、一乗妙法聞きそめし。

○娑竭羅王の女だに、生れて八歳といひし時、一乗妙法聞きそめて、佛の道には近づきし。

○達多は佛の敵なれど、佛はそれをも知らずして、慈悲の眼を開きつつ、法の道にぞ入れ給ふ。

○阿私仙の洞の中、千歳の春秋仕へてぞ、逢ふこと聞くこと持つこと、難き法をば我は聽く。

○法華經讀誦する人は、天諸童子具足せり。遊び行くに恐れなし。師子や王の如くなり。

○妙法つとむるしには、昔まだ見ぬ夢ぞ見る。それより生死の眠りさめ、覺後の月をぞ弄ぶ。

涌出品二首

○釋迦の御法のそのかみは、さまざま見知らぬ人ぞある。地より涌きつる菩薩たち、皆是金の色なりき。

○法華經此のたび弘めむと、佛に申せど許されず。地より出でたる菩薩たち、其の數六萬恒沙なり。

壽量品三首 第六卷

○法華經八卷は一部なり。廿八品其の中に、あの、よまれ給ふ、説かれ給ふ、壽量品ばかり、あはれに尊きものはなし。

○佛は香山淨土にて、淨土もかへず身も變へず、始も遠く終りなし。されども皆是法華なり。

○沙羅林にたつ煙、上ると見しは空目なり。釋迦は常に

ましくくして、靈鷲山にて法ぞ説く。

分別功德品三首

- 佛に花香奉り、堂塔建つるも尊しや、これにすぐれてめでたきは、法華經持てる人ぞかし。
- 法華經持たん人は皆、起きても臥しても此の品を、常に説き讀み怠らで、塔を建てつつ拜むべし。
- 釋迦の説法説く場に、幡蓋風に翻し、多摩羅跋香充ち満ちて、喜見城より花ぞ降る。

隨喜功德品四首

- 法華經説かる、所にて、語り傳ふる聞く人の、功德の量りを尋ねれば、五十隨喜ぞ量りなき。
- 須臾の間も聽く人は、陀羅尼菩薩を友として、一つ蓮に入りてこそ、衆生教化弘むなれ。
- 難行勤むる人よりも、五十隨喜ぞ勝れたる。更なり高座の場にして、隨喜功德ぞ量りなき。
- 海岸國の莊嚴苑、毘盧遮那莊嚴藏、大樓閣の中にして

たみてぞ、禮拜久しく行ひし。

神力品二首

- 法華のまします所には、諸佛神力拜みつつ、皆是佛の菩提樹、轉法輪の所なり。
- 釋迦の誓ぞ頼もしき。我等が滅後に法華經を、常に持たむ人は皆、佛になること難からず。

囑累品五首

- 一乗付囑の儀式こそ、あはれに尊きものはあれ。釋迦牟尼佛は座より下り、菩薩の頂摩で給ふ。
- 譲りし菩薩の頂を、かへすくぞ搔摩でし。得難き御法の末の世の、うしろめたなく覺ゆれば。
- 數多の菩薩の頂を、釋迦の右の手ぶさして、三たび搔い摩で給ひしは、一乘廣めむ爲なりき。
- 我等ぞ思へば頼もしき。きけん經(ホノマ)を聞きし故、三昧惣持を得てこそは、佛に多くは仕へしか。
- 如來付囑はいと重し。教のごとも廣むれば、佛の恩を

大悲法門説い給ふ。

法師功德品三首

- 三身佛性玉はあれど、生死の塵にぞ汚れたる。六根清淨得て後に、ほのかに光は照しける。
- 釋迦の御法を聞きしより、身は澄みよき(ホノマ)鏡にて、心覺り知ることは、昔の佛に異ならず。
- 妙法蓮華經、書き讀み持てる人は皆、五種法師と名づけつつ、遂には六根清しとか。

不輕品四首 第七卷

- 不輕大士のお前には、逃るゝ人こそ無かりけれ。誹る縁をも縁として、遂には佛になし給ふ。
- 不輕大士ぞあはれなる。我深敬汝等と唱へつつ、打ち罵り惡しき人も皆、救ひて羅漢となしければ。
- 釋迦牟尼佛の次行きし。けしとおほくは(ホノマ)法華經の、力にてこそ有漏の身の、佛道漸く近しとか。
- 佛性真如は月清し。煩惱雲とぞ隔てたる。佛性遙にた

背きつつ、大力ばかりうつつしてき。

藥王品四首

- 身を變へ二たび生れ來て、佛の滅後に參りあひ、二つの臂を燃してぞ、多くの國をば照してし。
- 法を求めしるしには、臂を燃して仕へつつ、我が身の髓腦碎きてぞ、菩薩の位はえたりける。
- 女の殊に持たむは、藥王品に如くはなし。如説修行年經れば、往生極樂疑はず。
- 娑婆に不思議の藥あり。法華經なりとぞ説い給ふ。不老不死の藥王は、聞く人普く賜るなり。

妙音品二首

- 我が身一つはさ(ホノマ)かひつつ、十方界には形分け、衆生普く導きて、淨光園には歸りにし。
- 妙音菩薩の誓こそ、かへすくもあはれなれ。娑婆界の衆生故、三十四身に身を分けつ。

觀音品四首（實は三首） 第八卷

○觀音誓し弘ければ、普き門より出で給ひ、三十三身に現じてぞ、十九の品に法は説く。
 ○觀音深く頼むべし。弘誓の海に船浮かべ、沈める衆生引き乗せて、菩提の岸迄漕ぎ渡る。
 ○普き門の嬉しきは、教ふる人だに無けれども、觀音大悲に導かれ、入らぬ者こそ無かりけれ。

陀羅尼品五首（實は四首）

○ゆめく、如何にも毀るなよ。一乘法華の受持者をば、藥王勇施多聞持國十羅刹の、陀羅尼を説いてぞ護るなる。
 ○法華經持てる人ばかり、羨しき者はあらず。藥王勇施多聞持國十羅刹に、夜晝被護れ奉る。
 ○持經法師はら、門（本ノマ）、惱ます人だに譬あり。頭破れなん七分に。之を聞く人信すべし。
 ○法華經持てる人毀る、それを毀れる報には、頭七つに破れ裂きて、阿黎樹の枝に異ならず。

○法華經婆娑に弘むるは、普賢薩埵の力なり。讀む人其の文忘るれば、共に誦して覺るらん。

懺法歌一首

○一心敬禮聲すみて、十方淨土に隔てなし。第二第三數ごとに、六根罪障罪滅す。

涅槃歌三首

○拘尸那城には西北方、跋提河の西の岸、娑羅や雙樹の間には、純陀が供養を受け給ふ。
 ○釋迦牟尼佛の滅度には、迦葉尊者も逢はざりき。歩み運びて來しかども、十六羅漢もおくれにき。
 ○二月十五の朝より、此等の法文説き置いて、漸く中夜に至る程、頭を北にぞ臥し給ふ。

極樂歌六首

○極樂淨土は一所、つとめなければ程遠し（遙なり）我等が心の愚にて、近きを遠しと思ふなり。

阿黎樹、原本ニわむすトアリありずトアリシナあんずト誤寫シテカクナリシモノナルベシ。

妙莊嚴王品四首

○釋迦の御法は浮木なり。參り會ふ我等は龜なれや。今は當來彌勒の、三會の曉疑はず。
 ○昔の大王妙莊嚴、古へ行ひせし故に、淨藏淨眼諸共に、一佛乘とぞ聞き給ふ。
 ○聞くに羨しきものは、妙莊嚴の二人の子。淨藏淨眼親を導きて、菩提の道に入れければ。
 ○戯れ遊びの中にしも、先らに學びん人をして、未來の罪を盡す迄、法華に縁をば結ばせん。

普賢品三首

○草の庵の靜けきに、持經法師の前にこそ、生々世々にも逢ひ難き、普賢薩埵は見え給へ。
 ○行住座臥に此の經を、讀む人あらば隙もなく、普賢はるかに尋ね來て、縁をば結び給ひけり。

○極樂淨土の東門は、難波の海にぞ對へたる。轉法輪所の西門に、念佛する人參れとて。
 ○極樂淨土のめてたさは、一つもあたなることぞ無き。吹く風立つ浪鳥も皆、妙なる法をぞ唱ふなる。
 ○極樂淨土の宮殿は、瑠璃の瓦を青く葺き、眞珠の垂木を造り並め、瑪瑙の欄を押開き。
 ○十方佛土の中には、西方をこそは望むなれ。九品蓮臺の間には、下品なりとも足んぬべし。
 ○淨土は數多あんなれど、彌陀の淨土ぞすぐれたる。九品なんあんなれば、下品下にもありぬべし。

僧歌十首

○迦葉尊者の裳の裾は、文殊の袂にうちはぶき、大通王の佩ける太刀、大悲の膝にぞ解きかけし。
 ○迦葉尊者の石の室、祇園精舎の鐘の聲、醍醐の山には（なる）佛法僧、雞足山には法の聲。
 ○迦葉尊者の禪定は、雞足山の雲の上、春の霞みし龍華會に、付囑の衣を傳ふなり。

○迦葉尊者はあはれなり。付囑の衣を頂きて、鷄足山にこもりて、龍華の曉待ち給ふ。

○迦葉尊者のふる道に、竹の林ぞ生ひにける。功德願の園見れば、昔の庵ぞあはれなる。

○迦葉尊者の打ちし鐘、聞えぬ所ぞ無かりける。橋梵波提一人こそ、定に入りては聞かざりし。

○迦葉尊者の石の室、入るにつけてぞ恥しき。えんしう(縁執カ)盡きざる身にしあれば、袂に花こそ止るなれ。

○大峯聖を舟に乗せ、粉河の聖を舳に立てて、正きう聖に梶取らせて、や乗せて渡さん常住佛性や極樂へ。

○大峯行ふ聖こそ、あはれに尊きものはあれ。法華經誦する聲はして、確の正體いまだ見えす。

○山寺行ふ聖こそ、あはれに尊きものはあれ。行道引聲阿彌陀經、曉懺法釋迦牟尼佛。

雜法文歌五十首

○娑羅や林樹の木の下に、歸ると人には見えしかど、靈鷲山の山の端に、月はのどけく照すめり。

等に遊ばむ人は皆、靈山界會の友とせん。
○蓮華陸地に生ひずとは、暫く彈訶の詞なり。泥水堀り得て後よりぞ、妙法蓮華は開けたる。

○摩犂山に生ふといふ、牛頭や梅檀得てしがな。手に取り身に觸れ香をかけば、生身の罪障解けぬべし。

○摩犂山の峯にこそ、かうふてゐる(木ノマ)蒔き置きし、僧伽の種に生ひにけり。やうれう(木ノマ)香とぞ匂ふなる。

○忉利は尊き處なり、善法堂には未申、圓生樹より丑寅に、中には喜見の城立てり。

○忉利の都は、歡喜の御名をぞ唱ふなる。五臺山には文殊こそ、六時に華をば散すなれ。

○忉利の都の鶯は、埒定めてさぞ遊ぶ。淨土の植樹となりぬれば、花咲き實なるぞあはれなる。

○太子の御幸には、靉陟駒に乗り給ひ、車匿舍人に口とらせ、檀特山にぞ入り給ふ。

○龍女は佛になりにけり。などか我等もならざらん。五障の雲こそ厚くとも、如來月輪隠されじ。

○いちひくや(木ノマ、雙目カ)よれる核葛繰れども繰れども盡きもせず。やさう(木ノマ)の池なる花蓮、拘尸那城にぞ開ける。

○傅氏が巖窟の嵐には、殷の夢見て後ぞよき。嚴(峻)瀨の池の水、今こそ汲むには濁るらめ。

○釋迦の月は隠れにき。慈氏の朝日はまだ遙かなり。其の程長夜の闇きをば、法華經のみこそ照い給へ。

○釋迦の説法聽きにとて、東方淨妙國土より、普賢文殊は獅子象に乗り、娑婆の穢土にぞ出で給ふ。

○大唐朝廷の近からば、五臺御山におはします、釋迦牟尼佛の母といます、文殊の御許へも参りなまし。

○香山大樹緊那羅が、瑠璃の琴には摩訶迦葉や、三會の袂したがひて、草木も四方にぞ靡きける。

○法華經八卷は網なれや。無量義經を泛子として、觀音勢至をあむことし(木ノマ)救ひ給へ罪人を。

○法華の御法ぞ頼もしき。生死の海は深けれど、諸經くりいむ(木ノマ)譬にて、遂に我等も浮びなん。

○蓮の花をば板と踏み、空しき莖をば杖とついで、これ

○太子の身投げし夕暮に、衣は懸けてき竹の葉に。王子の宮を出でしより、杳はあれども主も無し。

原本此ノ歌ノ屑ニ無此歌ト小サケ記セリ。

○生死の大海邊無し。佛性眞如岸遠し。妙法蓮華は舟筏、來世の衆生渡すべし。

○有漏の此の身を捨てうて、無漏の身にこそならむすれ。阿彌陀佛の誓あれば、彌陀に近づきぬるぞかし。

○其の程東西十里なり。南北七百由旬なり。水竹花樹は悉く、莊嚴淨土に異ならず。

○天台宗の畏さは、般若や華嚴摩訶止觀、玄義や釋籤俱舍頌疏、法華經八卷が其の論義。

○毗廬の身土のいやしきを、凡下の一念こえずとか。阿鼻の依正の卑しきも、聖の心に任せたり。

○もとこれ祇陀は太子の地、須達黃金を地に敷きて、佛の御爲に買取りて、始めて精舎となし(なりし)なり。

○師子や王のよそのひは轉法輪をぞ歡とする。たうやはたうのすとして、(木ノマ)身を分け佛土に近かりき。

よそのひはよろこひの誤寫ナルベシ。

○淨飯王じやうはんわう箒はきを持ち、耆闍崛山きせつこつせんには聖者まがしや居りとかやな。五台山ごたいざんの深きより、一乗いちじやうとなつて出で給ふ。

○摩耶まやの腹はらより生れ出で、寶の蓮足はうすをうけ、十方七度歩じふぱうしちたふみつつ四句しごの偈ぎをぞ説とくい給ふ。

○摩揭陀國まがたごくの王わうの子に、おはせし悉達太子しつたつたいこそ、檀特山だんとくせんの中山なかつまに、六年行ひ給ひしか。

○鷲じゆのおこなふ山より、聖德太子せうとくたいぞ出で給ふ。鹿が苑かぎそのなる岩屋いはや(みやま)より、四果しごの聖せいぞ出で給ふ。

○毘舍離城びせりじやうに住せりし、淨名居士じやうなごしの御室みむろには、三萬二千の床ゆか立てて、それにぞや十方の佛は居給ひし(座せりしかい)

○狂言綺語きやうげんきこのあやまち(たはふれい)は、佛を讚ほむる種しゆ(緣えん)として、籠かごき言葉も如何なるも、大智だいちきとかにぞ歸かへるなる。

○慈悲じいの眼まなこはあざやかに、蓮の如くぞ開けたる。智惠ちゑの光はよりくくに、朝日あさひのごと明らかに。

○白道猷はくどういが舊ふるき室むろ、王子晋わうししんが故もとの跡あと、一々に巡めぐりて見給

○須彌すみの峯かみには塔たつ立てり。名をばせんふく彌陀みだの塔。蓮華れんげや后ごの一ひとの願ねがひ、其の日の講師こうしは釋迦佛しやくぢあふつ。

○三會さんゑの曉待あけまちつ人は、所を占めてぞおはします。雞足山けいそくざんには摩訶迦葉まかぢあつや。高野たかのの山には大師だいしとか。

○我等われらは何して老いぬらん。思へばいとこそあはれなれ。今は西方極樂さいぱうごくらくの、彌陀みだの誓ちかひを念ねんすべし。

○我等われらが心に隙ひまもなく、彌陀みだの淨土じやうとを願ねがふかな。輪廻りんゑの罪つみこそ重おもくとも、最後に必ず迎へ給へ。

○彌陀みだの誓ちかひを頼たのもしき。十惡五逆じゆくごぎやくの人なれど、一たび御名みなを唱となふれば、來迎らいゑん引ひ接せつ疑ぎはす。

○曉靜あけしづかに寢覺ねざくして、思へば涙なみだぞ抑おさへあへぬ。はかなく此の世このよを過すしても、(は)誤寫ごさナルベシ)いつかは淨土じやうとへ參るべき。

○峯かみに起き臥ふす鹿かだにも、佛ぶつになることいとやすし。己おのれれが上毛うへけを整ととへ筆ふでに結び、一乘法いちぽうぽう書かいたなる功德くふとくに。

○はかなき此の世このよを過すすとて、海山かいざんかせぐとせし程ほどに、萬よろづの佛ぶつに疎こまれて、後生ごじやう我が身みをいかに(がい)せん。

○萬よろづを有漏うろうと知りぬれば、阿鼻あびの炎えんも心こころから、極樂淨土ごくらくじやうと

ふに、昔の夢に異ならず。

○梵釋四王ぼんじやくしわう諸天衆しよてんしゆ、頭かうべを傾かたむけ候まをひき。草木くさきも靡なきて悉しつく、歡よろこび拜まがみ奉たる。

○彈多落迦山だんだらくぢあせんの月の影かげ、さやかに照せば隈くまもなし。佛性ぶつじやう真如まによの清きよければ、いよく光ひかりぞ輝きらける。

○夜更よふかけて長夜ながよに至る程ほど、しうかく(本ノマ)眠ねりて春の水はるの、娑婆さはの故ふるき郷きやうに同じ。罪業ざいごふなきては秋の風あきのかぜ、閻浮えんぶの昔むかしの日に似たり。切句

○寂滅道場じやくめつだうぢやう音ね無なくて、伽耶山かやざんに月つき隠かくれ、中夜ちゆうやの靜しづかなりしにぞ、始めて正覺しやうがく成なり給ふ。

○崑崙山こんろんざんには石いしも無なし。玉たましてこそは鳥とりは打うて。玉たまに馴なれたる鳥とりなれば、驚おどく景色けしきぞ更さらに無なき。

○崑崙山こんろんざんの麓ふもとには、五色ごしきの波なみこそ立ち騒さわげ。華藏わさうや世界の鐘かねの聲こゑ、十方佛土じふぱうぶつとに聞きゆなり。

○烏瑟綠うせつろくの元結もとむすは、髮筋かみすぢ毎ごとにぞ光ひかりなる。龍女りゆうにょが妙たえなる聲こゑ引ひは、聞きけども聞きけども飽あく期き無なし。

○佛ぶつも昔むかしは人ひとなりき。我等われらも終しゆうには佛ぶつなり。三身佛性さんしんぶつじやう具ぐせる身みと、知らざりけるこそあはれなれ。

の池水いけみづも、心こころすみては隔へだてなし。

四句神歌 百七十首

神分三十六首

○神の家の小公達は、八幡の若宮、熊野の若王子、子守御前、比叡には山王十禪師、賀茂には片岡、貴船の大明神。

○東の山王恐ろしや。二宮客人の行事の高の王子。十禪師山長石動の三宮、峯には八王子ぞ恐ろしき。

○佛法弘むとて、天台麓に跡を垂れおはします。光を和らけて塵となし、東の宮とぞ齋はれおはします。

○神の御前の現するは、さう九上山長行事の高の王子、牛の王子、王城ひたかいたうめる鬢頬結ひの一童や、いちるさり、八幡に松童せいしん、此所には荒夷。

○これより南に高き山、娑羅の林こそ高き山、高き峯、日前國懸、中の宮、伊太神曾なる神とや、切三所。

○王城東は近江、天台山王、峯のお前、五所のお前は聖眞子、衆生願を一統に。

せんとて。

○熊野へ参るには紀路と伊勢路のどれ近し。どれ遠し。廣大慈悲の道なれば、紀路も伊勢路も遠からず。

原本どれノ肩ニ以下無之トアリ。

○熊野へ参るには、何か苦しき修行者よ、安松姫松五葉松、千里の濱。

○熊野へ参らむと思へども、徒歩より参れば道遠し。すぐれて山きびし。馬にて参れば苦行ならず。空より参らむ羽たへ若王子。

○熊野の権現は、名草の濱にこそ降り給へ。若の浦にしましませば、年はゆけども若王子。

○花の都をふり捨てて、くれぐれ参るはおほろけか。かつは権現御覽ぜよ。青蓮の眼を鮮かに。

○八幡へ参らんと思へども、賀茂川桂川いと早し。あな早しな。淀のわたりに舟浮けて、迎へ給へ大菩薩。

○南宮の本山は、信濃の國とぞ承る。さぞ申す。美濃の國には中の宮、伊賀の國には幼き兒の宮。

○金の御嶽は一天下、金剛藏王釋迦彌勒、稻荷も八幡も

○關より東の軍神、鹿島香取諏訪の宮。また比良の明神(王イ)安房の洲、瀧の口や小鷹明神 熱田に八劍、伊勢には多度の宮。

○關より西なる軍神、一品中山安藝なる嚴島。備中なる吉備津宮、播磨に廣峯惣三所、淡路の岩屋には住吉西の宮。

○南宮の宮には泉出でて、雑井のお前は潤ふらん。濁るらむ。中の御在所の竹の節は一夜に五尺ぞ生ひのほる。

○何れか貴船へ参る道、賀茂川みのさと御菩薩池、御菩薩坂、幡枝しの坂や二の橋、山河さらさら岩枕。

○貴船の内外座は、山尾川尾よ、奥深吸葛、白石白髭白専女くろをの御前は、あはれ内外座や。

○近江の湖は海ならず。天台薬師の池ぞかし。何ぞの海、常樂我淨の風吹けば、七寶蓮華の波ぞ立つ。

○近江の湖に立つ波は、花は咲けども實もならず、枝ささず、や比叡のお山の西裏にこそ、や水飲ありと聞け。

○祇園精舎の後は、よもく知られぬ杉立てり。昔より山の根なれば、生ひたるか杉、神のしるしと(をか)見

木島も、人の参らぬ時ぞなき。

○金の御嶽は四十九院の地なり。媼は百日千日は見しかど、え知り給はず、俄に佛法僧たちの二人(三人イ)おはしまして、行ひ現かし奉る。

○金の御嶽にある巫女の、打つ鼓、打上げ打下し面白や。我等も参らばや、ていとんととも響き鳴れ、く。打つ鼓いかに打てばか、此の音の絶えせざるらむ。

○神のめでたく験するは、金剛藏王はく(本ノマ)王大菩薩、西の宮祇園天神大將軍、日吉山王賀茂上下。

○大梵天王は、中の間にこそおはしませ。正法波利女の御前には、西の間にこそおはしませ。

○清水の冷き二宮に、六年苦行の山籠り、數珠の禿るも惜しからず。童子の戯れいかなるも、(本ノマ)それ如何に。

○大しやうたつといふ河原には、大將軍こそ下り給へ。あつらひ廻り諸共に、下り遊う給へ大將軍。

○一品聖靈吉備津宮、新宮本宮内の宮、はやとさきくたや(本ノマ)南の神客人、丑寅みさきは恐ろしや。

○宇治には神おはす。中をは菩薩御前。橘小島のあたぬし。七寶蓮華はをしつるぎ。

○岩神三所は今貴船、参れば願ぞ充て給ふ。歸りて住所をうち見れば、無数の寶ぞ豊かなる。

○住吉四所の御前には、顔よき女躰ぞおはします。男は誰ぞと尋ねれば、松が崎なる好色漢。

○天の御門より、一童吾兒こそ出で給へ。衆生願ひをば、一童吾兒こそ満て給へ。

○本體觀世音、常在補陀洛の山、爲度や衆生、生々示現大明神。

○しま(濱カ)の南宮は如意や寶珠の玉を持ち、須彌の峯をばらいとして、かいろの海にぞ遊ぶ給ふ。

佛歌十二首

○釋迦の御法は天竺に。立井三藏弘むとも、深沙大王渡さずば、此の世に佛法なからまし。

○釋迦の説法終りなば、摩訶や迦葉の大阿羅漢、雞足山より慈尊の出で給はう世に参り會はむ。

所は其處ぞかし。
○極樂浄土の東門に、機織る蟲こそ桁に住め。西方浄土の燈火に、念佛の衣ぞ急ぎ織る。

○妙見大悲者は北の北にぞおはします。衆生願を満てむとて、空には星とぞ見え給ふ。

經歌八首

○法華經八卷は一部なり。擴けて見たればあな尊。もじごとに序品第一より受學無學作禮而去に至るまで、讀むもの聞くもの皆佛。

○鷺の行ふ法華經は鹿が苑なる草の枕、草枕、白鷺が池なる般若經、鶴の林の長き祈なりけり。

○法華經持てばおのづから戒香涼しく身に匂ひ、經には是名持戒行頭陀者と説いたれば、佛の道には障なし。

原本 頭陀ナ假名書ニシ、其ノ肩ニ頭陀の字ナシト小書キニセリ。

○妙法習ふとて、肩に袈裟掛け年經にき。峯に上りて木

○釋迦牟尼佛の童名は、悉達太子と申しけり。父を淨飯王といひ、母これ善覺長者の女摩耶夫人。

○文殊は誰か迎へ來し、齋然聖こそは迎へしか。迎へしかや。伴には優填國るわうやらう正らう人、善財童子の佛達、さて十六羅漢諸天衆。

○文殊の次をば何とかや。をいへく童子が子なりけり。眉間白毫照すには、十二の菩薩ぞ出で給ふ。

○觀音勢至の遣水は、阿耨多羅とぞ流れ出づる。流れたる。ゆくわう太子の前の池の波は、や、唵囉囉とぞ立ち渡る。

○我が身は罪業重くして、終には泥犂へ入りなんす。入りぬべし。佉羅陀山なる地藏こそ、毎日の曉に必ず來りて訪う給へ。

○不動明王恐ろしや。怒れる姿に劍を持ち、索を下け、後に火炎燃え上るとかやな。前には惡魔寄せじとて降魔の相。

○釋迦の住所はどこぞ。法華經の六卷の自我偈にや説かれたる文ぞかし。常在靈鷲山に並びたる及餘諸住

も樵りき。谷の水波み、澤なる菜も摘みき。

○龍女が佛に成ることは文殊のこしらへとこそ聞け。さぞ申す。娑竭羅王の宮を出でて、變成男子として、終には成佛道。

○文殊の海に入りしには、娑竭羅王波をやめ、龍女が南へ行きしかば、無垢や世界にも月すめり。

○娑婆に暫しも宿れるは、一乘聞くこそあはれなれ。嬉しけれ。や、人身再び受け難し。法華經に今一度いかでか参り會はむ。

僧歌十三首

○大師の住所はどこぞ。傳教慈覺は比叡の山、横河の御廟とか。智證大師は三井寺にな。(原本肩ニ無此字トアリ)。

弘法大師は高野の御山にまだおはします。

○天台大師は能化の主、眉は八字に生ひ別れ、法の使に世に出でて、殆と佛に近かりき。

○聖の住所はどこぞ。箕面よ勝尾よ、播磨なる書寫の山、出雲の鰐淵や日の御崎、南は熊野の那智とかや。

○聖の住所はどこぞ。大峯葛城いとつち(ホノマヤ石の積カ) 箕面よ勝尾よ、播磨の書寫の山、南は熊野の那智新宮。

○大峯通るには、佛法修行する僧るたり。唯一人。若や子守は頭を撫で給ひ、八大童子は身を護る。

○我等が修行に出でし時、珠洲の岬をかいさはり、打廻り、振棄てて、一人越路の旅に出でて、足打ちせしこそあはれなりしか。

○我等が修行せしやうば、忍辱袈裟をば肩に掛け、又笈を負ひ、衣はいつとなくしほたれて、四國の遍路をぞ常に踏む。

○春の焼野に菜を摘めば、岩屋に聖こそおはすなれ。唯一人。野邊にてたびく逢ふよりはな(肩ニ無此字トアリ)いざ給へ。聖こそあやしの様なりとも、わらはが柴の庵へ。

○柴の庵に聖おはす。天魔はさまぐに惱ませど、明星漸く出づる程、遂には随ひ奉る。

○峯の花折る小大徳、面立よければ裳袈裟よし。まして高座に上りては、法の聲こそ尊けれ。

○筑紫の靈驗所は大山四王寺清水寺、むさし清瀧、豊前國の企救の御堂な。竈門の本山、彦の山。

○根本中堂へ参る道、賀茂河はかはひみつし(ひろしか)観音院の下り松、ならぬ柿の樹人やどり禪師阪、すべりし水飲四郎阪、雲母谷太田袈裟の池、あこやの聖が立てたりし千本の率都婆。

○觀音驗しを見する寺、清水石山、長谷のお山粉河近江なる彦根山、眞近く見ゆるは六角堂。

○何れか清水へ参る道、京極くだりに五條まで石橋よ、東の橋詰四つ棟六波羅堂、愛宕寺大佛ふかるとか。それを打過ぎて八阪寺、一段上りて見下ろせば主典太夫が仁王堂、塔の下天降り末社、南を打見れば、手水棚手水とか、お前に参りて恭敬禮拜して見下ろせば、此の瀧は様がる瀧の、興がる瀧の水。

○淡路はあな尊、北には播磨の書寫をまもらへて、西には文殊より南え南海補陀洛の山に向ひたり。東は難波の天王寺に舍利またおはします。

原本のノ横に無此字ト小書キセリ。

○冬は山伏修行せし、庵とたのめし木の葉も紅葉して、散り果てて空さびし。襦と思ひし苔にも初霜雪降り積みて、岩間に流れ來し水も氷りしにけり。

○聖の好む物、木の節わさづの鹿の皮、蓑笠錫杖木屨子、火打箭岩屋の苔の衣。

靈驗所歌六首

○何れか法輪へ参る道、内野通りの西の京、それ過ぎて、や、常盤林の彼方なるあひく行流れ來る大堰河。

○嵯峨野の興宴は、山たう(はふか)かつらまうく車田(ホノマヤ)二條河原、龜山法輪や、大堰河、淵々かせに神さび、松尾の最初の二月初午に富配る。

原本ささらぎノ横ニ無之ト小書キセリ。

○嵯峨野の興宴は、鶉舟筏師流れ紅葉、山蔭響かす箏の琴、淨土の遊びに異ならず。

○四方の靈驗所は、伊豆の走井、信濃の戸隠、駿河の富士の山、伯耆の大山、丹後の成相とか。土佐の室生と讃岐の志度の道場とこそ聞け。

雜八十六首 (原本雜ノ肩ニ無之ト記シ其ノ下ニ)

同シツ小書ニシテ祝七首云々トアリ)

○萬劫年經る龜山の、下は泉の深ければ、苔生す岩屋に松生ひて、梢に鶴こそ遊ぶなれ。

○萬劫龜の背中をば、沖の波こそ洗ふらめ。如何なる塵の積りてゐて、蓬萊山と高からむ。

○海には萬劫龜遊ぶ、蓬萊方丈瀛洲、此の三の山をぞ戴ける。巖に練する龜の齡をば、讓るく君に皆讓る。

○海には萬劫龜遊ぶ蓬萊山をや戴ける。仙人童を鶴に載せて、太子を迎へて遊ばばや。

○黄金の中山に、鶴と龜とは物語、仙人童の密に立聞けば、殿は受領になり給ふ。

○須彌を遙に照す月、蓮の池にぞ宿るめる。ほう(放カ)光 渚に寄る龜は、劫を経てこそ遊ぶなれ。

○お前の遣水に妙さち(絶カ)こむほうなる砂あり眞砂あり。砂の眞砂の半天の巖とならん世迄、君はおはしませ。

本此所ニ雜八十首云云(本ノマ)

○山の調は櫻人、海の調は波の音、又鳥廻るよな。宮仕が集ひは中の宮、嚴粧遺戸は此處ぞかし。

○鈴は亮振る藤太巫女、目より上にぞ鈴は振る。ゆらゆらと振上げて、目より下にて鈴振れば、懈怠なりとて忌忌し神腹立ち給ふ。

○近江におかしき歌枕、老曾、轟、蒲生野、布施の池、安義の橋、伊香の餘吾の湖の滋賀の浦に、新羅が立てたりし持佛堂の金の柱。

○これより東は何とかや。關山關寺大津の三井のおろし、いま(山カ)おろし、石田殿、栗津石山國分や、瀬田の橋、千の松原竹生島。(原本、ノ所ニうるト傍書セリ)

○武者を好まば小屋並び、狩を好まば綾蘭笠捲り上げて、梓の真弓を肩にかけ、軍遊びを(セカ)よ軍神。

○筑紫の門司の關、關の關守老いにけり。鬢白し、何とて据ゑたる關の關屋の關守なれば、年の行くをば留めざるらん。(原本はノ横ニもトアリ)

○筑紫なんなるや唐の金、白ろといふ金もあんなるは、

のまついぬとたひせよし(本ノマ)ない給へ。

○嚴粧狩場の小屋並び、暫しは立てたれ關の外に、懲らしめよ。宵の程。昨夜も昨夜も夜離しき。け過(本ノマ)は來りとんく、目に見せそ。

○われをたのめて來ぬ男、角三つ生ひたる鬼になれ。さて人に疎まれよ。霜雪露降る水田の鳥となれ。さて足冷かれ。池の萍となりねかし。と揺りかう揺り、揺られ歩りけ。

○冠者は妻設に來んけるは、かまつて二夜は寝にけるは、三夜といふよ。(原本よのノ横ニ無之トアリ)夜半ばかりの曉に、袴取りして逃げにけるは。

○吾主は情無や、妾があらじとも(すまじとい)棲まじ(もらじい)ともいはばこそ憎からめ。父や母の離け給ふ中なれば、斬るとも刻むともよにもあらじ。

○美女打見れば、一本葛(と)もなりなばやとぞ思ふ。本より末迄、送られればや。斬るとも刻むとも離れ難きはわが宿世。

○君が愛せし綾蘭笠、落ちにけりく、賀茂川に。川中

ありと聞く。それを合せて造りたるあこや(吾屋屋カ)の玉壺やうかりな。

○よくくめでたく舞ふものは、巫小檜葉車の筒とかや。やちくま(本ノマ)侏儒舞手傀儡師、花の園には蝶小鳥。

○をかしく舞ふものは、巫小檜葉、車の筒とかや。平等院なる水車、はやせば舞ひ出づる螳螂牛。

○心の澄むものは、秋は山田の庵毎に、鹿驚かすてふ引板の聲、衣しで打つ槌の音。

○心の澄むものは、霞花園夜半の月、秋の野邊、上下も分かぬは戀の道、岩間を漏り來る瀧の水。

○常に戀するは、空には織女流星、野邊には山鳥秋は鹿、流れの君逢冬は鴛鴦。

○思ひは陸奥國、戀は駿河に通ふなり。見初めざりせばなかくに、空に忘れて止みなまし。

○百日百夜は獨り寝と、人の夜夫は否、實正に欲しからず。宵より夜半迄はよけれども、曉鶏鳴けば床さびし。

○天魔が八幡に申すこと、頭の髪こそ前世の報にて生ひざらめ、そは生ひすとん、絹蓋長幣なども奉らん、咒師

に(原本横ニ無之トアリ)それを求むと尋ぬとせし程に、あけにけりく、さらくきいけ(本ノマ)の秋の夜は。

○勝れて高き山、須彌山耆闍崛山鐵圍山、五臺山、須陀羅太子の六年行ふ檀特山、と山こく山鷲峯山。

○勝れて高き山、大唐唐には五臺山、靈鷲山、日本國に(原本にノ横ニ無之トアリ)は白山、天台山、音にのみ聞く蓬萊山こそ高き山。

○頭に遊ぶは文の鳥、沖の波をこそ數にかけ、數とすれ。や、濱の眞砂は數知らず。や、せはす(本ノマ)の願は(原本コノ横ニ無之トアリ)満ちぬらむ。

○小磯の濱にこそ、紫檀赤木は寄らすして、流れ(原本れノ横ニ無之トアリ)こで、こ竹の竹のみ吹かれ來て、たんなりりやらの波ぞ立つ。

○土佐の船路は恐ろしや。室津が沖なら天(でカ)はしませかいは、はたて崎や。佐喜のうちくら、御厨の最御崎、金剛淨土のつれなころ。(つなところカ)

○備後の柄の島、其の島、島にて島にあらず。島ならず。螺なし。榮螺なし。石華もなし。海人の刈りほす若布な

○明石の浦の波、浦やなれたりけるや、(木ノマ) 浦の波かな。此の波は打寄せて、風は吹かねども、や、小波ぞ立つ。

○年頃撫で飼ふ龍の駒、馬場の末にぞ練ずなる。すは走り出でて若宮三所は乗り給ひ、慈悲の袖をぞ垂れ給ふ。

○上馬の多かる御館かな。武者の館とぞ覺えたる。咒師の小咒師の肩踊り、宮仕ははくかた(木ノマ)の男巫。

○御厩の隅なる飼猿は、絆放れてさぞ遊ぶ。木に登り、常磐の山なる檜柴は、風の吹くにぞちうとろ搖ぎて裏返る。

○頭は白き翁とも、佛事を勤めよ梅檀は(木ノマ)頭白かる鶴だにも、澤には千歳年経なり。

○鶴飼はいとをしや、萬劫年経る龜殺し、また鶴の頸を結び、現世はかくてもありぬべし。後生我が身を如何にせん。

○嵯峨野の興宴は、野口打出でていはさきに、禁野のたかひあつともが、野鳥合せしこそ見まほしき。

何を祟り給ふ若宮の御前ぞ。

○我が子は十餘に成りぬらん、巫してこそ歩くなれ。田子の浦に汐ふむと、いかに海人人集ふらん、まさしとて、問ひみ問はずみ、颯るらんいとをしや。

○我が子は二十になりぬらん、博打してこそ歩くなれ。國々の博黨に、さすがに子なれば憎かなし、負かい給ふな我氏の住吉西の宮。

○媼の子どもの有様は、冠者は博打の打負や、勝つ世なし。禪師は夙に夜行好むめり。姫が心のしどけなければいとわびし。

○拘戸那城の後ろより十の菩薩ぞ出で給ふ。博打の願ひを充てんとて、一六三とぞ現じたる。

○此の頃京に流行るもの、肩當腰當烏帽子止め、襟の立つ片さび烏帽子、布打の下袴、四幅の指貫。

○此の頃京に流行るもの、わうたいかみく(木ノマ)るせかつら(似非鬘カ)しほゆ(やカ)きあふみめ(近江女カ)笠女カ)女冠者、薙刀持たぬ尼ぞなき。

○清太が造りし刈鎌を、何しに研ぎけむやさ(きカ)けむ

○羽根なきとりの様かるは、炭取楯取かいもとり、(貝葉取カ)石投取、虎杖、垣生に生ふてふ拔藝や、弓取筆取小弓の矢取とか。

○鞞の冠者の君、何色の何摺りか好う給ふ着まほしき。麴塵山吹止め摺りに、花村濃。切句みな柏や輪鼓輪違へ笹結び、縹緞、前垂の寄生樹の鹿子結。

○遊びをせんとや生れけむ、戯れせんとや生れけむ。遊ぶ子どもの聲聞けば、我が身さへこそ揺がるれ。

○お前に参りては、色も變らで歸れとや。峯に起き臥す鹿だにも、夏毛冬毛は變るなり。

○甲斐の國より罷り出でて、信濃の御飯をくれくれと、はるくくと、鳥の子にしもあらねども、産毛も變らで歸れとや。

○王子のお前の笹草は、駒は喰め(くへい)ども猶茂し。主は來ねども夜殿には、床の間ぞなき若ければ。

○媼が子どもは唯二人、一人の女子は二位中將殿の厨雜仕に召ししかば、奉てき、弟の男の子は宇佐の大宮司が早船舟子に乞ひしかば、奉いてき。神も佛も御覽ぜよ、

造りけむ。すみたうなんなるに(木ノマ)逢坂奈良坂不破の關、栗駒山にて草もえ刈らぬに。

○清太が造りし御園生に、苦瓜甘瓜のなかれる(なれるカ)かな。紅南瓜、千々に枝させ生瓢、ものな宣ひそ鱈茄子。

○山城茄子は老いにけり。採らで久しくなりにけり。吾子が三人、ざりとてそれをば棄つべきか。置いたれく種取らむ。

○風に靡くもの、松の梢の高き枝、竹の梢とか。海に帆掛けて走る船、空には浮雲、野邊には花薄。

○勝れて早きもの、鶴、隼、手なる鷹、灌の水、山より落ち來る柴車、三所五所に申す言。

○京より下りしとけのほる(木偶師ノ誤カ) 島江に屋建てて住みしかど、そも知らず、打棄てて、いかに祭れば百太夫、驗なくて花の京へ歸すらむ。

○樂の御牧の時作り、時は作れど、女の顔ぞよき。あな美しやな。あれを三つ車の四つ車の間行く輦に打載せて、受領の北の方といはせばや。

○尼はかくこそ候へど、大安寺の一萬法師も伯父ぞかし。甥もあり。東大寺にも修學して、子も持たり。尼、病の候へば、物も着で参りけり。

○池の澄めばこそ、空なる月影も宿らめ。沖より前妻（小波）の立ち來て打てばこそ、岸も後妻打たんとて崩らめ。

○月影ゆかしくば南面に池を掘れ。さてぞ見る。琴のことの音聞きたくば、北の岡の上に松を植るよ。

○遊女の好むもの、雜藝、鼓、小端舟、大笠翳、艦取女、男のあい（間カ）祈る百太夫。

○唐唐なる唐の竹、佳節二節切込めて、萬の綾羅ん（に）巻きこめて、一宮にぞ奉る。

○節の様かるは、木の節、萱の節、山葵の豎の節、峯には山伏、谷には鹿の子臥、翁の美女婚りえぬ獨臥。

○吹田の御湯の次第は、一宮二丁三安樂寺、四には四王寺、五侍六せんふ、七九八丈九間丈、十には國分の武藏寺、夜な過去の諸衆生。

○娑婆に忌々しく憎きもの、法師のあせる上馬に乗りて、

や。昔冠りの中子とかや。翁の杖ついたる腰とかや。

○茨垣の下にこそ、鼈笛吹き猿奏で搔乙で、稻子鷹右手拍子つく。立蟋蟀は鉦鼓のくよき上手。

○彼處に立てるは何人ぞ。稻荷の下の宮の太夫御息子か。眞實の太郎なや、俄に曉の兵仕についさゝれて、残りの衆生達を平安に護れとて。

○女の盛りなるは十四五六歳二十三四とか。三十四五にし成りぬれば、紅葉の下葉に異ならず。

○海老渡舎人は何處へぞ。小魚渡舎人がり行くぞかし。此の江に海老なし、下りられよ。あの海老さこ（雜魚カ）の散らぬ間に。

○いざ給へ隣殿、天津の西の浦へ雜魚渡に。此の江に海老なし、あの江へ往ませ、海老交りの雜魚やあると。

○見るに心の澄むものは、社壞れて禰宜もなく、祝なき、野中の堂の又破れたる。子生まぬ式部の老の果。

○男怖ぢせぬ人、賀茂女伊豫女上總女、はしにあかてるゆめ（橋に明せる女又は橋に赤照る女）なえのすし（本ノマ）の人、室町渡りの吾兒人。

風吹けば口あきて、頭白かる翁どもの若女好み、姑の尼君の物妬み。

○西山通りに來る樵夫、を背を並べてさぞ渡る。桂川、後なる樵夫は新樵夫な、波に揺られて尻杖捨てて搔纏るめり。

○鳥は見る世に色黒し。鶯は年は経れども猶白し。鴨の頸をば短しとて繼ぐものか、鶴の脚をば長しとて切るものか。

○小鳥の様かるは、四十雀鶉鳥、燕、三十二相足らうたる啄木鳥、鴛鴦鴨魚狗鳩川に遊ぶ。

○西の京行けば、雀齒黒め（燕）筒鳥や、さこそ聞け。色好みの多かる世なれば、人は響むとも鷹だに響ますば。

○公達朱雀はぎの市、大原靜原長谷岩倉八瀬の人集りて、きやみすゝみやめすたらいふね（本ノマ）しなる、也。法師に禰宜換へたべ京の人。

○淡路の門渡る犢こそ、角を並べて渡るなれ。後なる牝牛のこむことい（産む犢カ）背斑子牝牛は今ぞ行く。

○可笑しく屈まる物はたゞ、海老よ強よ、牝牛の角とか

○樵夫は恐ろしや。荒けき姿にこまを持ち、斧を提げ、後ろにしはき（本ノマ）まい上るとかやな。前には山守寄せじとて杖をさけ。

○海におかしき歌枕、磯邊の松原琴を弾き、調めつつ、沖の波は磯に來て、鼓打てば、鶯濱千鳥舞ひこだれて遊ぶなり。

○こゆりさん（本ノマ）の渚には金の眞砂ぞ揺られ來る。梅檀香樹の林には、付囀の種こそ流れけれ。

○隣の天子が祀る神は、頭の縮け髪、ます髪、額髪、指の先なる下手がみ、足の裏なる歩き神。

○さゝらが牛は憎きもの、きしいぬかうなき（雉子犬硯カ）をひわかにはねこそその物願ひ（本ノマ）うゑさるんたる（本ノマ）ともすれば物咎め。大しとか、御許の物問ひに走る後手や（よイ）

○瀧は多かれど、嬉しやとぞ思ふ。鳴る瀧の水、日は照るとも、たへてとふ（うイ）切切たへ。やれことつと。

○鶯の本白をくわうたいくわう（皇太后カ）の篋に矧ぎて、宮の御前を押開き、ふとう射させんとぞ思ふ。

○侍藤五君、めしし弓矯はなど飛ばぬ。弓矯も篋矯も持ちながら、讃岐の松山へ入りにしは。

○大唐帝はゆくもり(豊かなりカ)黄金の眞砂は數知らず、閨には黄金の蝶遊ぶ。まてこくいほはほとかけはして(本ノママ)

○舞へく、蝸牛、舞はぬものならば、馬の子や牛の子に蹴させてん。踏破らせてん、まことに美しく舞うたらば、花の園まで遊ばせん。

○鏡曇りては我が身こそ寝れける。我が身寝れては、男退け引く。

○頭に遊ぶは頭、虱、頂の窩をぞ極めて咬ふ。櫛の齒より天降る。芋桶の蓋にて命終る。

○大宮權現は、思へば教主の釋迦ぞかし。一度も此の地を踏む人は、靈山界會の友とせん。

○佛法及文殊とか、多門摩訶迦羅天、山王及傳教大師、慈覺還如來。

○熊野の權現は、名草の濱にぞ下り給ふ。海人の小舟に乗り給ひ、慈悲の袖をぞ垂れ給ふ。

々に擁護して、阿耨菩提なし給へ。

○我等が住所は花の園、生れは初利天、父をはくはんこくのわうや(本ノママ)金包太子なり、我等が住所は花の上。

○毗沙利國の觀音は、今は烏瑟も見えじかし。入りぬらん、聖德太子の九輪は光りも變らで、いまひをつあり。

○般若經をば船として、法華經八卷を帆にあけて、軸をば帆柱に、や、夜叉不動尊に梶取らせ、迎へ給へや罪人を。

○正法世に住し、廿中劫かや、仙人舍利かや建てたりし寶塔世に久し。

○聖の好む物、比良の山をこそ尋ぬなれ、弟子やりて。松茸平茸滑薄、さては池に宿る蓮の這根、芹根蓴午莠河骨打、蕨土筆。

○聖を立てじはや、袈裟を掛けじはや、數珠を持たじはや、年の若き折戯れせん。

○凄き山伏の好む物、はあちきないてたかやまか、も(本ノママ)山葵浙米水雪澤には根芹とか。

○驗佛の尊きは、東の立山美濃なる谷波(近江)の彦根

○鈴は亮振る藤太巫、目より上にぞ鈴は振る。ゆらゆらと振上げて、目より下にて鈴振れば、懈怠なりとて神腹立ち給ふ。(重出)

○これより北には越の國、夏冬とんなき雪ぞ降る。駿河の國なる富士の高嶺にこそ、夜晝ともなく煙立て。

○南宮のお前に旭さし、兒のお前に夕日さし、松原如來のお前には、官まさりの重波ぞ立つ。

○大宮靈鷲山、東の麓は菩提樹下とか、兩所三所は釋迦藥師、さては(きやくはい)王子は觀世音

○吉田野に神祀る。天魔は八幡に葉椀さし、發盤とり賀茂の御手洗に精進して、空には風こそさいさかほとはとれ(本ノママ)

○何れか桂川へ參る道、せんとう七曲崩れ阪、おほ石あつか杉の原、さうちうのお前を行くを玉川の水。

○歸命頂禮大權現、今日より我等を捨てずして、生々世

寺、志賀長谷石山清水、都に眞近き六角堂。

○心凄きもの、夜道船路旅の空、旅の宿、嶮しき山寺の經の聲、思ふや中らひの飽かで退く。

○山の様かるは、天山守山しづく山、なか(か行カ)らねど鈴鹿山、播磨の明石の此方なる鹽垂山こそ様かる山なれ。

○讃岐の松山に、松の一本歪みたる。振りさのすぢりさに猜うたるかとや。直島のさばかんの松をだにも直さざるらん。

○春の始の歌枕、霞鶯歸る雁か(本ノママ)子の日青柳梅櫻三千歳に生る桃の花。

○松の木蔭に立寄りて、岩漏る(岩ひのい)水を掬ぶ間に、扇の風も忘られて、夏なき年とぞ思ひぬる。

○池の冷しき汀には、夏の影こそなかりけれ。木高き松を吹く風の聲も秋とぞ聞えぬる。

○直なるものはただ連枷や、篋竹假名のし文字今年生へたる梅楚、幡梓刺鳥竹とかや。

○武者の好むもの、紺よ紅山吹濃き蘇枋、齒寄生樹の

摺、よき弓胡篠馬鞍太刀腰刀、鎧冑に脇立籠手具して。
 ○法師博打の様かるは、地藏よかせん二郎寺師とか。尾張や伊勢のみ、つ新發意、無下に悪きはけいそく房。
 ○居よく蜻蛉よ、片脚をまるらん、さてるたれ働かで。簾篠の先に馬の尾縫合せて、かいつけて、童べ冠者ばらに繰らせて遊ばせん。

○いざれ獨樂、鳥羽の城南寺の祭見に。我は罷らじ恐ろしや。懲り果てぬ。作り道や四塚にあせる上馬の多かるに。

○鵜飼は悔しかる。何しに急いで漁りけむ。萬劫年經る龜殺しけむ。現世はかくてもありぬべし、後世我が身をいかにせんすらむ。

原本ずらむノ肩ニ無之トアリ。

○粟津の興宴は、東大津の西浦へ。海老交りの雜魚賣りに、大津の西の浦は悪し、上り大路ぞ何もよき。

○まさとを江口へ來んけるは、ありし昔を思ひ出でて、例の藤次がくせなれば、手戲せむとやむ。むまれけむ。
 ○聞くに可咲しき經讀みは、とうかく高砂の明泉房、江

○月は舟、星は白波雲は海、いかに漕ぐらん、桂男は唯一人して。

原本、桂男はノはノ肩ニ無之トアリ。

○春の野にこやかいたるやうにて突立てる鉤蕨、しのびて立てれ下司に採(折イ)らるな。

○垣越に見れどもあかぬ撫子を、根ながら葉ながら風の吹きもこせかし。

○東や香山の山になるく花橘を、八房ふさねて手に取ると夢に見つ。

原本かうせんノ右ニ無之トアリ。

○冬來とも杵の紅葉な散りそよ、散りそよ、な散りそよ、色かへで見む。

○吹く風に消息をだにつけばやと思へども、よしなき野邊に落ちもこそすれ。

○戀しくばとうくおはせ我が宿は大和なる三輪の山本杉立てる門。

○波も聞け小磯も語れ松も見よ、我を我といふ方の風吹いたらば、何れの浦へも靡きなむ。

口のふちにたのやけの君(木ノマ)淀には大君次郎君。
 ○鶯の住むみ山には、なべての鳥は棲むものか、同じき源氏と申せども、八幡太郎は恐ろしや。

原本み山にはノみトはノ肩ニ無之トアリ。

○媒女の様かるは、こちよふてらよまつさへふたこのみや人すしの人、(木ノマ)光りめでたき玉川は、よるよる照す月とかや。

二句神歌 百十八首

○幣帛は散るかと思れば、住吉の松などの木間より、漏らん月をば、やいかがせんする。

○千早振神、神にましますものならば、あはれと思召せ、神も昔は人ぞかし。

○神垣や御室の山の榊葉は、神の御前にしけりあひにけり。

○月も月、立つ月ことに若きかな、つくく老をする我が身なになるらむ。

○須磨の浦に引干いたる網の、一目にも見てしかばこそ戀しかりけれ。(かるらむイ)

○我が戀は一昨日見えず、昨日來ず、今日おとづれなくば、明日の徒然いかにせん。

○戀ひくして、たまさかに逢ひて、寝たる夜の夢はいかが見る。さしくきしと抱くとこそ見れ。

○擇食魚に牡蠣もがな、唯一つ。牡蠣も牡蠣、長門の入海の其の浦なるや、岩の岨につきたる牡蠣こそや、讀む書かく手も八十種好紫磨金色足らうたる男子は生め。

○伊勢の海に朝な夕なに海人のゐて、取上ぐなる鮑の貝の片思ひなる。

○我は思ひ人は退けひく、これやこの波高や荒磯の、鮑の貝の片思ひなる。

○東屋のつまとも終にならざりけるものゆるに、何とて胸を合せそめけむ。

○水馴木の水馴れ磯馴れて別れなば、戀しからんすらむものをや、睦れならひて。

○高砂の高かるべきは高からで、など比叡の山高々高と

高く見ゆらん。

○雨は降る、往ねとは宣ふ、笠はなし。蓑とても持たらぬ身に、ゆゝしかりける里の人かな、宿貸さず。

原本身ノ肩ニ無之トアリ。

○山伏の腰につけたる法螺貝の丁と落ち、ていとくだけて物を思ふ頃かな。

○賤の男が篠折りかけて干す衣、いかに干せばか乾ざらん乾ざらむ七日乾ざらむ。

○おほつかな、鳥だに啼かぬ奥山に、人こそ音すなれ、あな尊、修行者の通るなりけり。

○寝たる人打驚かす鼓かな。いかに打つ手の懈かるらんとをしや。

○近江とてせたとて来ればありもあらず、よしもなき粟本の淀とて来れば、山崎の橋へ来んけるは。

○東より昨日来れば妻も持たず、此の着たる紺の狩襦に女換へ給べ。

○須磨の關和田の岬をかい廻うたる来る夜船、牛窓かけて潮や引くらん。

かぬ。

○戀しとよ、君戀しとよゆかしとよ、逢はばや見ばや、見ばや見えばや。

○月も日もいかにうれしとおほすらむ、流るゝ星の位まされば。

○盃と鶉の喰ふ魚と女子は、法なきものぞいざ二人寝ん。

○夏草の繁みに食むは駒かとよ、鹿とこそ見め秋の野ならば。

○大江山生野の道の遠ければ、まだふみも見ず天の橋立。

○老の波磯額にぞよりにける。あはれ戀しき和歌の浦かな。

○さ夜ふけて鬼にんしこそ(ホノマ)歩くなれ、南無や歸依佛、なもや歸依法。

○法華經の薪の上に降る雪は摩訶曼陀羅の花とこそ見れ。

○南無阿彌陀ほとけの御手に懸くる絲の終り亂れぬ心と

○淀河の底の深きに、鮎の子の鶉といふ鳥に背中くはれて、きりくめくいとをしや。

○日暮れなば、岡の屋にこそ伏見なめ、あけて渡らん櫃河や櫃河、ひつがはの橋。

○お前より打上げ打下し越す波は、官まさりの重波ぞ立つ。

○此の殿によき筆柄のあるものを、手兒子の富をかき寄せる筆の軸のあるものを。

○我が君を何によそへむ、浦に住む龜山の岩かどに生ひたる松によそへむ。

原本岩かどノ下ニキノ宇アレド衍ナルメシ。

○立つものは、海に立つ波群雀、播磨のあかふ(ホノマ)が造れる腰刀、一夜宿世の徒名とか。

○いざ寝なむ、夜も明方になりけり。鐘も打つ、宵より寝たるだにも飽かぬ心をやいかにせむ。

○いかで我、播磨の守の童して飾磨に染むる褐の衣着む。

○山長が腰に差いたる葛鞭思はむ人の腰に差させむ。

○結ぶにはなにはの物の結ばれぬ、風の吹くには何か靡もがな。

○阿彌陀佛と申さぬ人は淵の石、劫は経れども浮ぶ世ぞなき。

此次に、いなりなる三つ群鳥といふ歌あり奥在之
次に住吉の南客殿同在奥。

此二首外御本に不被書云々
凡二句神歌百之内五十二首在之。神社哥等内稻荷一首住吉一首入之

神社歌 六十九首

石清水五首

○山鳩はいづくか埜、石清水八幡の宮の若松の枝。

○こゝにしも涌きて出でけむ石清水神の心を汲みて知らばや。

○石清水深き誓の流れには幾瀬の人か渡されぬらむ。

○石清水流れの水を遙々とのどかなる世にすむぞうれしき。

○石清水流れの末ぞ頼まるゝ心もゆかぬ水屑と思へば。

○若宮のおはせん世には、貴御前錦を延へて床と踏ません。

賀茂七首

- 千早振賀茂の社の姫小松、萬代までに色は變らじ。
- 千早振賀茂の川邊の藤波は、かけて忘るゝ時の間ぞなき。
- かくてのみ止むべきものか、千早振賀茂の社の萬代を經む。
- 人も皆桂かざして、千早振賀茂の御生にあふひなりけり。
- 御生ひき引連れてこそ千早振賀茂の川波立渡りけれ。
- 神山の麓をとむる御手洗の、岩打つ波や萬代の數。
- 千早振賀茂の社の木綿纒一日も君をかけぬ日ぞなき。

松尾二首

- 千早振松の尾山のかけ見れば、今日ぞ千とせの始なりける。
- 萬代を松の尾山のかけしけみ、君をぞ祈る常磐かきはと。

りしを。
○君が代は千代もすみなん稻荷山祈るしるしのあらん限りは。

春日十首

- 春日山雲居遙に遠けれど、かちよりぞ行く君を思へば。
- 珍しき今日の春日の八乙女を神もうれしとしのばざらめや。
- 今日祭る三笠の山の神まさば、天の下には君ぞ榮えん。
- 春日山神に祈れる言の葉は待つ程もなくたのもしきかな。
- 二葉よりたのもしきかな春日野の木高き松の種と思へば。
- 天の下のどけかれとや神葉を三笠の山にさしはじめむ。
- 君が代は限りもあらし三笠山、峰に朝日のささむ限りは。
- 君が代は萬代までにさしてけり、三笠の山の神の心に。
- 君が代はかねてぞしるき春日山二葉の松の神さぶるま

平野二首

○生ひ茂れ平野の山のあや杉よ、こき紫にたがはるべくも。

稻荷十首

- 千早振平野の松の色かへず、常磐に守る君が御代かな。
- 稻荷には禰宜も祝も神主もなきやらん、社こほれて神さびにけり。
- 稻荷をば三つの社と聞きしかど、今は五つの社なりけり。
- 稻荷なる三つ群鳥あはれなり、晝は陸れてよるは獨寝。
- 稻荷山社の數を人間はばつれなき人をみつと答へよ。
- 春霞立ちまじりつつ稻荷山こゆる思ひの人知れぬかな。
- 稻荷山三つの玉垣うちたたき、我が願言ぞ神も答へよ。
- 稻荷山行きかふ人は君が代を一つ心に祈りやはせぬ。
- 瀧の水かへりて澄まば稻荷山七日のほれるしと思はむ。
- 我といへば稻荷の神もつらきかな、人の爲とは思はざ

で。
○天の下久しき御代のしるしには三笠の山の神をぞさす。

大原野三首

- 大原や小鹽の山も今日こそは神代のことと思ひ知るらめ。
- 大原や小鹽の山の小松原、はや木高かれ千代のかけ見む。
- 千歳とぞ君が御代をば契るなる小鹽の山の峰の姫松。

住吉十首

- 住吉の松さへかはるものならば何か昔のしるしならまし。
- 音にのみ聞きわたりつる住吉の松をまうく今日見つるかな。
- 住吉の神はあはれと思ふらむ空しき舟をさして來つれば。
- 住吉の松の梢に神さびて縁に見ゆる朱の玉垣。
- 沖つ風吹きにけらしな住吉の松の下枝を洗ふ白波。

○住吉のお前の岸の光れるは海人の釣して歸るなりけり。

○住吉は南客殿中遣戸思ひかけがねはづしけぞなき。

○幾かへり波の白木綿かけつらむ神さびにける住吉の松。

○君が代は松吹く風の音高くなにはの事ん住吉の松。

○過ぎ來にし程をばすてつ今年より千代を數へむ住吉の松。

○住吉の一の鳥居に舞ふ宮仕は神は憑神、衣は狩衣しりけれも(本ノママ)

熊野二首

○紀の國や牟婁の郡におはします熊野兩所は結早玉。

○熊野出でて切目の山の榎のはし萬の人のうはきなりけり。

日吉二首

○願かくる比叡の社の木綿織くさのかきははとこ珍しき。

○明けき日吉の神も君が爲、山のかひある萬代や經む。

ぬ身を。

○賀茂春日八幡日吉のはうの神、稻荷松の尾廣田住吉。

○神ならばゆらさららと降り給へ、いかなる神か物恥はする。

○此の巫女は様かる巫女よ、單衣に尻をだにかがはで、ゆゝしうつきるたるこれを見給へ。

○奥山に柴引く音の聞ゆるは天稚彦のみす音そよく。

○打立つる鉦の鼓の初聲はまづ財主受納め給へ。

○近江なる千の松原千ながら君に千とせを譲るゆづる皆ゆづる。

○極樂は遙けき程と聞きしかど、勤めて至る所なりけり。

○阿耨多羅三藐三菩提の佛達、我が立つ杣に冥加あらせ給へ。

○いつしかと君に思ひし若菜をば法の爲にぞ今日は摘みつる。

此一帖不慮相傳秘本事也

正 韵 (花押)

吉田一首

○吉田野のきのねをわれかやまはやすとて(本ノママ)まうく見つる神樂丘かな。

貴布禰一首

○思ふことなる川上に跡垂れて、きぶねは人を渡すなりけり。

廣田一首

○廣田より戸田へ渡る船もがな、濱のみたけへことづけもせむ。

伊津岐島一首

○安藝の國沼田の郡に住む人は嚴島をば三島とや見る。

天露別一首

○清水に天露別のおはすれば、むべこそ神は天降るらめ。

木島一首

○大秦の薬師がもとへゆくまろを、しきりとどむる木の島の神。

○東には女はなきか男巫、さればや神の男には憑く。

○夕暮に濱行くまろを海人かとして魚乞ふ主、吾が釣もせ

右一冊以寂蓮手跡徹書記門弟正韵奥書判形有之本書寫

畢

第十二 梁塵祕抄口傳集

〔卷第十〕

梁塵秘抄口傳集卷第十

神樂。催馬樂。風俗。今様の事の起より始て。婆羅林只の今様。片下。早哥うたふべきやう。初積不審(積イ)。大曲。足柄。長哥を始として。

やうくの聲かはるやうの歌。田歌に至る迄しるしをはりぬ。かやうの事一様ならねば。後にぞしること多からむが。それをしらず。故事をしるし終りて。

九卷は撰び終りぬ。よむ歌には。髓腦打聞など云て。多くありけ也。今様にはいまださる事なければ。

俊頼が髓腦をまねびて是を撰ところ也。其かみ十餘歳の時より今に至る迄。今様を好みて怠る事なし。遅々たる春の日は。枝に開け庭にちる花を見。鶯のなき時鳥のか

梁塵秘抄口傳集卷第十
神樂催馬樂風俗今様の事起より始て
婆羅林只の今様片下早哥うたふべきやう
初積不審(積イ)大曲足柄長哥を始として
やうくの聲かはるやうの歌田歌に至る迄しるしをはりぬ
かやうの事一様ならねば後にぞしること多からむがそれをしらず
故事をしるし終りて九卷は撰び終りぬよむ歌には
髓腦打聞など云て多くありけ也今様にはいまださる事なければ
俊頼が髓腦をまねびて是を撰ところ也其かみ十餘歳の時より今に至る迄今様を好みて怠る事なし遅々たる春の日は
枝に開け庭にちる花を見鶯のなき時鳥のか

たらふ聲にも其心をえ。せうくたる秋夜。月をもてあそび。虫の聲々に哀れをそへ。夏は暑く冬は寒きを願みず。四季につけて折を嫌はず。晝はひねもすに歌ひ暮し。夜はよもすがら唄ひ明さぬ夜はなかりき。夜は明れど部

をあけずして。日出るを忘れ。日高くなるをしらず。其聲をやまず。大方夜晝をわかず。日を過し月を送りき。其間人あまた集めて。まひ遊びて歌ふ時もありき。四五人七八人男女ありて。今様ばかりなる時もあり。常にありし物を番におりて。我は夜晝相ぐして歌ひし時もあり。又我獨雜藝集をひろけて。四季の今様法文早哥に至る迄。書たる次第を歌ひ盡すをりもありき。聲をわする事三々度なり。二度は法の如く唄ひ

かはして聲の出づるまで歌ひ出したりき。あまりせめしかば。喉はれて。湯水通ひしもすぢなかりしかど。かまへて歌ひ出しき。或は七八九(五)十日。もしは百日の哥など始めて後。千日の哥も歌ひ通してき。晝はうたはぬ時もありしかど。よるは哥を歌ひ明さぬ夜はなかりき。資賢季兼など語らひよせてもき。かゞみのやまのあこ丸。とのもりつかさにてありしかば。常によびてき。神崎のかね女院に候しかば。まゐりたるには申て歌はせてきししを。あまりにては時々は是にてもいかで聞かではあらむするぞとて。夜ませにたばむとて給ひしかば。あの御かたへ参夜は。人をあけて。曉かへるをよび。我給はる夜は。未だあかきより取こめて歌はせて。聞習ひて歌ふ哥もありき。明方に返しやりても猶うたひしを。かねがつほね迎へたりしかば。明て後も猶鼓の音のたえぬさまに。いつのひまにかやすむらんとあたま申き。かくのことく好みて六十の春秋を過しにき。

久安元年八月廿二日待賢門院うせさせ給にしかば。火を打ちちて。闇の夜に向ひたる心地して。暮ふたがりて

ありしほどに。五十日過し程に。崇徳院の新院と申し時。ひとつ所にわがもとにあるべきやうに仰せられしかば。餘りまぢかくつゝましかりしか共。好みたちたりしかば。其後も同じやうに。夜毎に好み歌ひき。鳥羽殿にありし時。五十日計り歌ひあかしとよりて。東三條にて船にのりて。人々つどへて。四十餘日。日出る程迄夜毎に遊びき。如此好みしかど。さしたる師なかりしかど。資賢やかねなどがうたを聞とり。せうく習ひて歌ふもあり。又歌ひあひたるともがらの歌を。しらぬをば互にならひつゝ。なにとなく哥の數知たちては。足柄など今様も秘藏の歌を知むと思て。上手と聞てたよりを尋ねとりて聞しに。誠によく聞えし以後。常によびて歌はせき。足柄一二は習ひたりしかど。いと我に勝りて歌しり勝りたる事はなかりき。いちめほそ。九郎。藏人禪師。千手。二郎などやうの者。其數を聞し程に。家成卿のさ々なみ。五條が弟子と聞きて。彼中納言うせて後尋ねとりて。三月四月ばかりはおきて歌はせてありき。如此。聞かぬものもなくき。集めたるに。はつ聲を資賢もめでたき由申。

人々上手とのみ言合たりしかば、いかで聞むと思しかど。ゆかりもしらでありしに。二條院の御めのと坊門殿。ぐしてこむと契たりしに。新院にひとつ所を憚る由を聞きて。押小路京極の堂へ坊門殿ぐして来りしかば。夜もすがら歌はせてき。我も歌ひ。歌の事など互にとひなどして。夜明けしほどに。家成の中御門にありしかば返にき。かくの如き上達部殿上人はいはず。京の男女。所々のはしたものの雑仕。江口神崎のあそび。國々のくつ。上手はいはず。今様をうたふ者のき。および。われかつけて。歌はぬ者はすくなくやあらむ。或人申て云。さいのあこまろとてあをばかの者。哥あまたしりたる上手。此程のほりたりと申。朝方がもとにある由。式部少輔定正未だ六位なりし時申と聞きて。尋ねしかば。とゞめおきて。足柄。兩三。伊地古。舊川。舊古柳。少々習ひし程に。近衛院うせさせ給しかば。何となくてやみにき。其後鳥羽院かくれさせ給て。物騒しき事ありて。あさましき事いできて。今様沙汰もなかりしに。保元二年のとし。おとまへが哥を。としごろいかで聞むと思し物語をしに。夜もすがらひ歌て。返てのあしたに。業房。能盛。又數多ありけるに。さいのあこまつ哥さたしていひけるは。五條殿は年は老いくれたれど。聲も若く。よにめでたく歌はるれど。大は躰ホノマの足柄のやうを歌はでやあらん。目井が子にして暫く美濃にありしかど。とく京にゐにしかば。清經などがやうをこそ習ひたため。目井もまことの子供のやうには。よも教へざりけん物をといひしと。法住寺の御所にて能盛語りしを聞きて。乙前御申はらん事。たよりに候とて語りしは。監物清經尾張へ下りしに。美濃の國に宿りたりしに。十二三にでありし時。目井にぐして罷りたりしに。哥をきいて。めでたき聲哉。いかにまれ。末とをらむすることよとて。やがて相ぐして京へのほりて。目井やがて。ひとつ家にいとをしくして置たりしに。年頃のかかりには。これに哥を教へよと申しかば。ちかごとをたて。皆教へて候しが。このこくはくは如何にして知り候覽。かく申候にては我も申候はむ。とてあこまつが母は大進が姉に和哥と申候し也。それが申しは。四三にとく後れて。大曲の哥をばえ歌はざ

し出でたりしに。信西入道是を聞きて。尋ね候はむ。それが子我もとに候とて。木工允清仲をよびて。かの五條がりのいひやる返事に。左様の事もせて久しく成て皆忘れにたり。其うへに其さまいと見苦しく候とて来らず。たびくせめて後は。はしたなきさまになりしかば。すちなくて。正月十日餘り計りに参りたりき。遣戸の内に居てさし出づる事なし。人をのけて。高松殿の東向のつねにある所にて。うたのだむぎありて。我も歌ひてきかせ。あれがをも聞きて。曉あくるまでありて。其夜ちぎりて。其後よびよせて。つほねしておきて。足柄より始めて。大曲様。舊古柳。今様。物様。田歌等に至るまで未だしらぬをば習ひ。もと歌ひたる哥ふしたがふを一筋に改め習ひし程に。是彼や様々もしりにき。足柄。黒鳥子。伊地古などやうの大曲の秘藏の哥どもは。何れもいと替らねど。少々は替れる節もまじれり。舊川こそ。おとまへがやう。あこまつがには殊の外に替りたれ。延壽がはあこまつが同じさまなれど。それも末は替れる事多かり。九月に法住寺にして花を参らせし時。今様のだむぎあり

しに。土佐守盛實が甲斐へ具して罷りたりしに。習ひたりしところ。おや申候き。これホノマかりも。母にぐしてたびく。又た。もまうでき候しかど。上手ともしらで候きと申。さては四三がやうにてはあらぬにこそなどいふ沙汰あり。尙も小大進をめして。哥をも聞せおはしませかし。それぞ心にくき物は候と乙前申。扱めしにやられぬ。小大進。さいのあこまろ。延壽。たれかは。あこ丸がむすめなど参り合たり。法住寺の廣御所にして今様の會あり。小大進が足柄をきくに。我にたがはぬよし申。あこ丸がにはにすして。此京足柄ホノマといふ乙前がにたがはず人々。いづらあか丸がににたりけり。五條がにはたがはずなど云あひたり。釋迦のみよりは浮木の歌今はたうらいみろくとあぐる所など。露計りも御所の御様にたがはずと。其座に侍る。成親卿。資賢卿。親信卿。業房。季時。法師蓮淨。能盛。廣時。康頼。親盛。座の末には。廣時御哥もきかぬる中よりのほりたるが。かく露たがはぬ事の。物のすぢあはれなる事とて流涕するを。人々こ

れを笑ひながら。皆涙をおとす。あこ丸はらだちて。小大進がせなかを強く打て。よかむなるうた又歌はれよと云。皆人悪みあひたり。或人。さはにつるたかくと云古柳。いと人しらぬときく。いかうたへなどいふを。大進延壽ともにしり候はずと申。さいのあこ丸是を歌へり。或人。此古柳常のには替りたる所ありときくに。此はさもなきはいかに。四三が説に。此古柳。この説に違ひて歌はむは用ゐるべからずとこそ申傳へたるにと云へば。延壽おとくがうたひ候しは。おろく覺え候を。未だならひ候はずと申に。小大進あれをうけ給候はやと申。或人久しく歌はでひが事やあらんとて歌ふを。延壽。これこそおとく歌ひ候ひしには違ひ候はねと申。天台宗の哥の法花經八卷の所きかむと或人いへば。小大進歌ひて。又御様をうけ給候はやと申。或人歌ふ。かく歌はんと思ひ候が。聲の心に叶ひ候はぬに。このめでたさよとかむじ申。新にんしが哥のほどホノマか。行者の句に。小大進ことにめでたく歌ひて。又うけ給らむと申。或人又歌ふ。それもかく此句をばえ歌ひ候はぬものをと申を。季時。

めて。やうくの歌をつくしけるに。目井此様の舊川をいだしてけり。乙前やがてつけて歌ひけるを。清經。めでたきふし哉。常のふしにもにぬさまこそ。此様をば人々えつけられじものといひけるに。人々誠にしらざりけり。大進もしらざりければ。えつけでやみにけり。其後に大進目井乙前がある所にきて。かゝる舊川の様のこはびきのありけるを。我を隔て、知らせと恨みられて。すぢなくて。是は舊川のなかに。もがりぶねとて。かくうたふ様の有を。未だしらざりけるかとこそいひなしたりけれ。目井は四三より後までありて。此人々どもは。皆われらにこそは哥をばとひあひたりしか共。今ようなりては我には習はずといふと聞きて腹たちけり。四三が弟子なりけれど。目井進まざりければ。親しき者ども氣色にくしとてありけるを。此大進ことにかたらひて。いかならん事も隔てじとて。哥をも。目井。乙前。大々進とは三合せつゝありけるに。恨みられてすぢなくて。かくもがりぶねと云なしたりけると。乙前語り申しに。聞置たりしかど。何となくて忘れてありしに。東山の法住寺に。五月

小大進か目出たさふしの違はぬさま。又うけ給らんと申て。かくかむじ申よし。色代して譽めのしる。此小大進うたはする哥をば。ことにたくホノマに歌はせて聞し也。あこ丸すこし世おほえさがりて。人々そしる者ありき。餘りにしらぬ哥をもしりけにするあひだ。中々ばけ顯れにけるが。小大進が哥を。乙前むすめと二人御所の中にて聞きて。古への目井君が哥を聞くやうにこそ覺ゆれと感じ申き。其後小大進いよくなを揚てなんありし。其後乙前に或人とひて云。こと哥は。大曲の様はいと替らぬに。舊川むけににぬ。いかに。他人の此様に歌ふはひとりもなしとわぶ。乙前目井申候しは。何れの時などは申えず。人く集りて。やうくの哥談儀して。大曲皆つくして沙汰せし時。目井が舊川のやうを歌ひしをきゝて。敦家敦兼。又數多人々聞て。舊川は風俗の様にてこそ皆歌ひあひためれ。此は珍らしくてめでたきもの哉とて。兩三反歌はせて。此様常になし。秘藏して常には歌ふまじと。人くいひければ。此様をば後には歌はざりけり。修理太夫顯季ひつめにて。すの俣青墓の君ども。數多よび集

の花の頃。花参らすとて。江口神崎の君。青墓すの俣のものつどひてありしに。今様の談義ありて。様様の哥沙汰。少々は歌ひなどせし程に。小大進にとひて云。乙前が様には。何れも違はぬに。舊川こそかはりたれ。いかにととふ。大進申て云。よもかはり候はじ。いかにかはり候やらむ。承はり候はやと申。或人歌ひてきかするをきゝて。此様にばもがり舟が様とてこそ。大々進は教へ候しかと申。兼て聞しに思ひ合せて。興ありて覺え候き。その日。すの俣の式部は。蟲鳥の哥をよく歌ひて。本よりは世に覺えいできてありし程に。聽て京にて身まかりにしかば。よのはかなき哀れにてやみにき。清經目井を語らひて。相ぐして年頃すみ侍けり。哥のいみじさに志なくなりけれど。猶ありけるが。近くよるもわびしく覺えけれど。哥のいみじさに。えのかでありけるに。ねたるが。餘りむつかしくて。そらねをして後ろむきてねたり。せなかにめをたゝきしまつけのあたりしも恐ろしき迄なりしかど。それを念じて。青墓へゆく時は。聽て具てゆき。又むかへにいで具てかへりなどして。後に年お

いては。食物あてゝ。尼にてこそ。しぬる迄あつかひてありしか。近代このころの人志なからむに。京なりともゆかじかしとこそいひけれ。

この乙前は。とくいりこもりにければ。傳へたる弟子共のなかりけり。中納言家成卿の。さゝ浪に歌をしへよとて。家へやられければ。足柄。黒鳥こ。いちこ。舊川。ふるこ柳。田哥など教へたりしかど。餘り車たて乍ら。あまた歌を習ひ候しかば。たがふふしも候しかど。あながちにとほして教へむとも思候はで。殊になほす事も候はず。皆も教へ候はざりしかば。傳ふるには及び候はざりきと乙前申き。夫に合せて聞合せしに。ふりもにず。違ふふしも多かりき。此さゝなみは。船三郎が子にて。そのやうを習ひて歌ひければ。ふりはそのふりにてにぬにや。大方は哥なり。さしては教へたる弟子もなし。たうり。はつ聲。みな我弟子と人はしりて候へど。ひがことには。清經ぞ教へ侍しが。あやまりて目井にさもあらむ秘哥とくく教へよと。清經が申候しを。それはさらでありなむと。わが申候しかば。皆さ心得たりと目井申

ていきて見れば。娘にかき起されて向ひてゐたり。よはけにみえしかば。けちゑんの爲に法花經一卷讀て聞せて後。哥やきかむと思ふといひしかば。よろこびていそぎうなづく。

像法轉ては藥師の誓ぞたのもしき一たびみなをきく人は萬の病なしとぞいふ

二三反ばかり歌ひて聞せしを。常よりもめでいりて。これをうけ給はるぞ。命もいき候ぬらんと。てをすりてなくく喜びしありさま。哀れに覺えて歸りにき。其後仁和寺理趣三昧に参りて候し程に。二月十九日に。はやくかくれにし由を聞しかば。惜むべきよはひにはなけれど。年頃見馴しに。哀れさ限りなく。よのはかなさ。後れ先だつ此世の有様。今に始めぬ事なれど。思ひつゞけられて。多く歌習ひたる師なりしかば。やがて聞しより始めて。あしたには懺法をよみて六根を懺悔し。夕には阿彌陀經をよみて西方の九品往生を祈る事。五十日つとめ祈りき。一年が間。千部の法花經讀畢りて。次のとし二月十九日。やがて申あけて後に法花經一部をよみて後。歌

き。たうりはつ聲を餘りにあけられ。勢ためてぞ歌はせける夜は。餘りねぶたしとわびしがりて。たうりは外へたち出て。水に目を洗ひ。まつけをぬきなどしけれど。猶ねぶたがりてぞありける。餘り夜ごとに明して。夜あくれどしとみあけでうたひければ。乙前。世のつねならぬ事哉。夜明れば薨はあけ。くるればおろすこそ常の事にてはあれ。いまくしく又かしかましさよ。時々はさなき折もあれかしむつかしくなどいひければ。清經。などかく哥をば悪むぞ。若からん時こそ。かやうにてもあらめ。年老て口たつる人もなからむ折は。世たえせぬ物なれば。哥好ませ給上藤もおはしまして。哥の節の覺束なからんには。某こそしりたらめとて。尋ねくる人もあらんに。哥をしりてこそ。老の末には左様にてもあらめと申候しが。よく申候けると覺ゆと。我に哥教へ候し折。乙前申き。乙前八十四と云し。其病をしてありしかどいまだつきくしかりしに合せて。べちの事もなかりしかば。さりともと思ひし程に。程なく大事になりたる由告たりしに。近く家を造りておきたりしかば。ちかくに忍び

をこそ經よりもめでしかと思ひて。あれに習ひたりし今様。むねとある歌ひて後。曉かたに足柄十天黒鳥子伊地古舊川などうたひて。はてに長歌を歌ひて。後世の爲にとぶらひき。それをもしらで。さとにある女房丹波夢に見る様は。法住寺の廣御所にて。わが哥を歌ひけるを。五條あま。白きうすぎぬに足をつゝみて参りて。障子のうちにあるて。さし向ひて此御歌をきゝに参りたりとて。よにめで。われもめつけて哥ひて。足柄など常にも候はぬ。此ふしどものめでたさよとほめいりて。長哥を聞て。是はいかゝと覺束なく思候。けにめでたさよ。此を承り候へば。身も涼しく嬉しきと見て。兩三日ありて。かくみえ候つる由を。女房参りて申。さは聞きけるにや。しかくありし由を語りて。我と女房達も。あはれがりあひたりき。其後其日は必ず歌ひて後世をとぶらふなり。この乙前に十餘年が間に習ひとりてき。其かみこれかれを聞きとりて歌ひ集めたりし哥どもをも。一筋をとほさむために。皆此やうに違ひたるをば習ひ直して。残る事なく寫瓶し終りにき。年頃かばかり嗜み習ひたる事を。

誰にても傳へて。其流れなども。後にはいはればやと思へども。習ふ輩あれど。此をつぎつぐべき弟子のなきこそ。遺恨の事にてあれ。殿上人下臈に至る迄。相ぐして歌ふともがらは多かれど。此を同じ心に習ふものは。ひとりもなし。此中に信忠こそは。年頃弟子にてもあり。千日のうたにまじりたる者はあれ。大やうは習ひたる哥は數多ありしに。足柄をさほのあこ丸に習ひたりしかば。やがて大曲のやうは。それに習ふべき也とて。後は教へざりき。仲頼こそ千日の哥皆歌ひ通したるものはありしか。吾より先達にてありしうへに。同じやうに歌ひいでしかば。いと歌教ふる事はなかりしかど。年頃伴僧にてありしかば。聲なけれど。せめ歌などはあしくも聞えず。もしことばの聞えぬ事。末にきりむ事ホノマヤなどやなからん。貞清ぞ年頃伴僧してありしかど。ことの上手にて。さゝ浪が流れを受たりきと。よりくは常にぐして歌ひしかば。少々きとりて歌ふ事もありき。

中頃廣言康頼こそぐして歌ふものにてあれ。これらもとより哥歌ひしりたる哥も多かりしかど。上日の所にて。

ぎて。まだしき哥をもとく心えて。のどむる事なくて。歌ひ過ち多かり。娑羅林も。習ひたるまゝになだむる處なくて。上手のほどよりは煩はしくおさなき處を歌ふをりのあるぞなむにてある。たしなさすうははしりて物を習ふ故也。やうの歌も足柄なども。我にも多く習ひたり。たきの水。小大進。こひせホノマヤは。さいのあこ丸に習ひたるとこそいひしを。我に習ひたりといふとかや。節もすこししどけなき處ありし物を。今能野にて。廣言、康頼。わが足柄歌ひしにつけしを。哥うたひのひめうし資賢が側にて聞きて。この人共御やうをこそ歌ひあはるらめと思ふに。なに事をせらるゝやらん。この頃足柄のふりにてあるは。とこそいひけれ。ふりは似ずと思ひけるにこそ。此ひめうし。目井が弟子伊通伊實父子の愛物なり。清重これらより後に參りたれど。もとより上手なるうへに。哥をうるはしく歌ひて。いと違はず。人に教ふるをも聞きとり。常につけて歌ひてたがはず。娑羅林の今やうなど。殊によく歌ふ。過ちなきうたにこそ。親盛これまで歌ひ習ひたれば。いと違ひたる事なし。やうのうた

いとしもなきつしホノマヤやうの節などありしかば。ぐして歌ふに。聞きとりて直すもあり。又教ふる歌もあれば。おほやうはわがやどにてありて。皆人わが違はぬ弟子どもと思ひあひたれど。違へる事多かり。各々ふしはにするやうなれど。もとのふりにて。えそれをのかで。似ぬこと多かり。廣言はこは色あしからず。歌ひ過ちせず。節はうるせくにする處あり。心さとくきとる事もありて。いかさまにも。上手にてこそ。いたくけうらに歌はむとて。聲をなだめて節をもてなさず。あまり興あらむと。此頃節のしりかしらはねたるを。けふこのみ歌ふぞ。今に至らぬと覺ゆる。ふしはうるせくにせたるも。其振により違ふ也。いと我に習はぬ哥をも。わがやうくといひて。表に心に任せて歌ふぞ。なからむ跡にわが名やをらんすらんと覺ゆる。康頼。聲に於てはめでたき聲なり。細くけうらなるうへに。人うてせずいきつよし。聲をのどにおとしするて。そこにつかひて。しづみにし(つ)む事ぞなきは。つかひがら也。さとくもあり。娑羅林。早歌など。辨へ歌ふこと。心えたる上手なるが。歌の程より心がす

などしらぬ多かりと。よりにて是ら三四人ぐして習ひしかば。いと違はねど。各ふりは似ぬ所々あり。相ぐしては違はねど。各違へることふりは多かり。爲保こそ哥數は習ひたりしかど。聲の弱くていと能も聞えぬは。とく習ひすさびて。はひまうして。足柄とうは。おとまへがもとに。むろまちとて有し内々習ひき。それも我やうにざりけりとして習はざりき。爲保こそ。善惡しらすわがやう通し習ひたる者にてはあれ。それにとりて足柄のふりなどあしくもなかりき。やうの歌いをつくさねど歌ひたりき。今やうぞしらぬ多かれど。他人にいと習ふ哥はなし。

能盛わざとなかりしかど、ホノマヤ明暮ありて歌ひあつめたるものゝやうは。數多知りたるにや。こやなぎなどは。よく歌ひたるもあり。今様も習ひあるはしりたれど。聲ぞいとしなはぬやうに歌ひ靜めても覺えねど。いとふしは違はず。此らもこと人に哥はならず。業房同じやうに習ひて歌ひしに。こゑ色よくてあしからず。今様神哥などは。上手にもいとをとらず聞ゆ。娑羅林のうたなどは。

よく習ひたりき。物のやうぞ。つけて聞きとりては歌ひしかども。いとしらざりし。

知康。昨日今日の者にてあれ共。聲あしからぬうへに。おもなく歌ふほどに。習ひたる程よりは上手めかしき處ありて。あしくもなし。實教も未だまだしかりしかど。哥の會にいりにしかば憚りなし。未だ至らぬ程よりは。拍子などはたがへず。

雅實。大やうもとうたひしかど。娑羅林。早歌。高砂。雙六など様の哥は。我にも習ひたりき。歌ふにふしいとたぢろかず。すこし聲の弱かりしもよくなりて。しかも重代也。さに及ばず。定能。聲むけに不足にてあるべくもなかりしかど。をめから(すか)して。殊の外に聲つかひ心えて。ふりなどはたしかに忘れず。まへはらふほどにはあり。

花山院中納言兼雅。もと歌は殊の外にさたしけにもあり。哥數うたひけなりき。定能。雅資。實教など。蓮花王院にありし時。習ひあひたりしにぐして。今様早哥など少々は習はれき。足柄貳三首ばかりぞ習はれたりし。

れらるてきありて聞きとられなむするは。獨あらん時にさらば教へむと云しを。残りともまりて習はむといたく云しかば。おと前にいたくいふはいかにと語りしを。ささば教へさせ給へかし。さ様にいみじがり申さば。さやうのれうにてこそ候へと。おとまへ申しかば。よるく二三夜計りにぞ教へたりし。にせぬ所もかたはらいたく覺えて。えなほさで。われよくなる迄歌ひてぞ教へし。其後暇乞しに。とめてありしを。よび返して歌はせて聞きしに。神妙也といはれて。

次第聲聞いかばかりよろこび身よりもあまるらん我らは來世の佛ぞとたしかにきつるけふなればと歌ひたりしかば。感にたへずして。唐綾のそめつけなる二きぬを。纏頭にしてき。折節につけては。けうがりておほえき。かやうに男女此彼我に歌を習ふ者其數ありしといへど。皆このみさしつゝ。しうならふ者なくて。あひつぐ者なし。年頃好みたる事に。たしかに傳へたる弟子のなき。くちおしき事也。

我永曆元年十月十七日より。精進を始めて。法印覺讚

この兼雅卿。今様合の時に。足柄のなかにするがの國歌はれしを。おと前が娘きして。此は御所よりたまはられたると覺ゆるふしのあるは。習ひまるらせたるやらむといひける。こと歌よりつけて度く歌はれたりしを。かく申せば。のどかにてつけてふりのにるべきとこそ覺えしか。

五月はなのころ。江口。神崎の君。美濃のくづつ集りて。花參らせし事ありき。哥さたありしに。延壽。こひせはと申足柄を未だ歌はぬとて。御所に習ひ參らせたまきをえ申いでぬと。此彼にきかれ候といふに。聞きしかども聞きいれぬやうにはありし程に。季時入道して申出したり。いかでさる事はあらむするぞ。さかさまごとにてぞあらむ。我ためは名聞にてこそあれと。かたはらいたし。さいのあこ丸歌ふめるは。それにならへかして返事にいふ。延壽又申やう。いかさまにも習ひ參らせて候はむこそ。此世の喜びにては候はめ。あこ丸は大進も小大進も。皆しり候はぬを。誰に習ひたるぞと覺束なく候。又これらもさ申せば。かたかたにと申せば。後にこそ。こ

を先達にして。廿三日進發しき。廿五日むまやどの宿に。爲保左衛門尉にてありしに。それがぐしたりし先達の遊女に。此度參らせ給はうれしけれど。ふる哥をたばぬこそ口おしけれと。見たる由を申。元より王子にてはする事をばすなるに。御哥などはあるべき物をなどいふ者有しかど。餘り下らうがちにて。けんそにやなど云者もありて。有しほどに。かく夢の事を聞きて。さうなく歌はんとて。馬やどを夜深くたちて。長おかの王子によのうちに參りぬ。あひぐしたりしかば。太政大臣清盛大貳と申しおりなるべし。參りあひてありしに。此夢をいひあはせしかば。さる事候は。さにこそ候なれ。さにをよび候はぬよしを返事に申して。心のうちいたくさふ人など數多ありて。いかゞと思ひける程に。きとねいりたりけるに。束帶したるこせむぐして。唐車にのりたるもの。御幸のなるやらむとおほしくて。王子の御前にたてたり。此歌を聞くにかと思ひて。きと驚きたるに。今様を或人いだしたりけり。其歌にいはいく。

熊野の權現はなぐさのはまにぞおり給ふわかうらに

しましませばとしはゆけども若王子

これを驚きて。資賢卿に語りて。あざまれける夢に思ひ合せられて。人々けんてうなる由を申あひたりき。霜月廿五日奉幣して。經供養御神樂などをはりて。禮殿にて。我音頭にて古柳より始めて。今様ものゝ様に。數をつくすはさまに。やうやうのことびわ。まひ。さるがうをつくす。初度事也。

應保二年正月廿一日より精進を始めて。同廿七日たつ。二月九日日本宮奉幣をす。三御山に三日づゝ籠りて。其あひだ千手經千卷を轉讀し奉りき。同月十二日新宮に参りて奉幣す。其次第常の如し。夜ふけて又のほりて。宮めぐりの後。禮殿にして通夜千手經を讀奉る。暫しは人ありしかど。片隅にねぶりなどして。前には人も見えず。通家ぞ經まくとてねぶるたる。やうくの奉幣などしづまりて。夜中ばかり過ぬらんかすと覺えしに。寶殿の方を見やれば。わづかの火の光に。御正體の鏡所々輝きて見ゆ。あはれに心すみて。泪もとゞまらず。なくく讀るたるほどに。資賢つやはして。曉方に禮殿へ参りた

て。そばそばに成親。親信。業房。能盛。まへのかたに康頼。親盛。資行ねあひたり。こなたは暗くてさいとうの火に御正體の鏡十二所。各光りをかゝやきて。應化の姿うつるらんと見ゆ。此彼の奉幣の聲。やうやうに聞ゆ。ほうらくのものゝ心經。もし千手法花經。心々にかはるにつけてたふとし。其まぎれに長哥より始めて。古柳さがりふちを歌ふ。次に十二所の心の今様。其後婆羅林。つねの今様。片下。早歌。ふしあるを盡す。神歌など果て。大曲のやうになりて。足柄。黒鳥子。舊川はて。いちこを歌ふ。曉がたに皆人しづまりて。人音せで。心すまして。此いちこをことに歌ひしほどに。兩所にしの御前の方に。えもいはぬさかうの數。成親。こはいかなる事ぞ。これはかくやと親信にいふ。皆其さの人怪みをなす程に。又寶殿なりて聞ゆ。又成親驚きて是はいかにと申。われよう^{ホノマ}にんのかけおほいしたるに。雞のねたるが音にこそといふ。しばしありてかうばしさみちにほへり。さてみすをかゝけて。人の人らむやうに。みすはたらきて。かゝりたる御正體の鏡どもなりあひて。皆ゆるき

り。今様あらばや。只今面白かりなにかすとすゝむれば。かたまりてゐるすちなくて。みづからいだす。

よろづの佛の願よりも千手のちかひぞたのもしきかれたる草木もたちまちに花咲みなるとい給ふ

押返しゝたびく歌ふ。資賢。通家つけてうたふ。心すましてありし。けにや常よりもめでたく面白かりき。覺讚法印宮めぐりはて。御前なる松木のもとにつやしてゐたりけるに。其松の木の上に。心とけたるたゞいまかなと歌ふ聲のしければ。夢現ともなくかく聞きあざみて。禮殿に参りて急ぎ語る。一心に心すましつるには。かゝる事もあるにや。夜明るまでには。うたひあかしてき。これ第二たびなり。

仁安四年正月九日より精進を始めて。同十四日進發。廿六日奉幣也。今度第十二度に當りて。出家のいとまを申に参る。毎度に王子のいま様。禮殿の遊び度くありき。此姿にては今度計りにてこそあらむすれば。我獨り兩所の御前にて。なかとこにねぬ。さいとうの火の光りあらで。つるたて障子を少し隔てたれども。なきやうに

て久し。其時驚きてさりぬ。寅の時なるべし。

同じとらの二月七八日頃。大雪降りたりし日。さまをかへむいとま申に。賀茂へ参りき。まづ下の社に参りてみるに。面白き事限りなし。おまへの梅の木に雪ふりかゝりて。何れを梅とわきがたく。あけの玉垣まで皆白妙に見えわたりて。たぐひなく覺ゆ。次第の事みかぐら果て。其後法花經一部。千手經一卷を轉讀し奉り。終りて後に成親卿平調に笛をならす。催馬樂を資賢卿いだす。青柳。更衣。いかにせんなり。其後われ今様をいだす。はるのはじめの梅の花よろこびひらけてみなるとか資賢第三句をいだしはいはく。

みたらしがはのうす氷心とけたるたゞいまかな。

と歌ふ。をりにあひめでたかりき。敦家内裏にてこのくを。前のながれのみかは水と歌ひけるもかくやありけむ。われ感じおくりにき。

松の木かけにたちよればちとせのみどりぞ身にしめるむめがえかざしにさしつれば春の雪こそふりかゝれと。この哥卅反ばかりありけり。其後同じ人神哥をいだ

す。

ちはやふる神々にをしますものならばあはれにおほしめせ神もむかしは人ぞかし

其後足柄四首。あまのとうさい二反。關神。瀧水。黒鳥子。伊地古。舊河これら也。此歌ども。をりからにや。常よりも面白き事かぎりなし。其座に。權中納言成親。源宰相資賢。三位中將兼雅。中將宗盛。少將通家。右馬頭親信。これら也。今様始りける程に。東の寶殿のみ戸あく音しけり。参り集ひたる男女。御幸には。をとのひらきのあるかと思ける程に。寶殿の中よりびはの聲歌につけらるゝかと聞人怪みけり。後にかもの者共さたすと。資賢かたりしにぞきし。熊野のやうにわれらはきかず。

あきの嚴島へ。建春門院に相ぐして参る事ありき。彌生の十六日京を出て。同じ月廿六日参りつけり。寶殿のさま。廻廊長くつゞきたるに。汐さしては廻廊の下まで水たへ。入海のむかへに浪白く立ちて流れたる。むかへの山を見れば。木木皆青みわたりて緑なり。山にた

き。太政入道。此御神はごせを申をよろこばせ給よし申されしかば。さらぬだに現世の事いと申さぬ上に。さありしかば。後世を申をいひいでたりしなり。

我八幡に参りて。十ヶ日籠りて。千部經を始めてよみしに。九月廿日より籠りたりしに。廿五六日のほど經はて。今様を御前にしてよもすがら歌ひき。夜中に及ぶ程に。足つゝみたる女の。中門のもとに。親盛るたる所によりて。後ろをひく。申けむに。何わざいふとて聞きいれず。又よりて度々になるをり。見かへりてみれば。勸學院のくりやめ也。しかいふ事をきけば。夢にこのはしがくしの柱のもとに。うつくしきちごの十二三計りなるが。うらうへに。獨りはうすあをの狩衣におりたるわきあけを着給ひたるが。白馬にたてまつり。今ひとり白きうすものと覺しきに。したはこむはいに見ゆるをめして。ぶちなる馬にのりて。うらうへに立給ひて。この御哥をきかせ給ふと覺しく見え候て。うち驚て候へば。

みねのあらしのはけしさにきくの木の葉もちりはてゝこの哥の盛りにおはしますに。右の後ろをむけてるさせ

めるがむせきの石。水ぎはに白くしてそばだてたり。白き浪時く打かくる。めでたき事限りなし。思ひしよりも面白く見ゆ。其國の内侍貳人くろ釋迦なり。からそうぞくをしかみをあけて舞をせり。五常樂こまほこをまふ。ぎがくのほさつの袖ふりけむも。かくやありけんと覺えてめでたかりき。公卿。殿上人。樂人。太政入道。そのとも人。未だ座を立たぬほどに。まさしきみことて。年よれる女をぐして人來れり。我に向ひてぬ。いふやうわれに申ことは必ず叶ふべし。後世の事を申こそあはれに思しめせ。今様をきかばやといふ。餘りはれにしてしかもひるなり。いだすべき様もなくあるに。猶度くいへば。資賢をよびて。これうたへといふ。かたまりてるたり。なほきかむといへば。すちなくていだす。

次第聲聞いかばかりよろこび身よりもあまるらん我らは後世の佛ぞとたしかにきつるけふなれば

いだして。これつけよといへど。すけかたあらで。つくることなくて二反終りにき。心に後世の事他念なく申し事をいひ出たりしかば。しむおこりて。泪おさへ難かり

給たる。そとつけ申よしをおこしに來るなりと申けり。

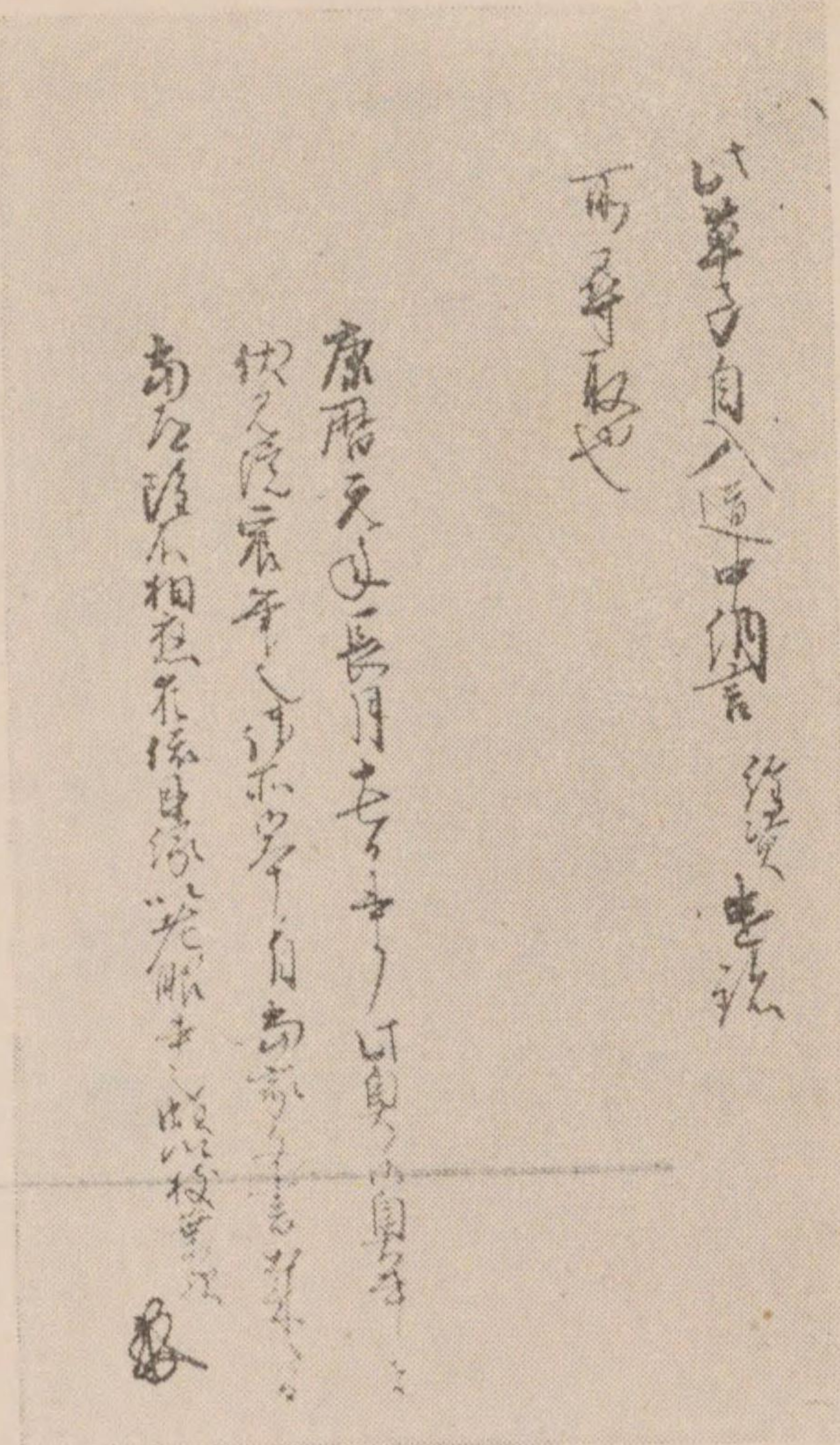
この女夢の中に。若宮のこの哥を聞かせおはしますと覺えし由を申。さて次の若宮に参りて。今様の會終夜ありて後。亂舞。猿樂。白拍子。品くしつくしき。治承二年九月廿四日の事なるべし。

神社に参りて今様歌ひて。示現を蒙ること度々になる。いちく此事を思ふに。聲足らずしてたへなる事なければ。神感あるべき由をぞむせず。たへ年頃たしなみ習ひたりし功の致す所か。又ことに信をいたして歌へる信力の故か。おほよそ今様を好む事四十餘年の功を致す。かくの如くこう入たるもの。古きものもすくなくやあらん。しかはこのめど聲こはくたゝずして。其えたらぬでうそのうらみふかしといへど力及ばず。此この故には。あさましき不足の聲なれど。楽しくめで度おひつくべくもなき聲にあひても。又女のせめて及ばぬにも。やうくせめあひたるにいと聲及ばずすてらるゝ事は覺えず。たかくかりたるもさがりて。つかひにくき調子なれど。歌ひにくしとおほゆることばなきぞ。この功の致す所には覺ゆ

る。此今様けふあるひとつにあらす。心をいたして神社
 佛寺參て歌ふに。示現を蒙り。望む事叶はずといふこと
 なし。つかさを望み。いのちをのべ。病をたち所にやめ
 ずといふ事なし。敦家聲めでたくて。みたけにめしと
 められて御眷屬となり。目井は監物清經病に煩ひて限り
 なりけるに。さうほふてんじてはやくしの誓ぞと歌ひて。
 たち所に病をやめ。ちかくは左衛門督通季おこり心地に
 わづらひて。しホノマこらかしてありけるに。ゆめくいか
 にもそしりなきに。兩度歌ひてあせあへてやみにけり。
 くびにそ出て。今はかぎりにて。くすしもすてたるもの。
 うづまきに籠りて今様を他念なく歌ひて。忽ちにそつづ
 れてやみ。また目しるたる者。宮しろに籠りて哥を歌ひ
 て百餘日。目あきて出にけり。これならず。あそびとね。
 くらがいくさにあひて。臨終のきざめに。今は西方極樂
 のと歌ひて往生し。高砂の四郎君。聖徳太子の哥を歌ひ
 て。そくわいとけにき。此今様をたしなみ習ひて。祕
 藏の心ふかし。定めて輪廻業たらむか。我身五十餘年を
 すごし。夢のごとくまほろしの如し。既になかばは過に

たり今はよろづを投捨て。往生極樂を望まんと思ふ。
 たとひ又今様を歌ふとも。などか蓮臺の迎へにあづから
 ざらん。其故は。あそびのたぐひ。舟にのりて波の上に
 泛び。流にさををさし。きものをかたり色を好みて。人
 のあひ念を好み。哥を歌ひてもよくきかれんと思ふによ
 り。外に他念なくて罪に沈みて。菩提の岸に至らむ事を
 しらす。それだに一念の心起しつれば往生しにけり。ま
 して我等はとこそ覺ゆれ。法文の哥聖教の文に離れたる
 事なし。
 法花經八卷が軸々光をはなちく。廿八品の一一の文
 字金色の佛にまします。せぞくもんじの功ひるがへして。
 讚佛乘のいんなどか轉法輪にならざらん。
 大方詩を作り。和歌をよみ。手をかくともがらは。か
 きとめつれば。末のよ迄もくつる事なし。聲わざの悲し
 き事は。我身かくれぬる後とまる事のなき也。其故に。
 なからんあとに人見よとて。未だ世になき今様の口傳を
 つくりおく所なり。
 嘉應元年三月中旬のころこれらをしるしをはりぬ。

やうくえらびしかば。初けんほどはおほえず。



い草子自入道中
 藤原文子
 藤原文子
 藤原文子

太政大臣師長。琵琶の譜につくらんとて
 ありしほどに。後には習ひて。大曲のやう
 は皆歌はれにき。今様もむねとのうた。娑
 羅林。片下早哥の様あるは歌はれき。此二
 人がやうぞ。ふりいとたがはぬにて有べ
 き。是に同じからんをばよく習へりと思ひ。
 違はむをば疑ひをなすべし。我もくわが
 やうといふもの多からむすらむ。たうじだ
 に我やうとて。もろくのひがぶりをいふ
 めれば。ましてなからんあととはと覺えてこ
 そ。

左兵衛佐源資時。承二年三月廿三日。瀧尻宿よりはじめ
 て。二年が間に。今様。娑羅林。片下哥。早哥。足柄。
 黒鳥子。舊河。伊地古。舊古柳。權現。御幣等。物様。
 田哥に至る迄。皆習ひて寫瓶し終りぬ。熊野の道より起
 る。としごろつぐものなしと思ひしに。權現の御計らひ
 か。家重代なり。他人にことなり。傳へたらんに。其道
 なるか。

此本ハ妙音院入道殿御本歟。而法性寺禪定殿下御邊
 年來御日記ニ相具テ被ニ取置ニ之由。傳承者也。而二
 條中將經定朝臣預置之間。彼羽林又依レ爲ニ雅曲之弟
 子。蜜々借寄テ書ニ寫ニ之也。
 寛元四年八月廿一日送給之。同廿二日書寫也。

此章子自入道中納言經資遺跡之所尋取也。

康曆元年長月十七日書了。此奧之御奧書者。伏見院宸筆也。御所御本。自當家文書出來之間。當道雖不相應。猶依因緣。以老眼書之。頗以枝葉歟。

花押

梁塵祕抄口傳集 卷第十終

第十三 唯心房集

十重禁戒

不殺生

わたつみのふかきにしづむあさりせで

たもつかひあるのりをもとめよ

不偷盜

うきくさのひとはなりともいそがくれ

おもひなかけそおきつしらなみ

不邪淫

さらぬだにおもきがうへにさよごころも

わがつまならぬつまなかさねそ

不妄語

のちのよはくもりもあらじますかゞみ

みたるを見ずといひかくすとも

不酤酒

はなのもと露のなさはほどもあらじ

ゑひなすゝめそはるの山かぜ

不説四衆過

こりねと身をもやくほむらかな

餓鬼

ちらさじとちぐさのいろをしむまに

露もえがたき身とぞなりける

畜生

なくしかもゆるほたるもあはれなり

なにをなにとかおもひしるらん

修羅

ひとをのみうらみそねみしむくいには

くるしきうみのそこにこそすめ

人

たれもみなつねなきよをばいとほなむ

心あるをぞ人といふなる

天

身をかざるはなのかつらもおとろへて

つゆきえはつるをはりかなしな

聲

うづみ火のあとかたもなくきえはてゝ

つのかくにのなにも身をつまば

人のあしかるとがもいはれじ

不自讃毀他

もがみ川人をくたせばいなぶねの

かへりてしづむものところきけ

不慳貧

わがみだにぬしなきゆめのうちなれば

それよりほかをなにかをしまむ

不瞋恚

のりにくる人はありともはるごまの

おのれはあれすしなへとぞおもふ

不謗三寶

とくのりにちぎりをむすぶえだくの

人まであたにいはいはしろのまつ

十法界

地獄

こゝろからおのがつみおくだきゝもて

われひとりやははひかくるべき

縁覺

はるのはなあきのこのはおつるにも

はかなきよをぞおもひしりける

菩薩

ほとりなきちかひのうみにおくあみの

みちひくうちにたれかもあるべき

佛界

ながきよをいかにあはれとてらすらん

むなしきそらにすめる月かけ

十如是

相

すがたなきものなりながらさまぐに

おもふこゝろぞいろに見えける

性

みさびるるこゝろのみづのそきよみ

いつかすまして月をうつさむ

躰

こころをばむなしきそらとしりぬれば

すがたもくものありくなりけり

力

かひなしやのりのたからをつみながら

うきよにめぐるちからくるまよ

作

たちまじるよのいとなみをひきかづく

ころものうらにたまもかけなむ

因

にこりにもしまぬはちすのたねもみな

こころのうちにあるとこそきけ

縁

いつとなくなみにたゞよふうきふねは

さかふかぜにぞまかせたりける

果

ほにいづるあきのするにぞをやまだの

さまざままきしたねもみえける

報

あさゆふにかゝる露しもむすひおきて

この身のはてはいかゝなるべき

本末究竟等

をざゝはらあるかなきかのひとふしに

もともすゑはもかはらさりけり

今様

やなぎさくらを

こきませて

はなのみやこぞ

にしきなる

おほみやびとは

いとまあれや

けふもかざして

くれにけり

たちうきはなの

もとなれば

かへることこそ

わすれぬれ

尊のまへには

なさけあり

ゑひをすゝむる

はるのかぜ

蘭省にはなの

にほふとき

にしきの長をぞ

おもひやる

香爐峯の

よるのあめに

くさのいほりは

しづかにて

無常のあらしに

さそはるゝ

此のよの榮花に

よそふれば

あたるものぞと

おもひこし

みねのさくらは

のどかなり

かはかぬたもとに

かけやどす

月やそのよの

月にあらぬ

はるもむかしの

はるぞかし

やどもわがみも

それながら

いけのすゝしき

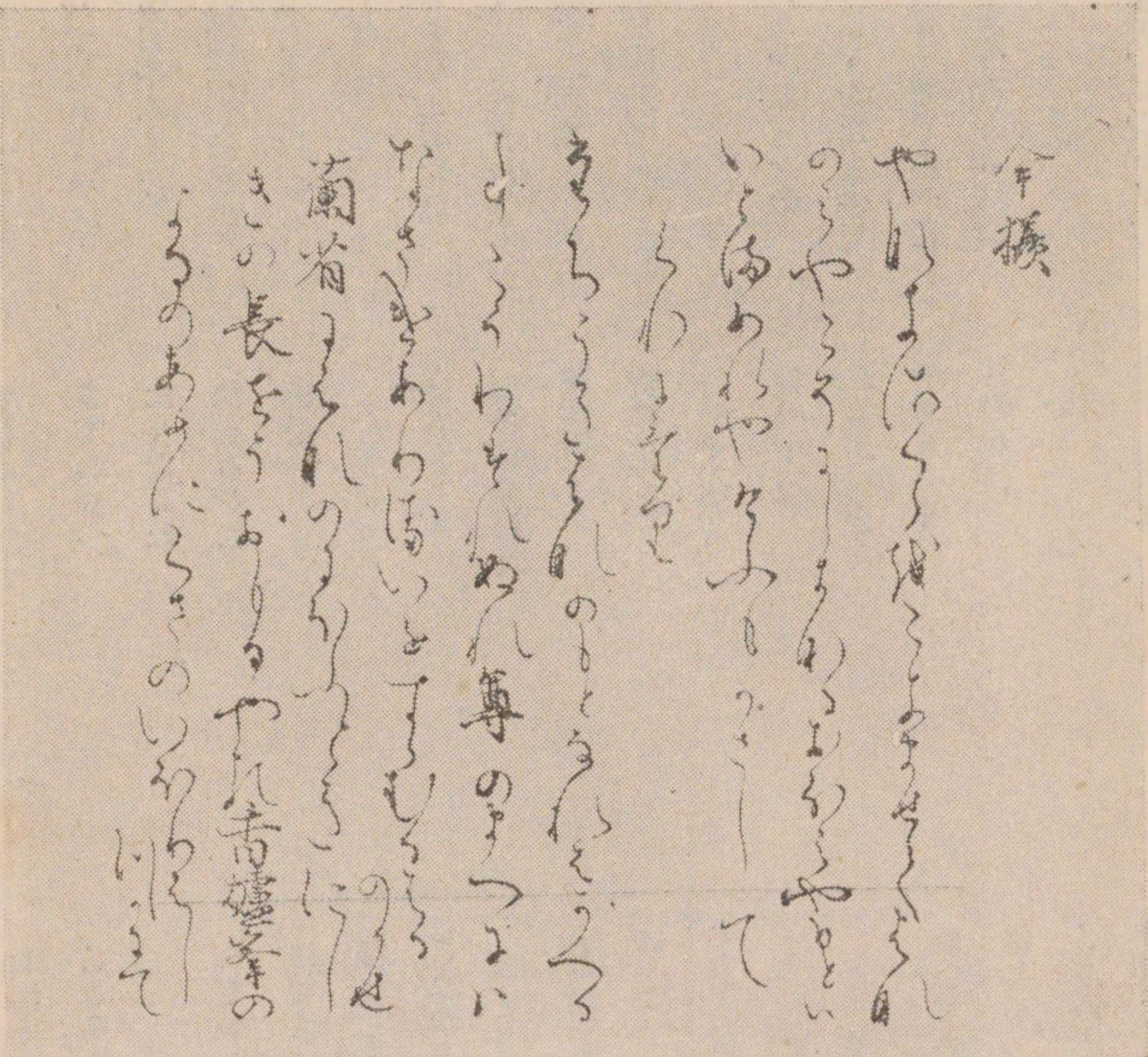
みぎにはは

なつのかけこそ

なかりけれ

こだかきまつを

ふくかぜの



こゑもあきとぞ

きこゆなる

月すむあきをば

さておきつ

さ月やみこそ

たゞならね

はなたちばなの

かをるかに

なごりおほかる

郭公

はなのなかには

はちすこそ

くどくのとねより

おひいでたれ

經には妙法

蓮花經

佛は眼若

青蓮花

あるかなきかの

世の中を

なにゝかたとへて

おもふべき

いはもるしみづに

やどりつゝ

むすべどとられぬ

月のかけ

あきのはつかぜ

たちぬれば

ことしもなかばに

なりにけり

おほくの年月

なにをして

ことぞともなく

すぐすらむ

ちぐさにほへる

あきの野の

はなはいづれも

身にぞしむ

むなしきいろぞと

おもはねば

これゆゑ生死に

かへるなる

十二廻の

なかにては

月はこよひぞ

すぐれたる

千里や萬里の

いへごとに

おのゝひかりを

あらそひて

おいて香山に

しむるとき

はじめてすみかを

あきのよの

こゝろありける

くまもなし

月のかけかな

またゝくともし火

ほのかにて

しづかにまどうつ

あめのこゑ

冬のけしきに

なりぬれば

おほはらやまこそ

あはれなれ

まきのすみやく

すみがまに

ゆきまをわけつゝ

けぶりたち

ひとりはみまうき

あたらよの

月とゆきとをと

おもへども

あはれしるべき

ひともなき

しばのいほこそ

かひなけれ

しづかにねざめて

つくゞと

はかなきこのよを

おもふまに

よやあけがたに

なりぬらん

かものかはらに

千どりなく

あれたるすみかを

きてみれば

まがきにうつして

きみがうゑし

ひとむらすゝき

むしのねの

しけきのべとぞ

なりにける

よもにこのはは

ちりまがひ

ゆふべのこがらし

みにしめど

おもふことなき

人にては

あきのあはれも

しらじかし

までどもく

きみはこで

さよもなかばに

すぎにけり

萩の葉そよめく

風のおとは

來ぬ人よりも

うらめしや

ひとり物おもふ

あきのよは

まんゝとしてぞ

あけがたき

月のかけこそ
みれどもあかぬ
はる夏あきふゆ
みやもわらやも

おもはぬたびの
みやこはくもるに
きみとながめし
ひとりみるこそ

王昭君こそ
月はみしよの
漢宮萬里思へば
胡笳ひとこゑ

楊貴妃かへりて
おもひしおもひも
李夫人さりにし

唐帝の
かくやあらん
漢王の

りんゑのつなとは
これをさとりに
大じ大ひの

人界くるしび
あいべちりくこそ
ひとよのわかれも
生所はるかに

あかずとながむる
しほみてのちには
西施がかたちを
おいなば隣の

女人は三従
おやにはじめは
さかりはをとこに
おいのすゑには

なげくなけきも

なにならず

さてもそのよは
我やゆきけむ
ゆめかうつゝか
おもへどく

むかしはさばかり
かたみにそでを
すゑのまつ山
さもあらぬなみをば

ころもはたきもの
かたちはさまぐ
おもはぬときには
いろもにほひも

ひとにおもひを

つくるこそ

三けう四見の
五さうありとて
女人へだてぬ
我らがためには

翠帳紅圍
萬事の禮法
浮生ゆめぢを
ふねのうちにて

蓬萊洞の
長秋宮の
つねにすむべき
はちすのうてなを

うきよはいまも
おもふものから
なにひかると

むしろには

さまぐに
ことなれど
すぐるほど
たりぬべし

はなのまへ
月のもと
ところかは
ねがふべし

そむきなむと
あけてくれ
なけれども

心なくてぞ
あけぬくれぬと
わがみははかなく
かゝみのかげに
みればなみだも

このよはなけかじ
とてもかくても
三つのきこりに
後生たすかる
道のがな

きのふはさかゆと
けふはかなしび
にんけんおもへば
天にも五するぞ
まのがれぬ

風にふかれて
おほぞらに
おほぞらに
おほぞらに

あしたのどこを
まくらさだむる
八萬四千のおもひ
それみな三つの
業ぞかし

ほとけは三有の
衆生みなこれ
大じ大ひの
心といらぬぞ
あはれなる

衆生のまどひの
ちひろのうみにぞ
みだのちかひの
われらのうかばむ
時ぞなき

こゝろをすまして
なもあみだぶつと
ひとたびも
いふひとは

あつまる ホノマ、
わかれてのちに
このよのなこそ

無常おもはぬ
あはれはかなき
ゆきのやまなる
けふかあすかと
なくとかや

あるにはかなき
まがきのあさがほ
いなづまかけろふ
ゆめよまほろし
ひとのいのち

よはひ顔駟に
三代までこそ
仙鸞むかしの
われもうたひて
さりぬべし

はちすのうてなに
かならずほとけの
やどりてぞ
みともなる

聖徳太子は
大慈方便
わがくに佛法
はじめて妙法
ときたまふ

弘經の居士は
天台智者こそ
前代未聞の
いかでちぎりを
むすばまく

きくにたうとき
靈鷲鷄足
文珠のいますなる
眞言ひろまる
やまの名は
天台山
清涼山
高野のやま

真如の妙理を

たづぬれば

ころもおよばず

またことばも

たえにけりこれは

唯佛與佛の

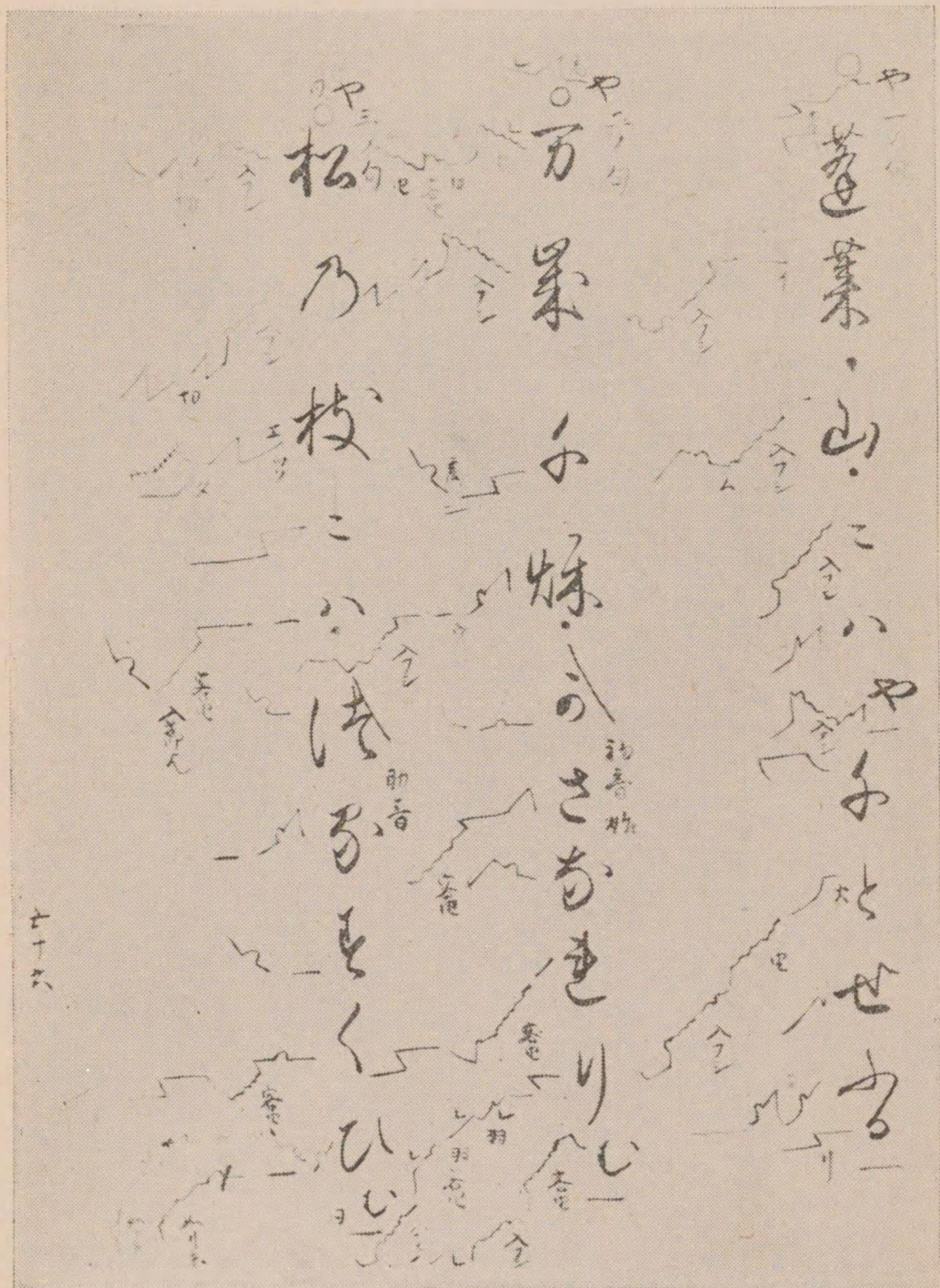
きはめつくせる

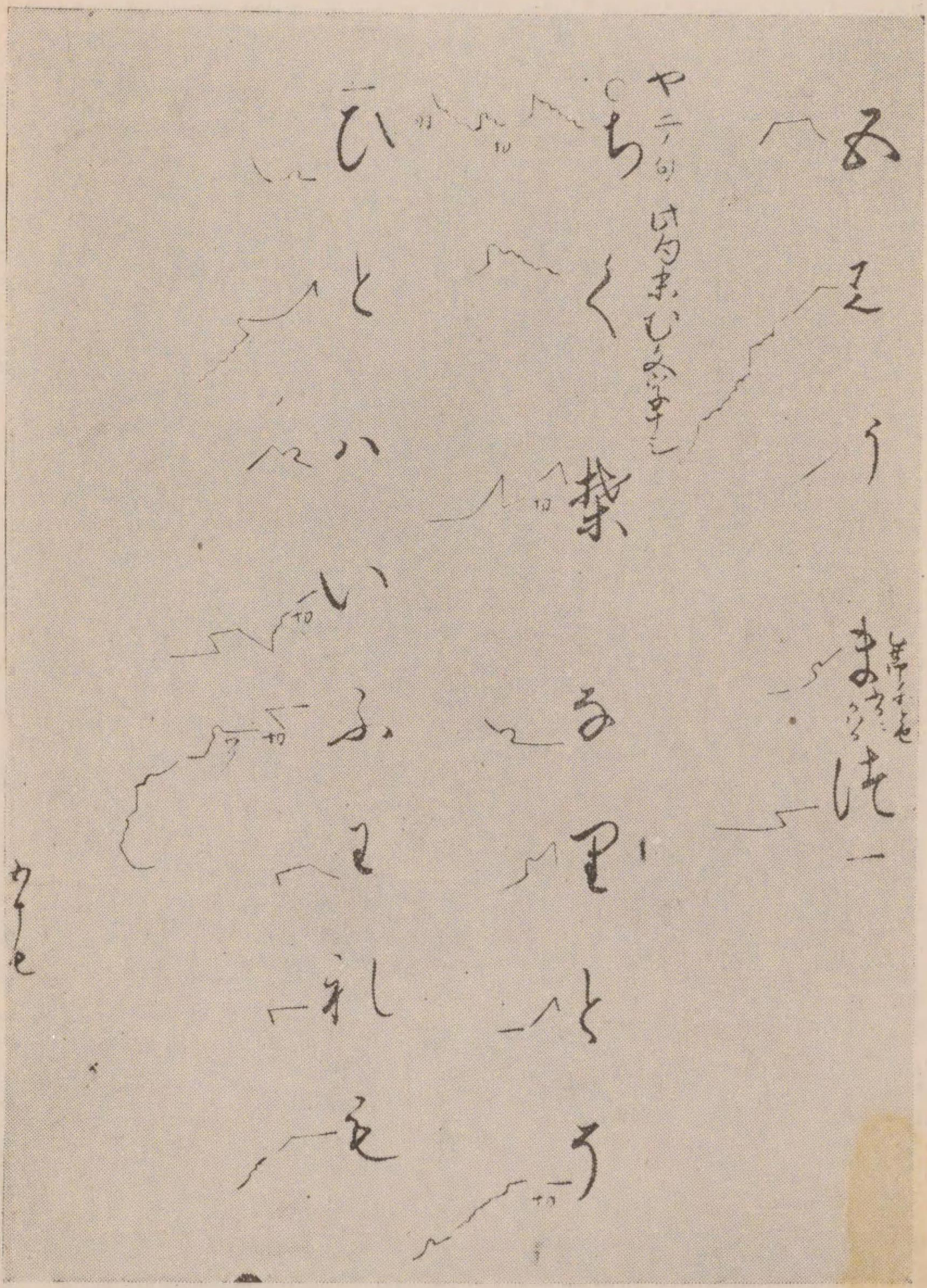
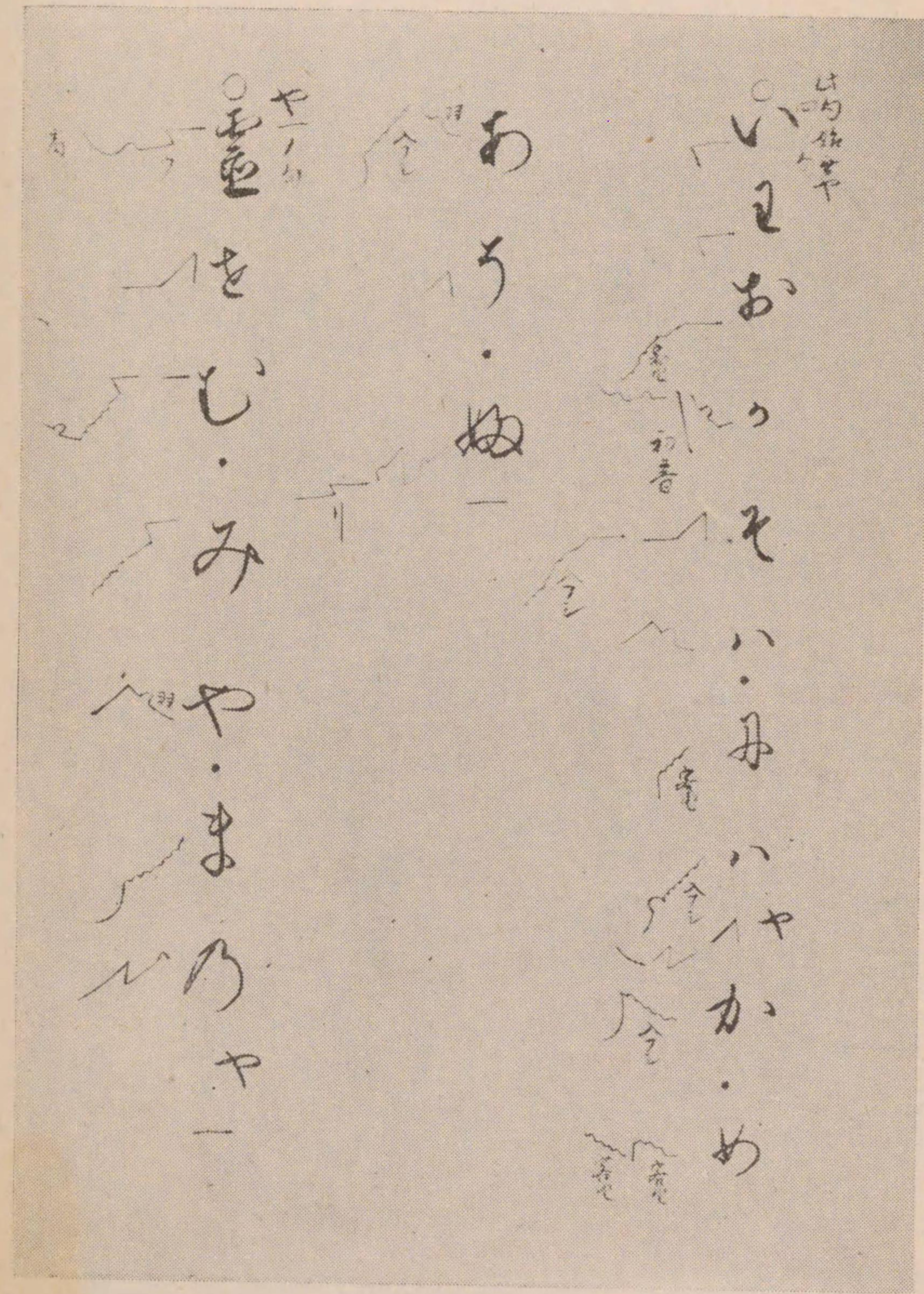
みのりとか

唯心房集 終

第十四 今様譜

今様 首之内略五首
蓬萊山 靈山郷山 長生殿
鶴群居 春始



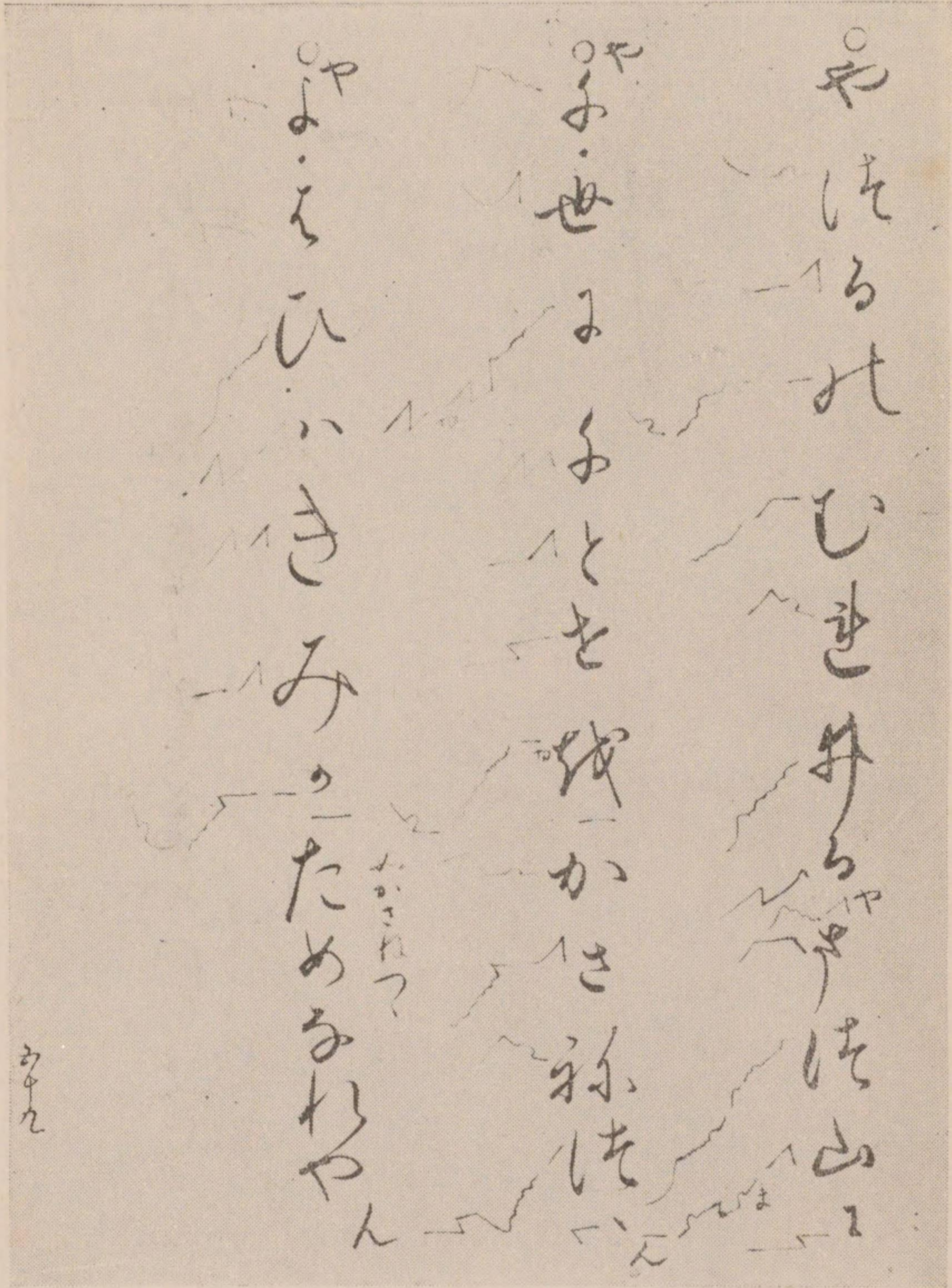
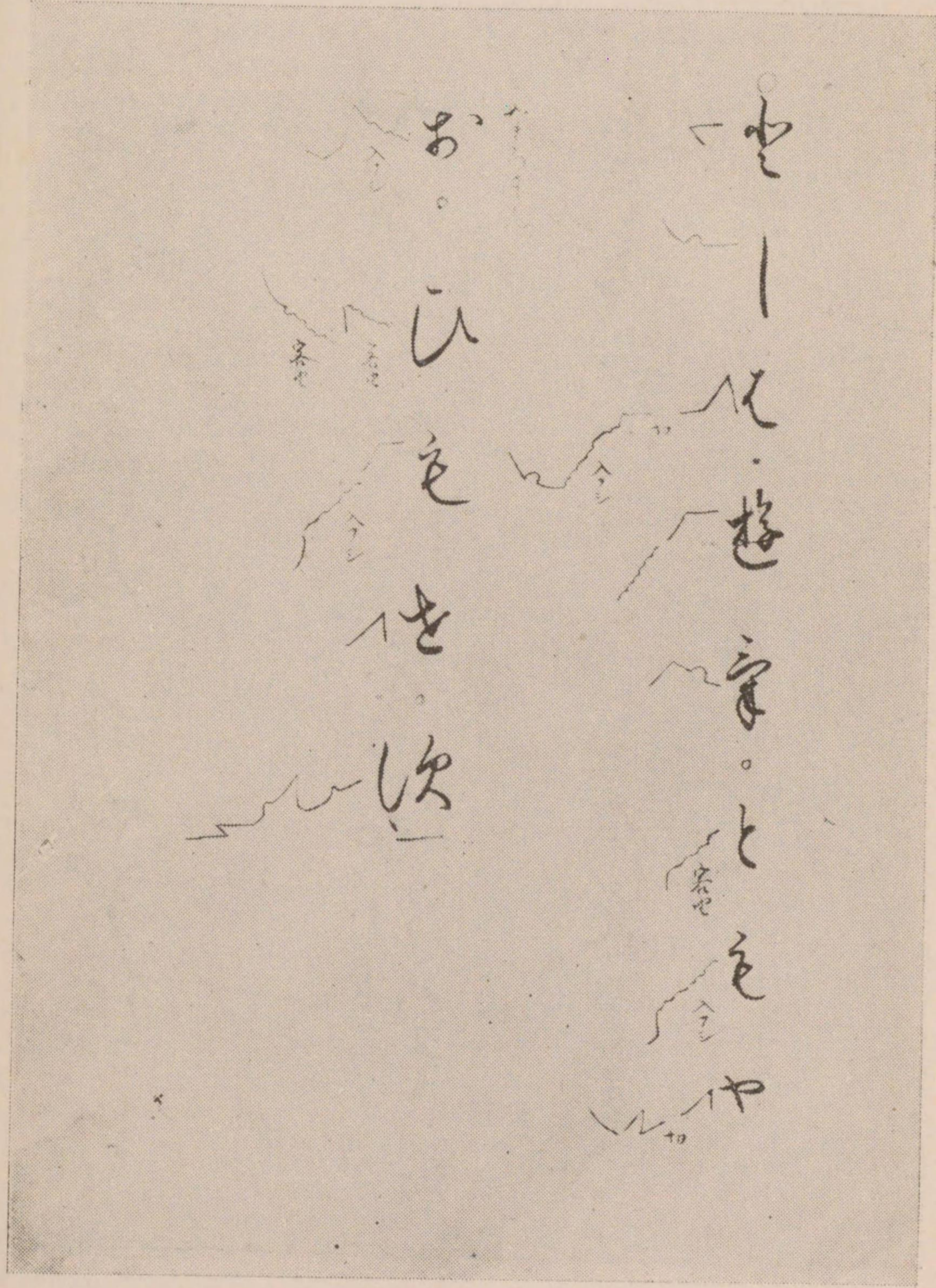


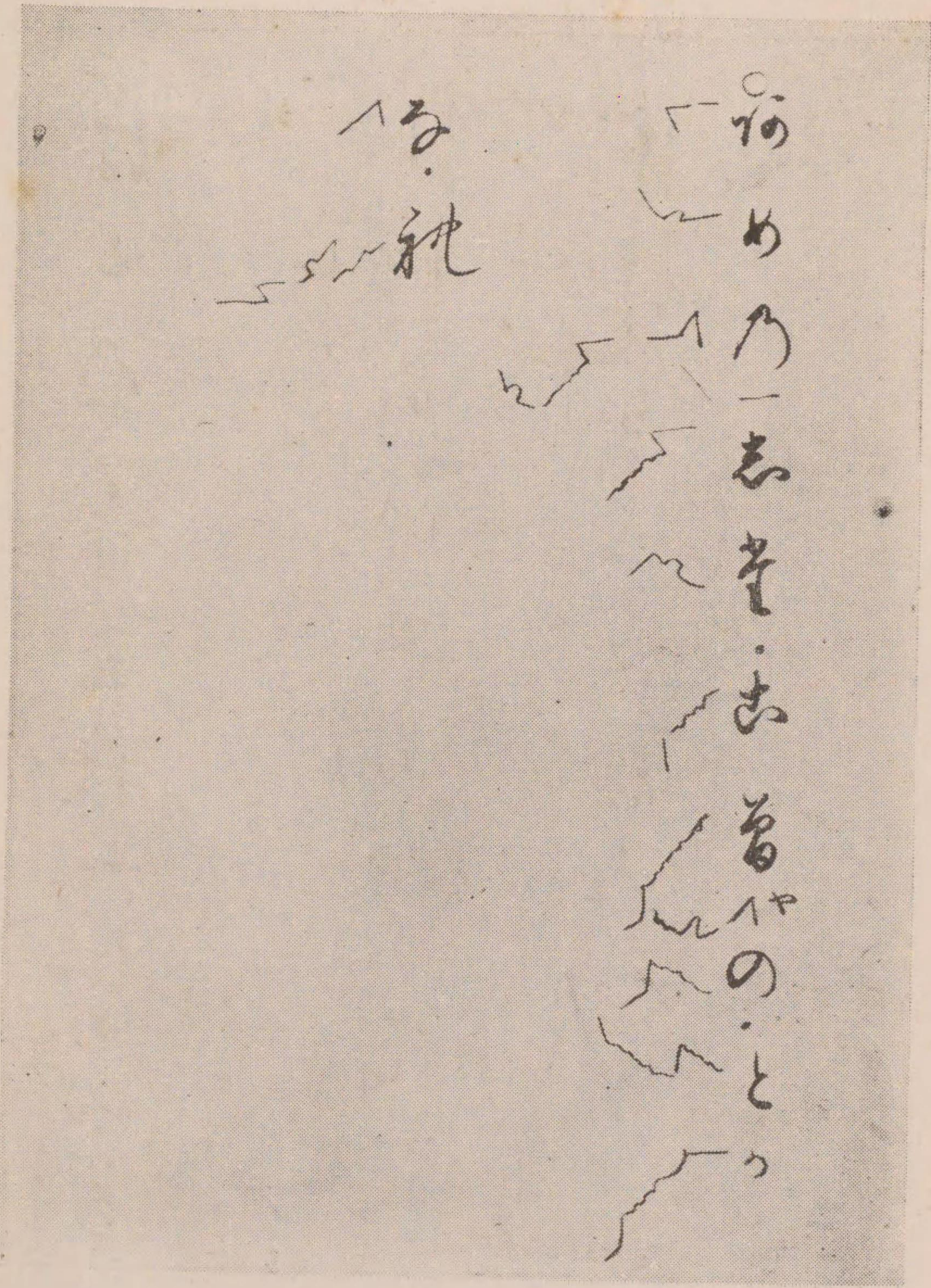
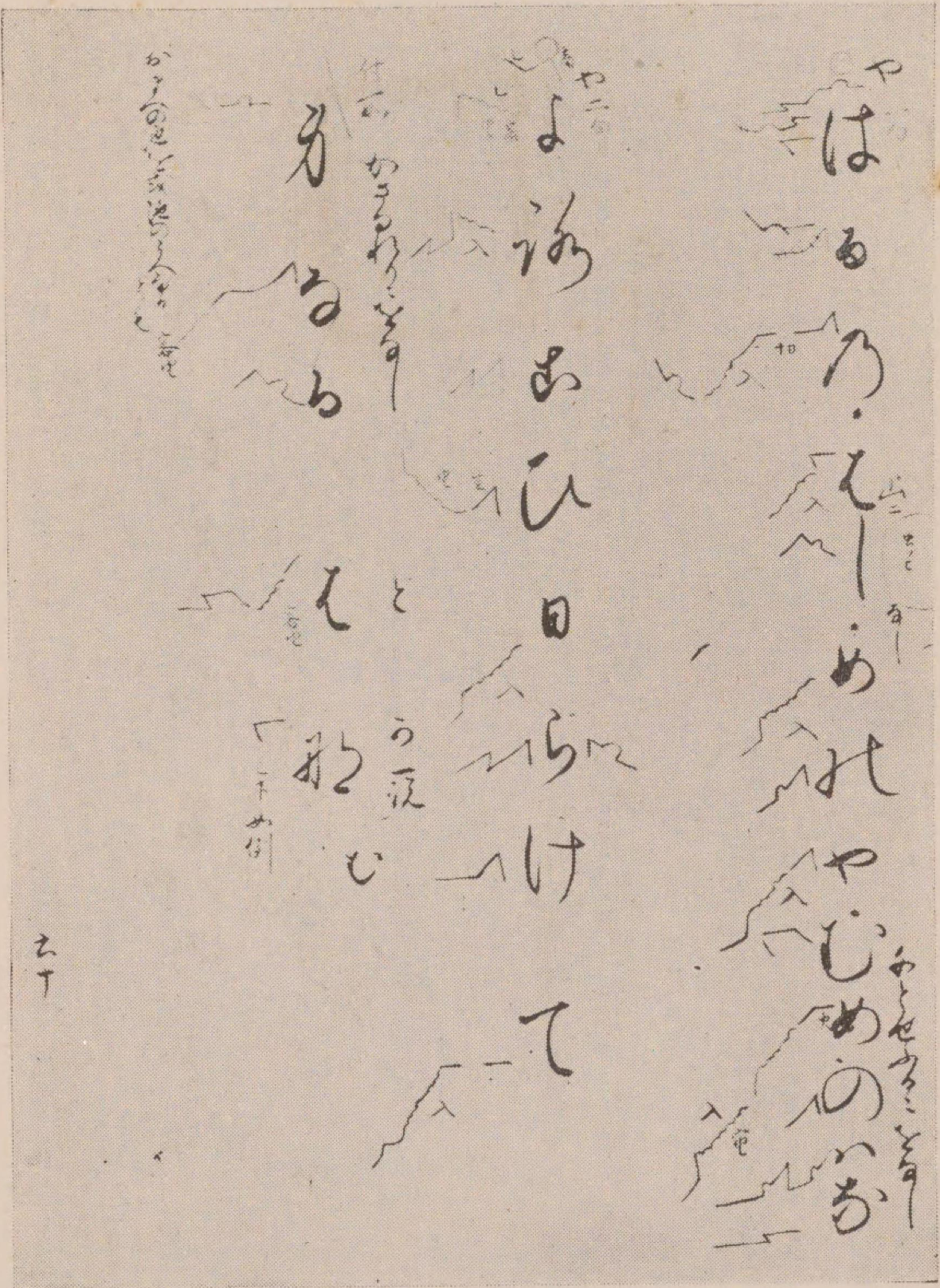
みあちく薬な
 を理毛
 志すあは
 ん
 福や乃か
 と

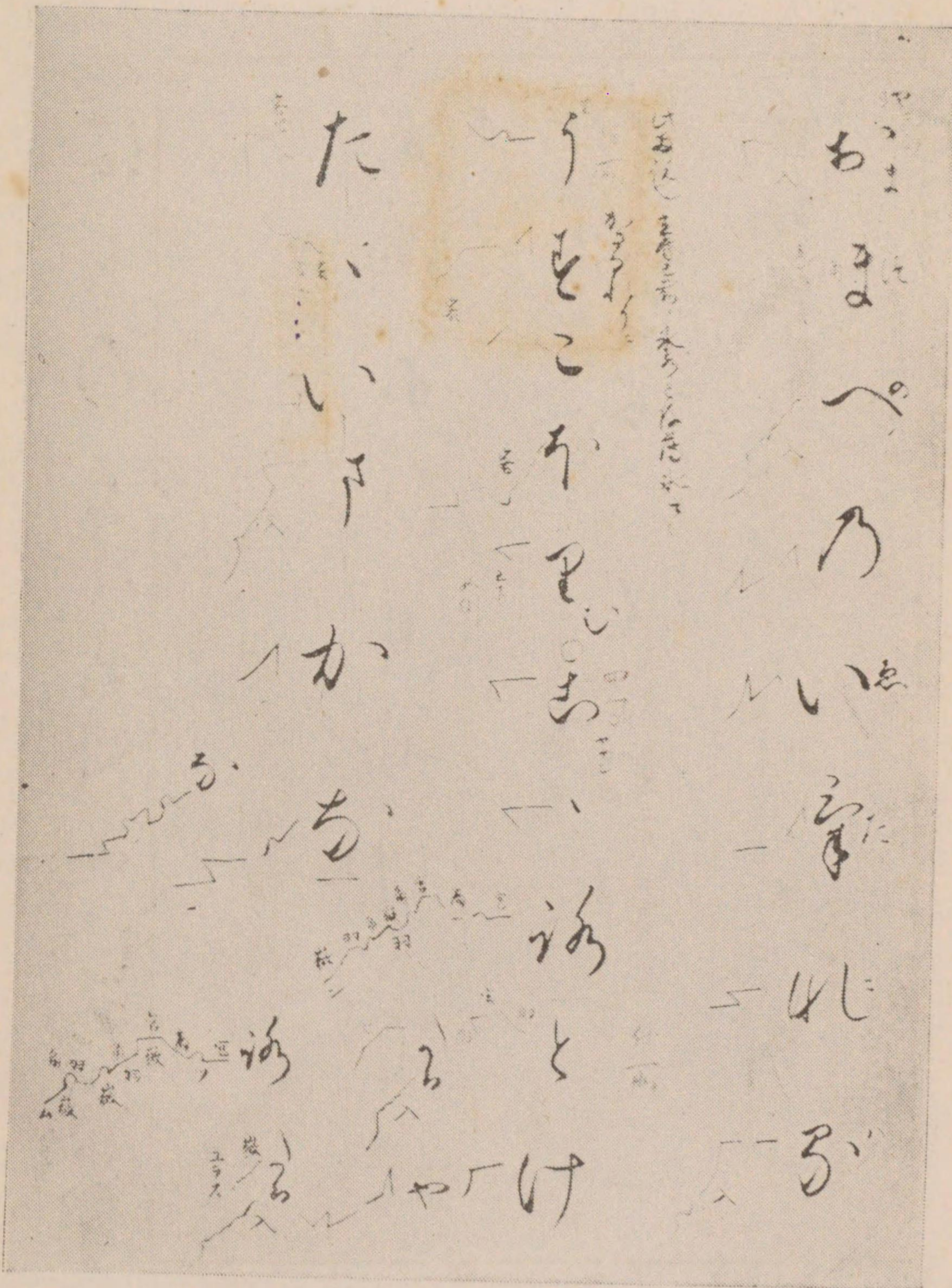
あつちのまふ
 あつちのまふ
 あつちのまふ
 あつちのまふ

や長生殿乃
 やふとせ此春
 不老門を
 たまを
 やうあまこを

あつちのまふ
 あつちのまふ
 あつちのまふ
 あつちのまふ







昭和四年一月二十日 印刷
 昭和四年 貳月五日 發行

(非賣品)



著作者	高野辰之
發行者	東京市外代々木中山谷一六七 神田豊穂
印刷者	東京市麴町區内山下町一ノ一 關根慶寬
	東京市牛込區早稻田鶴卷町三六二

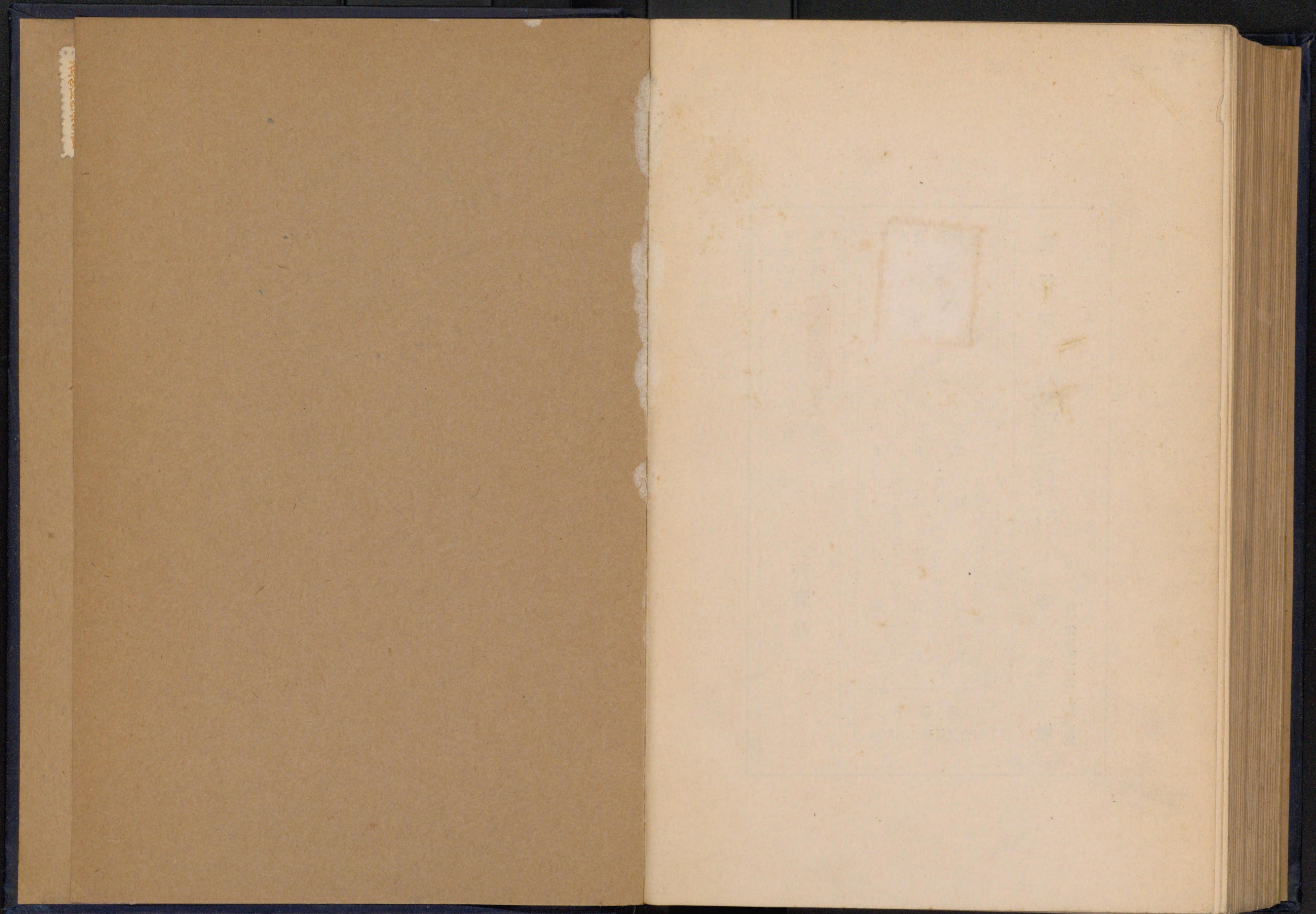
印刷所
 早稻田印刷株式會社

發行所

東京市麴町區内山下町一ノ一
 振替東京二四八六一

春秋社

電話銀座五六五二・五六五三



584
3

